
ピタゴラスちゃんのジレンマ

伊吹 由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピタゴラスちゃんのジレンマ

【著者名】

伊吹由

【あらすじ】

聖フイロソフィー学園・・・通称・テツ学。最近男女共学になったこの学園では、あらゆる生徒が哲学を中心に勉学に励んでいる。主人公のピタゴラスちゃんは、恋する乙女。勇気をふりしぼって、憧れの男子生徒にラブレターを届けようとするが・・・不可思議なミステリーに遭遇する。同じ俱楽部のデカルトちゃんやラッセルちゃんとと共に、そのミステリーに挑むのだが・・・事態は思いがけない方向へと進んでいく。数学、物理、化学・・・全ての学問は哲学に通ず。実際の哲学論理的思考あり、哲学バトルあり、推理小説の

よつな謎やどんでん返しあり・・・眞実を証明するには？神は存在する？因果律とは？あらゆる哲学的因素を盛り込み、ピタゴラス達は困難に立ち向かう。そして彼女たちが行きついた先に見たものは・・？

第1話 始まりはラブレター（前書き）

【哲学的な彼女】という企画に投稿を考えている作品です。この企画の要点は2つだと個人解釈。1つは「哲学に萌えを」（これ、企画側的には大事な点らしい）。そしてもう1つは哲学を知らない人が、「ふーん、哲学ってこんなものなんだ」と、入り口的な物が見える点。個人的には古代や近代あたりが好きですが、時空を超えてあらゆる世代の学者を登場させ、謎解きあり、哲学的論理解釈あり、バトルありという形で書いていきます。最後の最後には、多くの科学者が議論している1つのテーマを元に・・・推理的トリックを用意してますので、推理小説が好きな方は謎解きに挑戦してみてください。

第1話 始まりはラブレター

「…………

「 第1話 始まりはラブレター 」

「…………

3月14日。

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

「…………」

「はー?」

一気に目が覚めた。鳴り響く目覚まし時計を見ると・・・午前6時。

「…………」

なんかやけに・・・リアルな夢を見ていたような・・・?

「…………」

目覚ましを止め、夢の内容を思い出すが……思い出せない。

「やうだ！」

この日は、私……ピタゴラスにとって、大切な日。

・・・・・

いつもよりかなり早く起きた私は、午前7時前の誰もいない学園に登校した。

そして今・・・

ある靴箱の前に立っている。

「きょ、今日このラブレターを…
ルブラン君に…」

そう。私は今日、あこがれの男子生徒にラブレターを届ける。そのため、ほぼ徹夜でラブレターを書いた。1時間しか寝てないが、眠気はない。

「・・・・・」

直接渡す勇気なんてない私は、定番中の定番【靴箱にラブレター作戦】を決行するというわけだ。

「・・・・・」

学校の靴箱は、みな扉がついている。だからラブレターを入れて、扉を閉めちゃえば・・・誰かにそれを見られる心配はない。

「・・・・・」

右手でギュッとラブレターを握りしめる・・・自分でどんな内容を書いたか、今は覚えてない。見返すと、届ける勇気が削がれちゃいそうで・・・

「こののは・・・勢いが大事よね。

見直しなんかせず、私が思つたありのままの・・・

愛の言葉で・・・」

ラブレターを握りしめたまま、しばらく靴箱の前でたたずむ私。この土壇場に来て・・・

トクン　トクン　・・・

心臓が高鳴り、行動起こせない。

「このままじゃ・・・誰か来ちゃう・・・」

髪についたアクセサリーの三角定木を、左手で握りしめた。1：2：3の方。

「・・・・・」

30度を握ると・・・少し落ち着きを取り戻す。

「よしー。」

勇気を振り絞つた私は靴箱の扉を開け、ラブレターを押し込もうと・
・

「ー?」

したその時だつた。靴箱の中に・・・

【ルブラン君へ】

そう書かれた手紙が一枚、入つてゐる。

「ラ、ラブレターーー?」

ハートマークのシールが貼られた、ピンクの封筒。どう見てもラブ
レターにしか見えないそれを見て・・・

「だ、誰が・・・?」

私は呆然とした。

(第2話へ続く)

第1話 始まりはラブレター（後書き）

次回予告

謎のラブレターを手に取った私。その内容を盗み見た・・・
そしてこのラブレターを書いたのは・・・？

次回 「第2話 数学ガール？」

第2話 数学ガール？（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

三月、山田 里輔 性れるノーミニの春の華絃の口に
入れようと思つたら・・・

その靴箱の中に、何者かのラブレターが！？

第2話 数学ガール？

第2話 数学ガール？

「・・・・・」

靴箱の中を覗き込みながら、私は思つ。

「ありえない・・・」

私は昨日・・・最後に学校を出た。警備の人が出入口のカギを閉める直前まで、私は目の前の靴箱に三角定木をあてている。

ルブラン君がラブレターに気づいた時、最もインパクトを与えた
め・・・

【靴箱とラブレターのサイズは、どんな【比】であるべきか?】

この問題を必死で考えていた。

「あの時は、上履きしかなかつた・・・」

このラブレター、昨日はなかつた。だとしたら今日・・・

「私より、早く来た人が・・・?」

リーン・・・ ゴーン・・・ カーン・・・ ゴーン・・・

7時ちょうどのチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「…？」

学生用入り口が開いて、誰かが入ってきた。

「カントちゃん…」

「ど…・・・」

パニクつた私。靴箱の前で、あたふたとする。とりあえずカントちゃんに見えないよう、身をかがめた。

「あら～ こんな朝早く、珍しいわね～ … テカちゃん」

一つ向いの靴箱で、カントちゃんの声が聞こえる。

「ど、どひしょ…」

私は思ひがけず…

「…・・・・・」

靴箱に入っていた、何者かのラブレターをわしづかみにした。

「…・・・・・」

慌てて靴箱を閉めると・・・カントちゃんに見つからぬよう、足早にその場を立ち去る。

「・・・誰が・・・？」

主のわからぬラブレターを握りしめ、自分の教室【古代組】へと走つて行つた。

・・・・・

教室にカバンを置いたあと、トイレへ駆け込む。誰もいない個室に入ると・・・

改めて

【ルブラン君へ】

と書かれたラブレターを凝視した。

「・・・」

裏を見ると

【f r o m 】

そう書かれている。【】? 何? なんて読むの?

「・・・」

封を開け、中身を取り出した。中にはたつた1枚、真ん中2つ折りの便せんがあるだけだ。

卷之三

人のラブレターを盗み見る事に抵抗はあるけれど・・・

—
•
•
•
•
•
•
•

私はそれを広げ、読み始めた。

愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もっとあなたの・・・近傍に入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・

メールアドレスを教えてくれたら・・・

毎日メーラー展開します

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？

それじゃ、放課後・・・

お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P
S
•

あなたにとって、私が十分である必要はないけれど、あなたにとって必要になれば、私は十分です。

—

• • •

そのラブレターを見て、呆然とする。

—なんて、センスのいい……

そして・・・

「これなら川一ノン君を……落とせる」

心が死んで思ひ力と同時に確信する

「」…・・・・・

数学俱楽部の人間たゞ々々 間違しない

恋敵は
・
・
・

私の所属するクラブにいる。

(第3話へ続く)

第2話 数学ガール？（後書き）

次回予告

手紙の主は、私の所属する数学倶楽部にいる。
そう確信した私は、授業が終わった後・・・部室を探つてみた。

次回 「 第3話 数学倶楽部 」

第3話 数学俱楽部（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・すでに誰かのラブレターが入っていた。それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学俱楽部に違いない。

第3話 数学俱楽部

午後3時。

最後の授業終了を告げるチャイムがなった。ショートホームルームを終えた私は、すぐに部室へと向かう。

【数】
【学】
【俱】
【樂】
【部】

部室の前にある、古びた立て看板。それを横田に勢いよくドアを開け、中に入つていった。15畳はある、まあまあ広い部屋。

「・・・・・」

部員は結構いるはずだが、9割以上は幽霊部員。入り口に入つてすぐの壁には・・・数学俱楽部の部員が書いた、書き初めが貼られている。

【人間は、考える葦だっぴょん】

1番手前にあるのは、顧問であるパスカルちゃん先生の言葉だ。その横に、部員の言葉が続く。

【前に進んでるって？ 嘘、嘘！】

【我思ひ、 ゆえに我萌え】

【万物の根源は・・・ 水であるけー】

【ナマギーリ女神の、 おかげです】

【ひとなみに、 おひつてよー】

正直言う。私はこの【ひとなみに・・・】の作品、大嫌いだ。

【神。 お前はもひ、 死んでいる】

【余白が少なねーってばーー!】

【こまいまじいフレンチマドモアゼルー】

【みんなの幸福の総和が、 大きくなりま

用紙に入りきれてない。

【3・2・1! ラッセル ラッセル】

【天ではない、 地が回っているのだ!】

・・・・・

このような「」の言葉を書道作品にしたものが、卒業生も含め50枚
ぐらいある。

【 $3^{\wedge} 2 + 4^{\wedge} 2 = 5^{\wedge} 2$ 】

私は自分の作品を見ながら推理した。

「ラブレターの主は・・・
学園の窓から見つめていると言っていた。

ならば卒業生は、犯人じゃない・・・」

私は自分も含め、在校生の作品を眺める。

「ちょうど20枚。その中に犯人が・・・」

いつの間にか私は・・・あのラブレターの主を【犯人】と呼んでいた。

部室の中をさぐり、何か犯人に繋がるものがないか見て回る。でも・・・

「！」の部室。基本、紙と鉛筆と本しかないよね・・・

あとは、真ん中にテーブルが2つ。その周りに椅子が数脚あるだけ。本は結構あるけど、全て数学書。数冊の本を手に取り、パラパラとめくるが・・・

「・・・」

犯人に繋がるようなものは、見つけられない。簡素な部屋ゆえ、部屋の中の搜索はすぐに終わった。

「・・・・・

犯人の手がかりは得られず、三角定木で頭をポリポリとかく。1：2の方で。

キーン　コーン　カーン・・・

校内放送だ。

【 昨夜、校舎の屋上に小さな隕石が落下しました。

一部、金網に破損がありましたので、現在修復中です。

修復作業が終わるまでの間、全校生徒の屋上への立ち入りを禁じます】

キーン　コーン　カーン・・・

「・・・・・」

そう言えば昨日・・・何とか流星群の隕石が屋上に落ちたって、誰か言つてたな。まあ、私は星には興味ないけどね。

そんな事思ついたら・・・

数少ない部員が入ってきた。

(第4話へ続く)

第3話 数学俱楽部（後書き）

次回予告

部室に現れたのは、同じ数学倶楽部のテカルトちゃんとラッセルちゃん。

この日の数学倶楽部では、【集合論】を専攻しているラッセルちゃんの講義。講義の途中、4人目の人物が部室に入ってきた。

次回 「 第4話 デカルトちゃんとリッシュセルちゃん 」

第4話 テカルトちゃんとリラ・セルちゃん（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取つた私は、じつそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学俱楽部にいると確信し、部室を探つてみた。

でも、何も手がかりを得られず・・・

第4話 デカルトちゃんとラッセルちゃん

第4話 テカルトちゃんとラッセルちゃん

部室に入つて来たのは2人。

「はわ？ Pちゃん。今日、早いですね~」

私の事を【Pちゃん】と呼ぶのは、【近代組】のテカルトちゃん。

「おひ？ ピタ子。教団の集会、今日はないの？」

そして【ピタ子】と呼ぶのは、【現代組】のラッセルちゃんだ。

・・・・・

「こじで簡単に・・・私から2人を紹介しておこひ。まずはテカルトちゃん。【TRUTH】と書かれたバッグを持ち歩き、ポニーーテールを水色のリボンで止めている。そんな彼女は・・・

校内1の遅刻魔で有名。

「無理して起きたら死んじやうもん~」

が、口癖の基本ワガママっ子だが、何故か校内にファンクラブもあるほど人気度は高い。ついでに言つと・・・非常に疑り深い子で、何か気になる事があれば

「ない・・・絶対とは言えないから・・・

意地悪な悪靈さんに、ダマされてるから・・・はわわ・・・」

とにかく疑えるものは疑つてかかる。【「れは疑えないだろ?】つて事に関しては【悪靈】が登場する事になるらしいけど・・・むよつとイタ子? その【悪靈】の前では、全てが疑う対象となるらしい。

「疑惑の事は萌え~」

未だに理解出来ないが、彼女ことひで【疑惑】事は【萌え】に繋がるらしい。あと正直言つけど・・・

「でもね。『テカちゃん』・・・

疑惑の事は萌え~の自分だけは・・・

絶対いるのよね~」

自分の事を【『テカちゃん』】とこのひで、ちよつといきなつとくへる。とりあえず『テカルトちゃん』の紹介はこの辺で。ラッセルちゃんの紹介は・・・後でね。

・・・・・・・

「今日も『テカちゃん』、遅刻しちゃいました~」

「また? 『テカ子』、出席回数やばくね?」

ラッセルちゃんは、『テカルトちゃんの事を【『テカ子』】と言へ。

「・・・・・・・」

「そうなんですよ。

『デカちゃん、出席日数微妙なんですよ。

はわわ・・・

1つ確かな事がある。

デカルトちゃんは犯人じゃない。手紙の主は私より早く登校し、ル
ブラン君の靴箱にラブレターを入れている。

あれ？ でも待ってよ・・・？

「デカルトちゃんさー。今日の朝・・・学校来てなかつた？」

「はわ？ 無理して起きたら死んじやうもん～」

出た。

「今日も『デカちゃん。超遅刻ですよ！』

いや、そこで胸を張られても。

「でも私・・・

朝、靴箱のところでカントちゃんが言つてたの、聞いたわ・・・

【いんな朝早く、珍しいわね。『デカちゃん』って・・・

確か・・・そづ言つてたわよね？

「デ力ちゃん、今日起きたの・・・12時ちよつじよです。
学校来たのは、お昼の2時ですから～」

今、3時過ぎだけど・・・何しに学校来たんだ、この子？

「あのやう・・・僕の推理が正しければ・・・」

ラッセルちゃんは、自分自身の事を【僕】と言つ。

「多分、僕と同じクラスのハイデガーちゃんの事だと思つよ。
彼女、【デガちゃん】って呼ばれてるし」

なるほど。

「そりか〜・・・私の聞き間違えね。
デ力ちゃんじやなくて、デガちゃんだつたのね・・・」

まあおかげで・・・

朝が苦手なデカルトちゃんは、真っ先に犯人候補から除外された。

一方、ラッセルちゃんは・・・

「さあ、今日は昨日の続き・・・僕が集合論の基礎、教えるからね
」

あの手紙の主の可能性はあるのだろつか？

・・・・・。

では、iji jirachelleちゃんの紹介。

何を隠そう、数学俱楽部の部長。ミニスカ + ベソ出しルック・・・。ちょっと時代遅れな感はあるが、ツインテールの元気な女の子。かの天才アイアン・ショタインちゃんとも仲が良く、校内でも随一と言われるほど豊富な知識を持っている。

部長は集合論を研究してゐるらしく・・・。iji最近の数学俱楽部では、毎日部員相手に集合の話をしてくれている。もつともそれを聞くのは、私とデカルトちゃんの2人だけ。あとは幽霊部員だし。

いっけんしつかりものの部長だが・・・まあ、その本性は次のエピソードで解る事になるでしょう。

・・・・・

「はわわ～ 昨日の【空集合】は難しかったです～」

「集合論はロジックとも密接につながってるんだから。

デカルト、論理的に【神の存在】を証明したいんでしょ？

じゃ～、ちゃんと学ばなきゃダメよね～」

集合論を学ぶ事は、哲学を学ぶ上でとても大事だと部長は言つ。私達にゲーテルちゃんの【不完全性定理】まで教えると言つているんだけど・・・正直難しいのよね、集合論。でもこれらを学ぶ事は、哲学的にも大きな意義があるんだって。

私は哲学者として成長したいから・・・難しくても頑張つて勉強す

るー

ちなみにこの【集合論】は数学の世界でも割と新しい研究分野らしく、聖フイロソフィー学園の中でも【現代組】の子達しか学んでいない。

果たして【古代組】の私と、【近代組】の「カルトちゃん」に理解出来るのかしら？

昨日の部長の講義で、【部分集合】と【空集合】について学んだ私達。

「昨日習った・・・

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】。

私も、そこがよくわからなかつたわ」

空集合とこりの人は、中身が空っぽの集合の事なんだけど・・・そんな集合考えて、意味あるのかしら？

まず【 x が集合Aに属する $\quad x$ は集合Bに属する】が成り立つとき、AはBの部分集合とこり。

例えば、

$$A = \{1, 2, 3, 6\}$$

$$B = \{1, 2, 3, 4, 6, 12\}$$

ところ2つの集合の場合、 x がAに属している（ x の場合、 x は1, 2, 3, 6のどれかになる）ならば、その x はBに属している。だから、AはBの部分集合なのだ。

「それはわかるんだけど・・・」

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】と部長は言つ。

「だつたら・・・

【 x が空集合に属するなりば、 x は全ての集合にも属する】・・・

それが成り立つって事よね?」

「そだよ」

即答する部長。

「でも、空集合って・・・中身空っぽなんだからさ・・・
 x が空集合に属するって・・・おかしくない?」

「デカちゃんも、ソレ・・・よく、わからなかつたです~」

「OK。じゃあ、今田君集合とかいつめて、論理の基礎を教えよう~」

私達はテーブルの周りに座つた。

「まぢは・・・

【デカ子がテストで100点とつたなりば、僕がケーキおじる】

って、命題あつたとするわよ~。」

命題といつのは【正しい】か【正しくない】かが、ハッキリとしている文章や数式の事。

あらゆる真理探求命題の真偽を議論するのも哲学の一つ。例えば命題【神はいる】とかね。

あー、勘違いしないでよ。命題【神はいる】ってのは【神がいる】事を、必ずしも言つてるわけじゃないの。命題つてのは【正しくない】とハッキリわかつてる事に対しても言つんだ。だから【 $2 + 3 = 100$ 】のように、完璧間違つている事も立派な命題なのだ。

一応私達の認識では【神はいる】か【神はない】かの2択でしょ？なので神がいても、いなくても・・・【神はいる】は命題の一つなの。

【テカ子がテストで100点とったならば、僕がケーキおじる】

部長は紙にその命題を書き、テーブルの真ん中に置く。

「デカちゃん、ケーキ、大好きです~」

「いや、例えだから・・・で？ 部長、続きを」

「ケース1。

デカ子が100点とった。そして僕がケーキおじった。

「の時の命題は・・・正しい？ 正しくない？」

「それは正しいです～ 100点とったんだから～
デカラちゃんがケーキご当地になるのは、当然です～」

「ま・・・ 疑う余地はない。正しい」

「正解。じゃあ、ケース2。

デカラ子が100点とったのに・・・僕がケーキをおいりなかつた。

「この場合、この命題は正しい？」

「それは間違つてしまへ～」

「うん。100点とったたらケーキおいしんだから・・・
100点とったのに、おいらなこののはおかしいー！」

だからこの時、命題は・・・正しくない・・・

「OK！ ではケース3。
デカラ子が100点とらなかつたので・・・僕はケーキをおいりなかつた。

「この時、命題は正しい？」

「正しいです～」

「うん、私も正しいと思つ。

100点取れてないから・・・ケーキもいらないのは当然

「よし！ 今のところ、全て正しいと/orスト！ ケース4！

「デカ子が100点とれなかつたのに……僕はケーキをおいひつた。

「この時、命題は正しい？ 正しくない？」

「これは……正しくないです」

「私も正しいと思ひつ」

ガラリ！－

その時……部室に入つてくる人物がいた。見覚えのない顔……誰？

「ラ・・・・ラマヌジヤンちゃん！？」

部長が裏返つた声をあげる。「ラマヌジヤンちゃん？」

「あら・・・ラッセルちゃん」

名前、聞いたことある。確か部長と同じ、【現代組】の子だ。肩まで伸びた真っ黒な黒髪と、大きなクリツとした黒い目。見た目からして、インド出身だらう。何となく、神秘的な魅力がある。

「な・・・ 何故、ここへ？」

そして数学俱楽部の……幽霊部員の一人でもある。

「ただ・・・ 私の本を取りに来ただけ・・・」

【トトカ子がテストで100点とったなら、僕がケーキおる】

「…………」

「ママヌジヤンけやんが、部長の書いた命題をじつと見つめた。

「あ、デカルトちゃんが100点取らなかつた時にね……部長がケーキをあげたら……この命題は正しいから話を一かいつて話をしてたの。

私とデカルトちゃんは、正しいなにつて思つただけだ……」

「絶対正しいです~」

命題は正しいといつ私とデカルトちゃんに對し……「ママヌジヤンけやんは、首を横に振つて「うづづ」た。

「それ……正しいわよ……」

「え？ 瞳……」

「はわ？」

思わず声をあげる私達。

「何で……？ 100点取つたらケーキをあげてもいいんだな……」

・ 100点取らなかつたら、おもひてもいいんだな……

なんでこの命題が……その時、正しこいつて言えるの？

「わかるの。ナマギーリ女神のおかげで……」

「え？」

「はわ？」

そう言いつとラマヌジヤンちゃんは、一ツ「コトヒトリ」と優しく笑顔を見せる。

いや……笑顔はステキだけど……な、何? ナマギーリが何とかって?

部屋の奥の方へ行ったラマヌジヤンちゃんは、数冊の本を手に取ると……

「それじゃ……私はこれで……」

そのまま笑顔で、部室を出て行った。

「…………」

「はわわ~…………」

彼女が出て行く姿を呆然と見つめていた私達。

「なんだか……不思議な子ね……」

閉じた扉を見ながら、私は呟いた。

「まあ・・・天才と何とかは、紙一重らしいからね。僕にもあの子は・・・イマイチわかんないだよね~」

そう言えば、ラマヌジャンちゃんは・・・かなりの天才肌だって聞いた事ある。

「はわわ~ でも、ホントにラマヌジャンちゃんの言つ通り デカちゃん100点とらなかつたのに、ケーキをおいしくらいつて・・・

この命題が正しい事になるんですか~?」

「私も・・・信じられない・・・」

半信半疑の私達は、部長はおつぱりと叫ぶ。

「うん。正しい」

え! ? ホントに! ?

「論理の世界では正しいんだ。こう考えるといー。」

例えばデカ子が99点取つた。そこで僕はおつかひ。

【100点じゃないが、よく頑張つた! だからケーキをおいしく

【う~】

ど? そこまで成り行き、割と自然じゃない?」

「自然です~ ケーキ、欲しいです~」

「う~ん・・・ それは自然に思えるけど・・・」

「いい？」

【デカ子がテストで100点とったなら……】とこいつ命題。

これは100点をとった時の事を言つてゐるだけで……

「うん……」

「100点を取れなかつた時の事は一切言つてない。
デカ子が100点取れなかつた時……」

僕がケーキおじいちゃんの命題を否定してゐる事にはならない
の」

「なるほど～～～ デカちゃん、わかつたです～～～」

「…………」

デカルトさんは納得してゐるようだけど……私は……

「結論。【 $\neg p \vee q$ 】とこいつ命題を考へる場合……
前提 p が正しくなことき、 q が正しくても正しくなくとも……

命題【 $\neg p \vee q$ 】は、正しい事になるのよー。」

$p \quad q \quad p \quad q$

T	T	T	T
F	T	T	F

F — T — T
F — F — T

部長は「こんな表を書いた。

「これ、 真理値表って言つんだ。

Tは【T R U T H】で、【真】つて意味ね

「デカちゃんのバッグにも、【T R U T H】つて書かれています～」

「そうそう。まさにそれ！ 【真実】とか【正しい】つて意味。

「は【F A L S E】。もひるん【偽】【正しい】つて意味ね」

「うーん・・・」

しかめつ面の私。

「はわわ～。確かに【o】が【偽】の時、【o o】は2つとも【真】です～」

「だから

【x】が空集合に属するなひらば、xせどいの集合にても属する【en】の命題自体は正しい事になる！」

はそ・・・

前提の【x】が空集合に属する】がすでに間違つてゐから・・・
この命題自体は正しい事になる！」

「むむむ・・・」

まだ微妙な理解の私。

「ねえに【空集合は全ての集合の部分集合である】ってわけ！
ん~。Q·E·D·ね」

「『デカラちゃん、わかつたで〜』

「「う~ん……」

論理は難しい。

「う~ん……

この日の部長による【集合論講義】は終わった。何となく解ったような、解らなかつたような……

「ピタ子さま、今日もブラジャーつけないよな？」

講義を終えた部長が、私に声をかけてきた。

「え？」

わざわざも言つたけど、私の事を【ピタ子】と呼ぶんだけど……

「『デカラ子のブラジャーは認めるけどね〜』

デカルトちゃんは【デカラ子】と呼ぶわけで。

「……」

つい、自分の胸を覗き込んだ私。明らかに……

胸の大きさで【デカ子】【ピタ子】と呼んでいる。失礼な！

「こじだけの話、ラッセルちゃんの胸は……

ペッタンゴだ。

「僕、思つんだナビ。ピタ子に・・・、ブリ、必要ないよ？」

胸がつるぺたで、自分を【僕】と称するので・・・時々、男の子に間違えられる部長。本人は男の子と間違えられる事をすくなく嫌うので、そこをイジつたりはしないんだけど・・・

「あのね、部長。前も言つたけど・・・

私・・・こう見えても、Bはあるんだから・・・」

思わずそう言つてしまつた私。だつてラッセルちゃんよりは胸あるのよーこれは真実ーー！

「ひつ見えても？ 見えてないけど？」

出た。この言い方は彼女の作戦の一つ。

「ぐ・・・だ、だからそれは・・・ 例えであつて・・・

わかつてはいるんだけど・・・

「ピタ子、【見えて】と仮定しているの・・・
見せないつて事？」

いつも、ラッセルちゃんの術中にハマってしまう私。

「や・・・それは・・・そりよ・・・」

「見せないんならそ・・・

【こう見えても、私はHカップ】 とでも言えるじやん!』

なんていうか・・・ 人の揚げ足をとるのが絶妙なよ、部長は。

「や・・・ そりや、そりだけど・・・」

「つまり本当はAでも、Hだと言う事が出来る・・・」
見せないこと前提なら・・・何でもありじやん!』

「う・・・

「言い返せない私。後で知る事になるんだけど・・・」
これは昔の哲学者
者の常套手段、【詭弁きべん】といふものらしい。

「結局はさ。ブラを脱げ!としなにってわけよね?』

「う・・・

始まった。

ラッセルちゃんは・・・1年前、通称【ブラバラ事件】を起こした
張本人。いわゆる【ブラジャー・パラドックス事件】。この事件は、
彼女の集合論的パラドックスの追求による結果起きたらしいんだけど・・・

説明すると話が長くなるので、この事件の詳細は【番外編?】に預ける。

「さよ、今日はスポーツブラだから……」

「えへ・・・ハズし甲斐ない。なつせる~」

なつせる~

明らかにテンション下がった部長はちょっと落ち込んだ後、私を見た。いや・・・私の胸を見た。

「じゃあ、スポーツブラの先に豆つけたら?

おっぱい、大きく見えてセクシーになるよー。」

私が豆、大嫌いなのを知つてて言つてる。ここでカッとなつたら、またさつきの繰り返しだ。

「豆つけたら・・・ラッセル、ラッセル~」

とにかく彼女は下ネタが大好き。あと、オヤジギャグも。てか、中身はただの【エロセクハラ中年オヤジ】だと断言していい。

数学や哲学やつてる時は超真面目なんだけどな~。

「・・・・・・・」

私は思つ。このエロオヤジが、あんなセンスのいいラブレターを書いたなんて・・・まず、ありえない。そうとなれば・・・

「ねえ。あなた達・・・」

私はテーブルの上に・・・

「ちよっとコレ・・・見てくれる?」

あのラブレターを置いた。ひと癖もふた癖もある連中だが・・・

「はわ?」

「何?」

この数学俱楽部で、数少ない毎日顔を見せる部員。

「コレ、誰が書いたか・・・わかるかな?」

そして、頭はキレる子達だ。

「はわ? ラブレター? いやいや・・・
これがラブレターとは・・・簡単には信じないです~

何かの罰ゲームの可能性もあります~・・・

私は中から便せんを取り出し・・・それも広げて見せた。

~~~~~

愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。  
もっとあなたの・・・近傍に入りたい。  
(きんぱう)

私の心はあなたに収束中・・・  
限りなく近付いています。

メールアドレスを教えてくれたら・・・  
毎日メールー展開します

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。  
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうぞ。いつ?  
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・

お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P・S・

あなたにとつて、私が十分である必要はないけれど・・・  
あなたにとつて必要になれば、私は十分です。

~~~~~

「有界名閉集合にして、この文章センス・・・」

「部長、何言つてんの?」

「「ンパクトなのにセンスがいって言つてんの!」
まあ、僕ほどじやないけどね」

「・・・」

部長のギャグには、センスのかけらもない。

「玄関の前で、コレ落ちてるの見つけてわ・・・」

私は嘘をつく。愛のためなら、嘘だって平気。

「落とし主に、返してあげたいんだけど・・・」

これも嘘。私以外に誰がルブラン君を狙ってるから知りたいだけ。

「だからコレ・・・誰が書いたと思ひ？」

「うして・・・数学俱楽部に所属する私・ピタゴラスと・・・

「デカちゃん的には～まずは部員、全員を疑つてみる！
手紙の主は・・・

あなたよ！ デカちゃん！」

朝が弱く、疑り深いデカルトちゃん。そして・・・

「僕が犯人？ ち！ バレちゃ～しちゃうがない・・・
どうせ有罪は確定だ。それならば・・・

「お前のブラを頂く！」

私のド下手な物真似をする部長。すなわちエロオヤジの「ツッセルち
やんの3人で・・・

「おひー！ テカ子ー！ 僕にお皿を見せなさいー！」

「はわわ～（笑）」

「Jのラブレターの主を探し出し・・・

「あまいわー！ ラッセルちゃんー！

『デカちゃんが、女の子と信じて居るようだけど・・・

果たして真実かしらー・？』

そしてその子が【犯人】である事を証明するため・・・

「そんなの・・・ブラを頂けば、解る」とー・

「それはどうかしらー？ 仮におっぱいがあったとしても・・・
意地悪な『靈さんに』、ダメされてないかしらー！？」

動き始めた・・・

のか？

（第5話へ続く）

第4話 テカルトちゃんとリッシュセルちゃん（後書き）

次回予告

1年前に起つた、【ブライヤー・パラドックス事件】。

これはラッセルちゃんの、集合論的パラドックスを追求する事がきっかけで起こった。最初の犠牲者はカントールちゃん。

そして
・
・
・

次回 「 番外編 ? ブラジヤー・パラドックス事件

番外編？ ブランジャー・パラドックス事件（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取つた私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

それを盗み取つた私は、こつそり中を読む。手紙の内容が
を書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違ひない。

同じ数学倶楽部のテカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

番外編？ ブランジャー・パラドックス事件

番外編？ ブライジャー・パラドックス事件

番外編？ ブラジャー・パラドックス事件

今から約1年前・・・

その事件は起こった。

【現代組】所属のラッセルちゃん。昔から自分より胸が大きい子を見ると、ブラジャーをハズしたくなる衝動に駆られる子だった（これは本人も認めている）。

ある日彼女は

【自らブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

の存在について考えてみたらしい。そして、本人曰く

「僕も【自らブラを脱ごうとしない子の集合】に属している」

との事。やうすると、どういう事が起こるか？

「僕はブラを脱ごうとしない女の子から、強引にブラをはぎ取るから・・・

自らブラを脱ごうとしない僕自身の、ブラもはぎ取らなければいけない。

でも、そうすると・・・自らブラを脱いでいる事になってしまい

・

まさにパラドキシカル！！」

血口存在のパラドックスに直面した彼女は興奮し、あわいとか・・・

【血口ブラを脱げりとしない子から、強引にブラをはぎ取る儀】

を【実践】する事を決意。本人曰く、それも立派な哲学的実践だと・・?

とはいって、そのためにやるべき事といえば・・・

明かだ。

最初の犠牲者は、同じクラスのカントールちゃんだった。ラッセルちゃんは彼女に・・・

「ねえ、ブラとつて

と言つた。

「は? 何言つてんの? 嫌に決まつてるじゃん!」

といつカントールちゃんの返しに対し・・・

「ふ・・・ 血口ブラを脱げりとしないわけね・・・」

ニヤリと笑つたラッセルちゃん。カントールちゃんの背中に忍び寄り・・・

彼女のブラホックを、一瞬でハズしたかと思つと・・・

「2！」

まるでマジックのようご、ブラジャーをはぎ取つた。

「1！」

目撃者の証言によると、ラッセルちゃんは奪い取つたブラを高々と持ち上げ・・・

「ラッセル、ラッセル～」

と、勝利の雄叫びをあげていたそうだ。

「これで私は、パラドキシカル！ ラッセル、ラッセル～」

ついでに彼女は・・・どんなブラも、3ステップでハズせると豪語している。そんなスキル、人生で有用か？

こうして・・・

彼女自身、パラドキシカルな存在になりたいがため・・・

クラス中の女の子を巻き込んだ【ブラジャー・パラドックス事件】、通称【ブラバラ事件】が勃発。

この事態を收拾しようと動いたのが、同じクラスの学級委員長・ヒルベルトちゃん。

「は？ ブラはずせ？ あなた、気は確か？」

そんなクラスの秩序を乱す生徒の言つ事が聞けるとでも？」

矛盾のない完全なクラス体系作りシステムを目指していた彼女も・・・

「自らブラをハズす氣・・・無いわけね・・・」

「当たり前でしょ！ 完全な・・・」

「3！ 2！ 1！」

言わざもがな。2人目の犠牲者となつた。

「ラッセル ラッセル」

そしてクラスの女子達は、次々とラッセルちゃんの毒牙にかかる。

「ブラとつて！」

の要求に対し

「いやー。」

と言つ女子のブラをはぎとつては

「ラッセル ラッセル」

勝利宣言と同時に、ブラを高々と持ち上げる。パラドックス以前に、
もはやただの変態だ。

「バラとつひー。」

「ラッセルちゃんの理不尽な要求に……」

「いじわよ」

唯一「Y es」と書ったのが、ラマヌジヤンちゃん。彼女……論理は通じないが、超のつく天才肌で、あらゆる公式を見つけるのが得意な子らしい（ラッセルちゃん情報）。

「じゃあ、取るね」

とこういふラマヌジヤンちゃんに対し

「あー、待つて！　いい！　あんたじゃ、パラドキシカルに反する……！」

初めてうろたえたラッセルちゃん。矛盾に反するところのも、変な話だけど？

こうして……

ラマヌジヤンちゃんを除く【現代組】の女子全て……ラッセルちゃんの犠牲になつた。

「ラッセル　ラッセル～」

やがて【現代組】の女子達だけでは飽きたらず……他のクラスの女の子を標的にし始める。

【古代組】に侵入したこのテロリスト……いや、エロリストは……

私と相対した。

「…………」

ラッセルちゃんは私の胸をじっと見つめた後、こう言った。

「ブラ、必要？」

これがラッセルちゃんにかけられた、最初の言葉。

「はー？ じあるから！－！」

そしてこれが私からラッセルちゃんにかけた、最初の言葉。

「（？）

「あ……ホントは、B……プラス……
Bプラスよ！ 四捨五入してじよ！－！」

「Bプラス？ それ以前にさ……おっぱいに、四捨五入ってあるの？」

「言つなれば、四捨五乳つてか？ ラッセル、ラッセル～」

(「な、何よ……この子？ 人のおっぱいをネタにして……」)

「ラッセルちゃんの皿がキラリンと光ったかと思つた。」

「ふつわやけは皿ひさびれ…… Aでしょ?」

皿満々でそいつってきた。

「はー? Bあるじー?」

「じゃあ、ブリとつてよ。」

「はー? 頭おかしいんじゃないの? なんで、ブリとる必要があるわけ?」

「ふむ……じゃあ、あなた。」

Jの皿時お互ご前も知らなー。

「皿ひ、ブリを取りうといわけね?」

「あ……当たり前でしょ!?

あんただつて、ブリ取らなこつて言われたらり……

取りないでしょー?」

「うそ」

あの時の嬉しそうなラッセルちゃんの顔は……頬たくてもかれられない。嫌な意味でね。

「……」

「？」

ラッシュセルちゃんは、突如・・・

「2・・・」

カウントダウンを始めたかと思つと、私の背後に忍び寄り・・・

「1！ ラッシュセル ラッシュセル～」

瞬殺でブラホックをはずし、ブラジャーをさき取つた。

「あ・・・あやーーー！」

この後、どうなつたかつて？

私の口から言いたくないし、言えるわけがない。それは読者の想像に任せることにしておく。

・・・・・。

事件から数日後。私は数学倶楽部に入部するため、部室を訪れた。

そこでラッシュセルちゃんと再会する。

「お？ 古代組の・・・えっと・・・」

彼女は私の胸を見て、何かを思い出した。

「そうだ！ ピタ子！ 【古代組】のピタ子だ！！
正真正銘のピタ子だ！」

いや・・・ そんなピタ子ピタ子、言わなくても・・・

「・・・・・」

あんただって、胸ピッタコンじやん。私は失礼かなと思つて、触れないでいるのに。

「すでに証明済みだもんね～。ラッセル ラッセル～」

このセリフから、ブラをハズされた後の事を・・・少し想像できるだろう。

前述したけど、ラッセルちゃんはつるぺたぴつたんこ・・・学校1の貧乳だ。

【自分より胸が大きい子のブラをハズす】 【学校1の貧乳】 = 【無差別H口】

【】は、【かつ】と

読む。

この命題における等式は、【現代組】で【ラッセルの法則】とよばれている。【ド・モルガンの法則】よりも明かで、本人以外周知の公式なんだって。まあ、集合論は【現代組】しか習っていないから、

私にはあまりわからないけど。

そんなつるべたぴったんこのラッセルちゃん・・・

「ラッセルちゃんこそ、間違いなくラッセルじゃないから

なんて言おつものなり・・・

「あなたこそ、ブラ、必要なの？」

となり、あの事件の繰り返しになってしまった。そんなラッセルちゃんが・・・

数学俱楽部の部長だったのには驚いた。

「僕、集合好きだから」

意味不明な動機で、自ら部長に立候補したらしい。基本、数学俱楽部の人間は・・・自分にしか興味がない。俱楽部会議で集合に興味あるという彼女以外、立候補する人も推薦される人もいなかつたらしい。

「じゃ。僕、部長ね ラッセル、ラッセル～」

「集合に必要なのは・・・Hレメントー
ん~、何かエロい【ひ】【び】【あ】ー！」

エロオヤジが就任したというわけだ。

人のブラをハズすのが趣味・・・そんな子が上の立場に立つなんて、どんな混乱を招くだろう。

そう思っていた私だが・・・

現代組のラッセルちゃん。彼女こそ部長にふさわしい・・・

だんだんそう思つようになつてくるから不思議。それはこの小説を読んでもらえれば・・・みんなわかってくれるだろう。

そしてもう一つ。

後に私は・・・

「」のラッセルちゃんの【驚くべき事実】を知る事になる。

(第5話へ続く)

番外編？ ブランジャー・パラドックス事件（後書き）

次回予告

私達3人は、【from】を見つめながら議論する。

「品川、船橋は田原率だとこりんださう……？」

もとか・・・?

次回
「第5話
パイからの手紙

60

第5話 パイからの手紙（前書き）

前回までのあらすじ

私、
ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取つた私は、こつそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学俱楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと

第5話 パイからの手紙

第5話 パイからの手紙

第5話 パイからの手紙

「やつぱり……まあ、コレからよね
『ね』

ラブレターを裏返す私。

【from】

「これ……フロム何？ 何かの記号？」

私の質問に、2人は即答してくれた。

「はい！ デカちゃん、わかります～！
これは円周率のパイですよ～！」

「そうそう。おっぱいの【】（パイ）ね

とりあえず部長は無視したいが……

「パイ？ パイって、【】じゃなかつたつけ？」

「それ小文字よ。大文字で【】って書くの。
ピタ子・・・ホント、無理数とか苦手よね～」

現代組の部長の知識は、犯人捜索に欠かせない。

「仕方ないでしょ！ 【古代組】では無理数、教わらないんだから
！」

「そついえぱピタ子。無理数の質問しにきた、教団の弟子……半殺しにしたってホント？ すつごい噂になつてたよ？」

「あ！ その話！ デカちゃんのクラスでも話題なつてました～」

「・・・・・」

「いくら自分が無理数わからないからつてさ。

弟子を半殺しにするつてのは・・・僕はどうつかと・・・」

「あ、あれは私じゃない！ 私のとりまきが勝手に・・・

【禁忌に触れし者、制裁あれ】とか言つてさ・・・

その子を校庭裏の川に投げ込んだのよ。

私は一切、関与してないから！」

ここでは【ピタゴラス教団】について説明しておいた。いわゆる私のファンクラブで、何故か私は【教祖様】と呼ばれている。そしてファン連中は自らを【弟子】と称し、ぶっちゃけストーカー並に盲信と云うか、妄信するコアな連中が多い。

デカルトちゃんのファンクラブとは違い・・・私の教団は一步間違えれば、犯罪者になりそうな子ばかり。【万物は数なり】【ピタゴラスの定理】【豆禁】が教団の3大キヤッチコピーになつているらしい（私は関知していない）。

弟子になつて日の浅い子は・・・熱心なのはいいけど、私が苦手な無理数に関する質問をする時がある。そんな時、これまた熱心な先輩弟子が・・・質問した子を校庭裏の川に投げ込むのが慣例だ。

先にも言つたが、私は豆が大嫌い。死ぬほど嫌い。死ねばいいのに。

そんな私に、新人弟子が【納豆】を差し入れた事があった。

「僕が聞いた話じゃ、納豆差し入れた子をさ・・・
半殺しどころか、全殺しにしたって聞いたわよ」

「・・・・・」

ノーレメント。

「豆、体にもよくて美味しいのに。
デカちゃん、豆、大好きだけどなー」

「僕もお豆、大好きー」

部長が言つと、口にしか聞こえない。

【f r o m】

「話を戻しましょう。じゃあ、これは・・・パイからの手紙?」

「ん〜・・・僕には、インターフェクションに見えるな」

「インターフェクション?」

「そ。2つの集合の共通部分。交わりって事。
僕、一昨日教えたじゃん。」

ホントは【f】をひっくり返した感じなんだけど・・・

うへん。【 \cap 】を逆さまにして【 \cup 】か。まあ、見えなくはない。

「テ力ちやん。共通部分の事、忘れたです~」

「教えたばかりなの」「…」「テカ子、もつ忘れた?」

「」最近、部長が講義してくれててる【集合論】。一昨日は【共通部分】と【和集合】の話も出た。

例えば、

$$A = \{2, 3, 5, 7\}$$
$$B = \{1, 3, 5, 7, 9\}$$

ところの2つの集合があつた場合、どちらの集合にも属する要素の集合を、AとBの【イントーセクション共通部分】といい、 $A \cap B$ で表す。

$$A \cap B = \{3, 5\}$$

つてわけ。ちなみにどちらかに属している要素を集めた集合は【ユーフォン和集合】といい、 $A \cup B$ で表す。

$$A \cup B = \{1, 2, 3, 5, 7, 9\}$$

ところわけだ。部長曰く、集合論で【共通部分】【和集合】は基本中の基本との事。

「インターフェクションか…」
ルブラン君と、交わりたいって意味じゃね?」

部長のエロトークはおいといて・・・

「顧問に聞いてみようかな?」

顧問なら部員のことをよくわかるはず。このラブレターを見せたら、一発で手紙の主を特定しきれるはず。我ながらいいアイディア。早速・・・

「デカラちゃん、思うんですけど~

顧問に頼るのは~ 多分ダメです~」

ところがデカルトちゃん、私の意見にダメだします。

「顧問のパスカルちゃんは~

学校終わったらすぐパチンコ屋行くです~」

パチンコ屋?

「そういえば僕、日曜日にパスカルちゃん見たよ。

赤鉛筆耳にかけて、競馬新聞を凝視してた」

競馬?

「その新聞の裏側にさ・・・裸の女の人も載つてて興奮したわ~
ラッセル~ ラッセル~」

「デカラちゃんの担任ですけど~・・・」

そう。数学俱楽部顧問のパスカルちゃんは、【近代組】の担任でも

ある。

「放課後） 担任、見かけた事無いです～」

「でも授業だけは上手よね、あの先生。
僕、確率論の授業受けた時さ・・・

わかりやすくて、けつこう感動したわ」

「ええ？ デカちゃん、しそっちゅう怒られるです～。

【お前、空しいよな】【お前の哲学、浅いんだよ】つて～・・・

「【古代組】の授業では、なんか変な事言つてたな～。

【結婚＝殺人】が成り立つとか・・・」

「あー！ それ、言つてた！ 僕も聞いた！」

井戸端会議になりかけたが、話を総合すると・・・どうやらは顧問
はギャンブル好きらしく、授業が終わるとすぐにパチンコ屋か競馬
場に出向くらしい。

「ふむ。パスカルちゃんに頼る作戦は・・・ 無しね

「無しですか～！」

「ナッセル！」

なつせる？ こつして顧問経由の犯人捜索は、全会一致で否決され
た。

「どうやつて手紙の主を見つければ……
他に何か手がかりないかしら……？」

部長が手を挙げた。

「容疑者の人数は、有限なんだからさ~。
しらみつぶしに、部員全員あたればいいんじやない？」

【あなた、ラブレター落としませんでした?】ってや~

自信満々で言いあげたものの……

「でもほとんどの部員……学校終わったら、散らばるのよね~」

部室に顔出すのは、私達3人ぐら~。他の部員は、基本幽靈。たまに顔見せて、すぐどつか行っちゃう。

「うへん、確かに。僕達は、毎日ここ来るけど……
帰宅部員を始め、他の部員がどこでいるか把握できないな~」

かといって、休み時間に各クラス回るもの……

「【古代組】【中世組】【近代組】【現代組】【東洋組】の5クラス。

部員は、全てのクラスに散らばってるし。

一つ一つ回るのも、けつこうめんどくさいわよ~。」

「デカラちゃん、めんどくさいこの嫌いです~」

「あ、僕もめんどくさいのダメ。はい、ナッセル！」
なつせる？

「はーい！」

今度はデカルトちゃんが手を挙げる。

「はーい、どうぞ」

あまり期待せずに、彼女に発言権を与えた。

「5時過ぎにポール公園行けばいいと思います～」

「あ・・・」

「あ・・・」

部長と同時に声を上げる私。何故、気づかなかつたんだろう？
時計を見ると午後4時過ぎ。学校から公園までは、10分もあれば
行ける距離だ。

「デカルトちゃん・・・ あなたの言つ通りだわ。
手紙の主は・・・

ポール公園、トイレ近くのベンチに座つてゐるはず・・・

「デカルト！ 況えてるじやん！
『褒美に・・・ラッセル、ラッセル』

「あや～！」

また始まつた・・・。

私は2人を部室に残し、部屋を出ようとする。

プチン

「――？」

瞬間、ブラホックがハズれる感覚を味わつた。

「ふふ・・・スポーツブラなんて嘘ね。僕にはお見通しやー。」

酔っぱらつて気分が高揚すると、キスをしたくなるオヤジがいると
聞くが・・・

「【ブラを脱いだとしない子のブラを、強引にはぎ取る女子】
」の命題のパラドックスに・・・ ござり、挑まん！

部長は気分が高まるごとに、人様のブラをハズしたくなる・・・ 結局口セクハラオヤジってわけだ。

「ラッセル ラッセル」

「ちよ・・・」

この変態のせいで・・・ 無駄な時間を過いじたのは言ひまでもない。

(第6話へ続く)

第5話 パイからの手紙（後書き）

次回予告

部室を出た私。思いがけず何者かとぶつかった。

目の前にいたのは・・・部長と同じ【現代組】のソーカルちゃん。

不思議な服装の彼女は、突然意味不明な事を言ってきた。

次回
「第6話
ソーカルちゃんと理事長」

第6話 ソーカルちゃんと理事長（前書き）

前回までのあらすじ

私はピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取つた私は、こつそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学俱楽部の部員で間違いない。

それを盗み取つた私は、こつそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学俱楽部のデカルトちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

第6話 ソーカルちゃんと理事長

A vertical decorative border consisting of a series of wavy, horizontal lines.

第6話 ソーカルちゃんと理事長

バタン！！

「あ・・・」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかり・・・

ドスン

その場で倒れてしまった。

「いてて・・・」

お尻をさすりながら前を見ると、ぶつかった相手も尻餅をついている。

「2分の1cmの2乗が、帰納的に分子間力によつて引き裂かれ・・・」

「？」

その子の洋服には、色々な数式や化学記号がプリントされていた。

「「」「めんなさい・・・」

前を見ず部室を出た私・・・明らかに私の不注意でぶつかつたので、素直に謝るが・・・

「ゴークリッド空間なら……カノンコードで調和がとれるけど……」

もし、遠近法による//スティレクションの世界なら……？」

その子は、ニヤニヤしながら私に語りかける。

「は？」

首をかしげる私。

「オールトの雲の中で見たわ。
垂直落下式……クローズドインターバルによるタイムトラベルを……」

「ちょ、ちょ……あなた、大丈夫？」

絶対、この子……

「ヒントロピーが増大すると、ジユール熱によるガンマ線の波長が……」

打ち所が悪かつたんだ。

「おひ？ ソーカルちゃん……」

私に続いて、部室を出てきた部長。私がぶつかつた相手に、手を差し出した。

「……」

その子は部長の手を握り、勢いよく立ち上がる。

「へー、遥かぎつてあるでしょ?」

「ベジタリタンの世界じゅ、ヴァンクトグラフにG難度な」

立ち上ると、ニヤニヤの視線をラッセルちゃんに向かって。そつに語り始めた。

「ロングロング文字で、ラックリさんやるとぞ・・・」

「4コマ滑つのドットマニアから逆転してヒーリーを奪われるから！」

「はーはー。わかった、わかった・・・」

「ラッセルちゃんは、その子の背中を押し・・・」

「相対性理論も、アウトオブプレイスアーティファクツも・・・
フランタル音階で、現在完了なの」

「ほひ。【物理俱楽部】は、隣・・・」

隣の部屋へ押し込む。

「私!ー!ー あなたのドッペルゲンガーを見たわ!ー!ー」

押し込まれたその子は、私を指さして呶呶つた。直後・・・

「じゃ、また明日ね。ソーカルちゃん」

バタン!

部長が物理倶楽部の扉を閉める。

「ふう・・・」

やれやれという表情を浮かべる部長。幸いにも、その子が再び私達の前に現れる」とはなかつた。

「ソーカル・・・ちゃん?」

「うん。僕と**同じクラス**。【現代組】のね・・・」

「デ力ちゃん、聞いた事あります~」

ラツセルちゃんの後ろからひょっこり現れたデカルトちゃん。

「デ力ちゃんが聞いた話では~ 早口言葉で専門用語を言つて~ 校内意見発表会で最優秀賞とつたんです~。」

でも授賞式で【全部嘘ぴょーん】って、笑い飛ばしたつて聞いてます~」

「お? デ力子、よく知ってるね~。

【ソーカル事件】って、ヤツだね~

「ソーカル・・・事件?」

「まあ、クラスでもかなり変な子だからそ。あまり気にしない方がいいよ。せ、公園行こ」

【現代組】 つて所は部長を始め・・・

「うん・・・」

変人の集まりらしい。

「数学倶楽部のメンバーで外へ行くのつて、初めてかも。デカちゃん、ドキドキです~」

「お? ドキドキしてる? どれどれ・・・
ちょっとブリジャーハズして、お胸を・・・」

「あやー」

また始まつた・・・。

「これ!」

不意に男性の透き通るようなテノール声が、私達にかけられた。

「あ・・・」

物理倶楽部の前にたたずむ、スーツ姿のダンディなおじさん。少し白髪が目立つ巻き毛で、身長は推定185cmと大柄。ネクタイ姿をビシツと決めた我が聖フイロソフィー学園・・・

「サンジュルマン理事長・・・」

「・・・」

私達3人を睨み付けている。いや・・・私を睨み付ける？

「廊下で騒がないよつ」。部室に入るか、静かに廊下を歩きなさい」

田つきは鋭いけど、優しい口調で注意する。

「すいません・・・」

頭を下げた私。後ろの2人も、一応頭を下げている。

「仲がいいのは良い」とだが・・・

君達は今朝早くも・・・校舎の屋上ではしゃいでいたね？」

「え？」

「はわ？」

「えへ？」

私達は同時に、疑問の声をあげた。

「僕たち、朝は一緒にやなこですよ？」

「そうですね。デカラちゃんは今日、遅刻しましたー！」

いや・・・だからそれ、胸をはって言える事か？ しかも理事長の
前で？

「そ、そうです。私達は今日、俱楽部で初めて顔を合わせました

「…………」

理事長の眉がつりあがる。

「そ、うか……。失礼。人違いだつたよ、うだ。
まあ、とにかく。はしゃぐ時は、場所をわきまえて」

「は、はい！ 失礼します！」

私は横にいた2人の袖を引っ張り、その場から立ち去った。

「僕たち、誰と勘違いされたんだううね～？」

「デカちゃんも気になります～」

「…………」

チラッと後ろを見ると……理事長が、一いちらをジッと睨み付けた
ままだった。

「理事長……」

「口リコソかしら……？」

女子高生を見つめ続けるって事は、その可能性も否定できないって
わけよね？

「わ。理事長、ずっとピタ子見てるよ。
ひょっとして、興味あるんじやないの？」

部長が私の背中をポンと叩く。

「可能性アリです。だからあんな作り話を言つて、氣を引いたんですね～」

「まさか・・・」

再び後ろを振り返ると、彼が物理俱楽部に入つていいくのが見えた。

「・・・・・」

確か理事長・・・ 化学の先生だつたはずだけ? 何故、物理
俱楽部へ?

サンジエルマン理事長の事をちょっと気にしながらも・・・

私達3人は、学校を出ようと1階へ降りていった。

(第7話へ続く)

第6話 ソーカルちゃんと理事長（後書き）

次回予告

外に出ようと、1階の廊下を歩く私達。タレスちゃんやヘラクレイ
トスちゃん達が、万物の根源についてディスカッションしている所
へ遭遇する。

次回 「 第7話 万物の根源 アルケ 」

第7話 万物の根源（アルケー）（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取つた私は、こつそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

卷之三

第7話 万物の根源

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

第7話 万物の根源（アルケー）

一介の化学教師だったサンジエルマン先生は、ある日偉大な化学の実験に成功した。くわしくは知らないけど、人はそれを【鍊金術】と言うんだつて。そのおかげでサンジエルマン先生は超のつくお金持ちになつたらしい。

そして私立学校として経営の危機だつた聖フィロソフィー学園を立て直すため、理事長に就任したのが数年前。彼のおかげで廃校の危機を免れた本校・・・最近、共学になつたのもサンジエルマン理事長の発案だつたそうだ。

まあ私的には、ルブラン君と運命の出会いをしたのだから（遠くから見つめるだけで、喋つた事ないんだけね）・・・サンジエルマン理事長様々つて感じよね。

そんな聖フィロソフィー学園・・・通称「テツ学」。放課後の廊下を歩くと、色々な連中と遭遇する。今、私達は玄関に向かうため、1階の【古代組】の前を通つているが・・・

「万物の根源は・・・水ですわ」
アルケー

「いやいや、火だつペよーー！」

「原子だつちやー！」
アトム

そこでは毎日、万物の根源・・・すなわちアルケー探しのディスカッションが行われている。

「水はどんな形にもなれるのよ。それに生命の起源は水にあり。
もつとも万物の根源にふさわしいのは……水ですわ」

まるでネグリジエのようなスケスケの服装で……おっぱいも大きいタレスちゃん。

「それなら火だって、形を変えられるつべよー。」

魔法使いのよくな出で立ちのベラクレイトスちゃん。

「いやいや。原子^{アトム}の結合次第では、どんな形にもなれるつぢや……」

巫女のよに可愛らしい姿のデモクリトスちゃん。万物の根源^{アルケ}について語りあうこの3人の輪の中に

「デカルトちゃん的には……全て疑わしい！」

つまりあなた達は……」

デカルトちゃんが乱入した。

「あら、デカルトちゃん。今度は私と……勝負するつもり?」

タレスちゃんがけんか腰に言葉を投げつける。

「はわ?」

首をかしげるデカルトちゃん。その横にいたラッセルちゃんと、タレスちゃんの目が合つた。

「…?」

瞬間、タレスちゃんは・・・両手で胸を抑える。あれ？ ブラジャーつけないよね？

「部長、タレスちゃんのブラ・・・取った？」

「あのさ、ピタ子。僕が見境無く人のブラ、取つたりするよつて見える？」

見える。

「タレスちゃん・・・普段から、ノーブラだつたっけ？」

「だから僕、彼女のブラなんか取つてないし」

明らかに警戒心むき出しのタレスちゃんは、部長に声をかける。

「あんた・・・もう、十分でしょ？ わざわざ行きなきなきこよ・・・」

「

タレスちゃん・・・部長が苦手みたい。過去、何かあったのだろうか？

「部長・・・タレスちゃんを襲つたんじゃないの？」

「まさか。僕がそんな事をするよつて・・・」

見える…

「まあ、あの豊満な生乳……揉んでみたいけどさ。僕にだって理性があるよ」

人の「うはっしまくつた前科数犯のHロオヤジ」……理性なんてあるのか？

「いい？ デカちゃん的には？」

デカルトちゃんは、3人を交互に指さし……

「絶対的な何かを探すには……

あなたたち、【萌え】が足りないわー！」

ドヤ顔で言つてのける。

「あなたの言つ【萌え】だつて、水じやないのー！？」

「いやいや……火だつペおー！」

「だから、原子^{アトム}だつちや……」

彼女たちには通じない。

「我思つ、ゆえに我萌えー！ それだけが唯一の真実ー！」

「あの……」

熱く語るデカルトちゃんに、背中から声をかける人物がいた。

「あの…… 絶対壊れない……イデアの世界について語らない

？」

まためんどくさいのが現れた。時間が気になる私はデカルトちゃんの腕を掴み、ディスカッショוןの輪から引きずり出す。

「プラトンちゃん、ごめんね~。

私達、ちょっと用事があるの」

ヒラヒラのスカートに三角形のアクセサリーをつけたプラトンちゃん。

「ほら、デカルトちゃん。行くわよー。」

プラトンちゃんに背を向け

「イイテア・・・」

「水・・・」

「火・・・」

「原子
アトム

背後に、古代組の白熱ディスカッショൺを聞きながら・・・

「はわわ~ 萌えです~」

後ろ髪引かれるデカルトちゃんの背中を押し、私達は靴箱へと向かつた。

「僕的にはや〜」

ディスカッショוןを遠田に見守っていた部長が、口を開く。

「デモクリトスちゃんは、なかなか・・・」

「デモクリトスちゃん！！」

油断するとベクトルが変態の方を向く部長。

「そうそう。デモクリトスちゃんね。

万物の根源アルケーが原子アトム・・・

なかなか確信ついてると思つな〜

「・・・・・・」

以前はよく・・・私も、アルケー・ディスカッショൺに参加していた。

【万物の根源アルケーは、数である！】

これが私の持論。だけど、私のファンクラブ【ピタゴラス教団】の人以外・・・ほとんどこの意見に耳を貸さないのよね。

「数つて何ですか？」

「見えないし！　書かないと見えないし！」

「そんなものが、万物の根源アルケーっぢや？」

「… もう少しやさしくおしゃべりを続けよう。」

「みんな自分の主張」これが正しいと思つてゐる。まあ、そういう私もそつなんだけど……。

「でもピタ子も、なかなかいいヤンいつてるよ」

部長は私の意見を褒めてくれる。教団以外の子では、唯一の人物だ。

「聖メンテレーHフ学園の子達と合コンした時だ。

元素は番号がついてる。つまり数字と元素は対応してゐるよ」

合コン?

「それに僕たちがいる場所だって、座標系で数値表現できる」

「はーい! 座標は『デカちゃんが発明しました』!」

「デカ子の発明は、直交座標。色んな座標系あるけど……
やっぱ最初の座標系を創始したのは偉いね、うん」

部長が言つには……例えば北緯何度、東経何度、高さ何mとかで
この地球上の【位置】は全て【数字】で表現できるといつ。そりに
は、その位置にある物質も全て元素レベルで考へる事が出来、それ
ら元素も数字が対応しているといつ。

「あとは質量なんかも、全て数値表現できるしね。

「世に存在する物は、数字で表現可能。例え見えなくとも……

「

「見えなくてモー？」

「例えばブラックホール。

光ものみこむわけだから、直接観測されたワケじゃない。

X線など電波の観測数値を元に、位置を特定しているんだ。
つまり数字だけが、見えないブラックホールの存在を主張しているのよ」

部長曰く・・・数字があれば、その物が存在している位置や材質、
質量や大きさなど全て表現できる。例え私達の目で見えなくても。
つまり全ての物の存在は、数字に還元できる・・・

「僕は、【全て】とは言つてないよ」

これ以上は【存在論】といつ哲學の深いところまで發展する事にな
るので・・・その話はまたいつか。

「だからピタ子。万物の根源は数字アルケ・・・

正解とは断言できないけど、いこと思つよ。マジド

「でも、数字の世界も疑う余地はあるでしょ～

デカルトちゃんの哲學は全てを疑う事から始まる。

「待つてよ、デカルトちゃん。例えば座標系も疑えるって事?」

「もちろんです～

「そんな事言つたら、デカル子。

君が開発したデカルト座標も、正しくないって事になるよ?」

「だから『デカルト座標も、正しくないって事になるよ?』

萌えの私だけが、唯一正しいの!」

その私が考えた座標系は正しい……はわ?
でもさつき、疑う余地があるって言つちゃつたし……」

「ほら、パラドックスに陥つた」

嬉しそうに部長が言い放つ。

そつ・・・

私達は毎日・・・こんな話し合ひをしている。

ある者は、物質とは何かについて研究し・・・

ある者は、生きる意義は何かと考える・・・

ある者は、正義とは何かを語り・・・

そしてある者は、知識とは何かを追求する・・・

何も知らないといふ事さえ、【知】だという人もいる。

「【ムチの血】ってヤツでしょ!」

興奮するね~ ラッセル~ ラッセル~

「

「違います～。【無知の知】です～！」

「・・・・・・・」

「おう？ いつも真っ先にツツコミ入れるのはピタ子なのに・・・
放置プレイ？」

「いや・・・ 私も一つ、【知】を得たわ」

「何ですか？」

「【ベタなエロオヤジギャグは、殺意を芽生えさせる】」

「あ～。僕もそれ、わかる！！ すつしー、よくわかるー。」

「こいつはわかつてない。」

「・・・・・・・」

部長の邪魔が入っちゃった。話を戻そう。

私達【人】はどこから来て、どこへ向かっているのか・・・

その存在意義とは何か？

何故、私達は感情があるのか？ 愛とは何か？ 生きると云は?

それらについて考える事は全て【哲学】の対象だ。

そして多くの哲学者は・・・それら思考の先にある、大きなテーマにぶちあたる事になる。

それは・・・【神の存在】。

【現代組】では【大統一理論】や【ビッグバン】、【インフレーシヨン理論】や【超ひも理論】など、最新の科学や数学を学んでいるらしいが・・・

実のところ、それらの根本は不確実なのである。

結局行きつく先は、それら全ての源みなもと。おそらく【絶対的な何か】・・・多くの人はそれを【神】と表現する。そしてその存在を認めなければならぬのかという議論になる。

【神】の定義とは何か？【神】の存在をどう証明するのか？そもそもこの世の起源は【神】でしか語れないのか？

現代組の天才児と言われる二ーチュちゃんは

【神。お前はもう、死んでいる】

という言葉で、一躍時の人になった。これは【神は存在していたが、すでに死んだ】という意味ではない。彼女の言つ【神】とは、絶対的な象徴・・・例えば【神】もそうだが、【真理】や【善】などもそれにあたる。それらはもはや無価値である・・・という彼女の主張を表したのが、上の言葉だ。

しかし彼女とて・・・

神が存在しない事を証明したわけではない。

この先、万人が納得する【答】が見つかるのがどうか……今のところ誰にもわからない。

「…………」

今私はそれよりも……

「や。ようやく学園の外に出たわ。
ポール公園に向かうわよ~」

恋敵ライバルが誰なのか……それにしか興味がない。そして無価値かもしれない【愛】のため……

その子の前に立ちはだかってやる。

「公園、見えてきたです~」

「青空教室つてのも、アリだわ。
部長として週一ぐらい、公園で部活つてのも考えようかな」

「…………」

もうすぐ目的地に到着する私達。

「…………」

ひみつ部屋の頭。

理事長室では、私達の想像を超えた【物】が運ばれていた。

「じゃ、ここにサインお願いします」

「…………」

サンジュルマン理事長は、無言で配業者の差し出した用紙にサインする。

「では、失礼します」

業者が部屋を出ると・・・田の前にある、段ボールを見つめた。
1辺約1・5mの、大きな立方体の段ボールだ。

「これが・・・」

その段ボールを、右手でさすりながら

「これが・・・」

【神】の贈り物か・・・」

理事長はそう呟いた。

(第8話へ続く)

第7話 万物の根源（アルケー）（後書き）

次回予告

公園内のトイレに隠れ、私達は犯人が現れるであろうベンチを監視していた。

そしてどうどうその子は現れた！

急いで私は犯人の正体を確認しようとするが・・・?

次回
「第8話 謎のメッセージ」

第8話 謎のメッセージ（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、何者かのラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かつた私達は・・・

第8話 謎のメッセージ

~~~~~

## 第8話 謎のメッセージ

「 ブラパラパ！」に巻き込まれたり、ソーカルちゃんどぶつかったり、アルケー『ディスカッショ』ンに（テカルトちゃんが）プチ参加したり・・・

結局、ポール公園についたのは午後5時5分。

手紙の主は5時12分までに、トイレ近くのベンチに座っているはず。この公園にトイレは一つ。そしてその前にあるベンチも一つしかない。

「ベンチには、誰も座っていないです～」

「トイレとベンチは、完全に1対1対応。つまりあのベンチに・・・

手紙の主は、今から現れるはず。

名探偵ラッセル～ ラッセル～

部長が張り切つている。

「 テカラちゃん達、どこにいておきますか～？」

「 ・・・ ・・ ・・ ・

しばりく考えた私。

「 あそこしかないわね」

私達はトイレの中・・・一番奥の個室に3人で潜り込んだ。

「わお～。個室に3P！？ ラッセル～ ラッセル～」

「ひーひーひー」

「これは～8禁小説じゃないの～  
そういう発言は禁止～～」

「【P】は【αριτελοσοφερ】（哲学者）の【P】だよ～。  
ピタゴ、何エロい事考へてんの～？」

嬉しそうな部長。

「う・・・」

そして言葉に詰まる私。

「でも、みんなでトイレに入るなんて～  
デカちゃんも、ちょっとドキドキですか～」

「デカルトちゃんまで・・・」

他の個室には窓がない。だけどこの奥の個室だけは、小さな曇りガラスの窓がある。その窓をちょこっと開けると、あのベンチが見えるのだ。

私達3人は狭い個室で身を寄せ合いながら、その時を待つ。

午後5時10分。

「僕、おじつこじでいい?」

「ダメ!」

「僕、緊張するとおじつこじたくなるんだけど・・・」

知らないくて。

「デ、デカちゃんも・・・その・・・おじつこじたいです〜」

「ええ!?」

溜息をつく私。

「じゃあ別の個室行って、用を足してきてよ・・・」

「ほーい

「ほーい

2人が個室を出て行ったその時・・・

「はー?」

あのベンチに・・・

「誰ー?」

何者かが歩み寄つていふのが見えた。背は私と同じぐらい。ブカブ力の帽子を深くかぶり、大きすぎる黒いコートを着けている。

「あれじゅ・・・」

その子はトイレに背を向ける角度で歩いてきて、ベンチにちょこんと座つた。

「誰かわからない」

迷つてゐる暇はない。私はすぐに個室を出ると、トイレの外に出た。

「・・・・・」

ベンチの方を見ると、その子が走り去つてゐる姿が見える。

「へ・・・」

私はすぐに彼女を追いかけよつとした。どうしても・・・

「あの子は・・・?」

その子の正体を知りたい。だけど・・・

「へ・?」

ベンチの前を通り過ぎようとしたとき

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれた手紙が、ベンチの上に置かれているのが目に入った。

「・・・・・」

走り去るあの子と、その手紙・・・交互に目をやる私。追いかけた  
いけど、手紙も気になる。

結局手紙から目を離せない私は、必然的に歩<sup>ほ</sup>が止まつた。それを手  
に取り、裏返す。

【from U】

そう書かれていた。

「フロム・・・」「ト・・・?」

顔を上げると・・・すでにあの人物の姿はない。

「・・・・・」

「ピタ子〜！」

「いつの間に、ベンチに行つたんですか〜?」

2人が仲良く、トイレから出でてくる。

「ピタ子、誰かきたの?」

「う、うん・・・」

「誰だつたんですか？」 気になります～

私は首を横に振った。

「私がここに来たら、すぐ逃げていった。  
帽子を深くかぶつて、コート姿で・・・」

いつたい誰なのか・・・」

「え～？ ジャ、ピタ子・・・」

結局、わからないまま、「

「うん・・・」

「はわ？」

デカルトちゃんが、私の手に握られた手紙に気づく。

「それ、何ですか？」

「これは・・・」

2人の前に、私は【from U】の手紙を見せた。

「はわわ？ フロム・・・ユー？」

「表は？」

手紙をひっくり返す私。

## 【ピタリハスに告ぐ】

「ピタ子に告ぐ? 何、コレ?」

「わあ?」

「テ力ちゃんは~ 中を見てみたいです~」

「まあ、まあ。まずはピタ子から見なよ」

「う、うん・・・」

私は封を切つて、中を取りだした。便せんが1枚あるだけだ。

「・・・・・」

たつた1行だけ、そこには書かれてあった。

「どう? ピタ子?」

「何、書かれているんです~?」

「うん・・・」

見せても問題ないと判断した私は、便せんを広げて2人に見せた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ~】

「お~。いいね~。ライバル心、伝わる!」

「有界閉集合でいて挑戦的・・・僕、こうこうの好きよ~」

「はわわ～ ルブラン君をめぐつて、恋の三角関係勃発です～」

「ちょっと2人とも・・・ 大事な事忘れてるわよー。」

そう。この手紙は・・・

「大丈夫、言わなくてもわかってるよ。  
この手紙のパラドックスをね」

明らかな矛盾を含んでいる。

「ええ？ テカちゃん、何が矛盾なのかわかんないです～」

「コレ書いた人の立場になれば、すぐわかるよ」

さすがは部長。

「このピタ子に宛てた手紙は・・・  
ピタ子がルブラン君に関わろうとしていた事を知っている。

しかも、今、ここにピタ子が現れる事も知っていた」

それだけじゃない。この【こ】はルブラン君がここに来ない事も知っていた？

「はわわ～ やっぱりテカちゃん、わかんないです～」

「【ピタ子がここに現れるのをどこで知ったの？】って事が。  
だって、この公園に来ようつてなったのは・・・

「これでしょ？」

「あー！！ わかつたですー！」

デカちゃん達がここに来るのを決めたのは、ついさっきなのに

「この手紙書いた人は、ここに来るのを知っていた。おかしいです。」

「はい、デカ子！ 繰り返しの説明、ありがとうございます」

「おかしいわ。ありえるの？」

「コレを書いた人・・・まるで未来を知つてたみたい」

「まあ焦らす。最初から整理しよつ。

まずは・・・この公園に来ようと言つたテガ子が疑われるわね」

「はわ？ デ力ちゃんが！？」

私がトイレの個室からベンチを見ていた時・・・デカルトちゃんも部長も、私の側にはいなかつた。

「でも僕は、デカ子がおしつこする【音】を聞いていた。その間に、何者かがこの手紙をベンチに置いているか？」

デカ子はアリバイある。シロね！」

• • •

「 もや～！ デカちゃんのおじつ 」・・・ 聞いてたですか～！？」

「 ラッセル！」

「 うわせらる？ 皮肉にも部長のセクハラ行為が・・・ デカルトちゃんの無実を証明した。 」

「 そのデカ子と一緒にトイレスから出てきた僕も・・・ 当然シロ 」

「 そう言つと部長は私をじつと見る。 」

「 え？ まさか私・・・ 疑われてる？ 」

「 可能性の問題。 不可はできないってヤツね 」

「 ちょ、 ちょっと待つてよ。 」

「 デカルトちゃんが公園に行ひつと言つてから・・・ 」

【 私達、 ずっと一緒にたじやない。 こんな手紙を書く時間なんてないわよ 】

「 うわせらる 」

部長は人差し指を左右にふった。

【 これ以上、 ルブラン君に関わらないで。 邪魔なのよー 】

「 ほり、 」の手紙の内容。 別に公園を示唆してゐわけでもないし・・・

あらかじめペタ子が用意しておいて、 今、 そのベンチに置いた。

その可能性もあるって事よ」「

「はわわ～ 自作自演です～」

「え～～！ じゃあ私、嘘言つたって事じやん～！」

「プライバシーズを【こ】いついたのも嘘だつたじやん」

「わ、それとこれとは・・・」

「まあ、あくまでも可能性って事よ。

真実を追究したければ、あらゆる可能性を考えなきゃね。

それが僕達、哲学者の務めなんだからわ」

「・・・・・・」

なんていうか・・・。部長にはこつも、つま～く言ごくるめられて  
いるような気がする。

「大丈夫。今んとこ、僕はピタ子が【こ】だと思つて無いから。  
じゃあ次は、ここにいない人物の可能性を考えましょう。

ピタ子が見た子って？ どんな感じだった？」

「誰なんだろ？～。あつといつ間に逃げていったけど・・・

「もつと情報無いの？ 身長とか、おっぱいの大きさとか？」

「身長は・・・私と同じぐらいだつたかな？」

「ノート着けてたから、おっぱいはわからないけど。

それと・・・」

私は見た。あの子が立ち去る時、ノートの裾すそから

「何か、角張つたものが見えた。コレみたいな・・・」

髪の毛につけた三角定木のアクセサリーを2人に見せる。

「・・・・・」

部長がじつと定木を見つめた。なんだか私が【こ】つていう可能性を増やしたような気もするけど・・・

「プラトンちゃんかな？ 数学俱楽部だし・・・  
それに彼女。そういうアクセ、持つてるわよ」

「プラトンちゃん・・・」

私と同じ【古代組】の子。いつも隣のソクラテスちゃんのために、必死にノートを取っている。ソクラテスちゃんは、ノートを一切取らない子で有名。なんでもプラトンちゃんは、ソクラテスちゃんをかなりリスクペクトしているとか？

「でも、プラトンちゃんは、デカちゃん達が学校出る時～  
ずっと校内にいた感じだったです～」

そうだ。

「確かに。私、同じクラスだけど……放課後はいつも、ソクラテスちゃんの後ろをついていったり……

イデアイデアと書いて、校内で誰かとディスカッショーンしている。今日みたいにね。外に出るのは登下校の時だけ……」

「プラトンちゃんはシロですか？」

「うーん。数学俱楽部で、ピタ子とプラトンちゃん以外で……角張った小物持つた子、他にいたかなー？」

「リリは……テツ学の生徒全員を、捜査対象にするべきかもです」

「私と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持った子……」

「デカちゃん的には、Pちゃんが見たのは  
マリちゃん自身……って感じですか？」

「話を総合するとそんな感じするよね。」

「うとう」とタ子も……

僕みたいに、パラドキシカルな子になっちゃった？」

「はわわ～ デカちゃんもパラドキシカルなのに……  
マリちゃんも仲間入りですか～？」

いや……何、言つてんの？

「おお！ パラドキシカル！  
3人ともパラドキシカルでヨロシ！」

ケラケラと笑う2人を横目に、今一度私はその便せんを見つめた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよー】

手紙の主が私？

「冗談。こんな手紙なんか、書いた事ないし！」

何よりも・・・」の手紙書いた人物は、私の性格を全くわかつてない。

「【邪魔するな】なんて言われたら、邪魔したくなるのが私よー。」

「うわ・・・ピタ子、なんかイメージ悪！」

「でも『テカちゃんは』 Pちゃんの事、好きです〜」

「いや・・・ そんなフォローしたら・・・  
ホントに私、性格悪いみたいじゃん」

愛しのルブラン君に関わらないで？ それは私にとって、関わりなさいって言つてる事と同値だ。

「はい！ テカちゃん、1つ気づきました！  
」の【from U】！

【コ】から始まる子を探せばこと思ってます！」

「【コ】か・・・僕の記憶では、【コ】から始まる生徒・・・  
テツ学年には、一人もいないわ」

「あ、ホラ。

部長と同じクラスに【ウイートゲンショタイン】ちやんがいたでし  
ょ？」

あの子、イーシャル【コ】じゃない？

「うん。彼女は【コ】でなくつて、【ワ】から始まるよ」

「デカちゃんの記憶にも、【コ】から始まる子って・・・  
あの学校にはいないです～」

「【コ】から始まる子ではない。なら、この【コ】はこいつだい・・・  
？」

言ひながら、部長が【コ】を睨み付ける。

「・・・」

しばらく考えていた部長が、口を開いた。

「ニーオンかも・・・」

「ニーオン？」

「うん。集合で【】はインターベクションだったでしょ？」

【コ】はゴニオンを表したじやん

「昨日、部長から習つたヤツだ。

「集合論は、現代の論理学とも密接に繋がつてゐる。  
僕たち哲学者が真なる何かを見つけようとしたら・・・

それを証明する道具が必要でしょ？ 集合論もその道具の一つつ  
てわけ」

とこう部長の信念の元、私達は集合論を学んでいるけど

「ゴニオンか～ ううん・・・」

果たしてこの【コ】は、ゴニオンなのか？

「最初ピタチが見つけた【from】。  
そして今回は【from】。

2つの手紙の主は、同一人物とみて間違いなぞそつね

私も同一犯といふ意見に賛成だ。

「最初が【インター セクション】。次が【ゴニオン】を表してい  
る・・・」

表しているなら？

「手紙の主は集合論を知つてゐる人物。

そして集合論は【現代組】しか習わない。

つまりこの手紙の主は・・・

僕と同じ【現代組】の子の可能性が高いわね「

「・・・・・」

エロセクハラオヤジではあるけれど・・・【現代組】ゆえの豊富な知識、それに説明のうまさ、何より洞察力の深さ。やっぱり【数学俱楽部】の部長として適任だなと思わされる。

部長の言つ通り。【】と【】が集合論の記号を表しているのだ  
とすれば・・・

「【犯人】は【現代組】の子・・・」

この時の私は、意外な犯人の正体に気づくはずもなかつた。

(第9話へ続く)

## 第8話 謎のメッセージ（後書き）

次回予告

部室へ戻った私達は、再びソーカルちゃんと遭遇する。これまでの状況を整理して犯人を探ろうとする。

俱楽部終了後、私は・・・

ルブラン君の家に向かつた。

次回 「 第9話 ドッペルゲンガー？」

## 第9話 ドッペルゲンガー？（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラツセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かつた私達。怪しい人物を見かけたが逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

# 第9話 ドッペルゲンガー？

A vertical decorative border consisting of a series of stylized, wavy, black line segments.

## 第9話 ドッペルゲンガー？

午後6時前。

私達は学校に戻ってきた。部室の前で、再びソーカルちゃんと遭遇する。

「ライデン瓶の中に、冬虫夏草を入れておくとな……  
カーボンによるサイクロンが発生し、コリオリの力で……」

相変わらず意味不明な事を……

「はいはい……

僕たち、数学倶楽部のミーティングあるからね」

先ほど同様、部長がソーカルちゃんの背中を押し……

「マヤ予言の真相は、リーマン予想によるハーベンハーゲン解釈的で……

・・・

「明日、話を聞くからさー。じゃあね、ソーカルちゃん」

物理倶楽部の部室へ押し込む。

「私！――あなたのドッペルゲンガーを見たわ――！」

「デジヤビュ？　ソーカルちゃんは、私に描きしてそのセリフを囁つた。

「ぱいぱーい」

部長は物理俱楽部の扉を閉めると、隣の数学俱楽部へ入つていった。私とデカルトちゃんが後に続く。

「結局手紙の主はわからなかつたな～。

でも今日は・・・僕たちに出来る事はここまでだね」

「そうね・・・」

「ただ、いくつか情報は得た。

ピタ子と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持っている。

そして・・・

「【】と【】ですか？」

「手がかりはいくつか得られたけど・・・謎が多いわ・・・」

「まあそれは各自持ちかえって、考えるつて事で。  
明日また、わかつた事を報告しあおう。

ほり、下校のチャイムもなつたし。今日の数学俱楽部はお開きー。」

「デカラちゃんも、謎に挑戦していくのです～」

「あの・・・」

私は気になる事を、2人に聞いてみた。

「ドッペルゲンガーって……何？」

「え！？」

「はわ！」

2人は同時に驚いた表情を浮かべる。え？ 何で？

「ピタ子、知らないの〜？」

「はわわ〜 Pちゃんはドッペルゲンガーの事、知らないんですか〜？」

何よ・・・ 2人して・・・

「普通、知ってるものなの？ その・・・  
ドッペルゲンガーってヤツ・・・」

「有名なパラドックスの一つだよ。もう一人の自分の存在ってヤツ。

同じ世界に・・・

見た目だけでなく、心も体も全く完全な同一人物がいるっていう

「この世界に・・・ 全く同じ人がいる？」

「そうです、自分と完全に同じ人物が、その人のドッペルゲンガーデす」

よくわからぬ。

「じゃあ。その全く同じ人物とやらが、顔を合わせたらどうなるの？」

「おつとー・・・ ホントにピタ子、知らないんだねー」

「だから、聞いているんじゃない・・・」

見た人は？

「ズバリ、死ぬと言われてますーーー！」

「死ぬ！？」

「まあ、都市伝説の一つよ。

だから全く同一の人物が相対したら・・・  
どちらか、あるいは両方死んじゃうってわけ」

• • • •

未だによくわからないけど・・・

「自分のドッペルゲンガー……見ちゃいけないって事?」

「そうですね～」

「例えば僕のドッペルゲンガーがいたとして・・・  
僕はそいつをチラリと見て、【僕のドッペルゲンガー？】と思つ  
けど・・・

あちらも僕を見て、【僕のドッペルゲンガー？】・・・  
なんて思つてるかもね」

「うーん・・・ そんな事、あるのかしら?..」

「あくまでも都市伝説だからさ。  
量子力学では平行世界を考える場合もあって、そのブレーンを超  
えたら・・・

まあいいや。今日はもう帰らひ。僕、お腹空こちやつた

「デカちゃんも～ お腹ペトヒペトです～」

ドッペルゲンガーはちよつと戻になれるナビ・・・まあ、あくまでも  
都市伝説だしね。

「うふ。じゃあ明日・・・」

こうしてこの日の数学倶楽部は・・・部長の集合論講義に始まり、  
手紙の主<sup>ねじ</sup>捜しで終わった。結局、犯人は見つけられなかつたけどね。

学校を出た私は・・・

自[モ]とは違う方向へ足を運ぶ。

「・・・・・」

私はこう考えていた。

犯人は今朝早く学校に登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れた。そして今日の5時13分に、公園に来るようにと指示している。

ところが・・・そのラブレターは私が奪った。もちろんルブラン君が公園に現れる事はない。犯人の立場なりどう思つだらうか？

【ルブラン君にフランれちゃつた】

これはマイナス思考。

【きっと何かの都合で、来られなかつたのよ】

これがプラス思考。この世の思考も、プラスとマイナスがあるのは数学と同じ。

ただ・・・犯人は【私がラブレターを盗んだこと】を知つて動いている。つまり【何かの都合】というのは、【私の邪魔】というわけだ。でなければ、あんな挑戦的なメッセージを私に残すはずがない。

一番最初の手紙から察するに・・・私同様、その子はルブラン君にベタ惚れのはず。ならば簡単に【諦める】という選択肢は存在しな

い。

つまり・・・

「・・・・・」

午後6時30分。

私は・・・

ルブラン君の家の前にいた。予想が正しければ

「犯人は、ここに現れる・・・」

ピー ポー ピー ポー ピー ポー ・・・

閑散とした住宅街の中、救急車の音が鳴り響く・・・

私は電柱の影に身を寄せ、その人物を待っていた。

(第10話へ続く)

第9話 ドッペルゲンガー？（後書き）

次回予告

ルブラン君の家の前で張り込みする私。何とそこで、サンジュエルマ  
ン理事長と遭遇してしまう。

そして理事長は・・・私にある手紙を渡した。

次回 「 第10話 理事長と手紙と私 」

## 第10話 理事長と手紙と私（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達。怪しい人物を追いかけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

私はメッセージを無視。ルブラン君の家に向かつた。

## 第10話 理事長と手紙と私

ストーカーでも何でも、好きによぶがいい。私は惚れた相手に一直線。生年月日や血液型、住所だって調べ上げる。

「さすがピタゴラス教団の教祖様」

誰！？

「・・・・・」

気のせい。

住所はすでに調べていた私。でも、実際彼の家の前まで来たのは今日が初めて。

「す、い・・・ お屋敷・・・」

お金持ちの子と聞いてはいたけど・・・私の目の前には、3階建ての大きな洋館が建っている。数学的に言つと、 $50\text{m} \times 50\text{m} \times 15\text{m}$ の直方体がスッポリ入るといった感じかしら。

屋敷に入るためには、大きな正門を通らなければいけない。門には誰も立っていないけど、何かしらのセキュリティはあると思つ。

目的はあのラブレターの主を見つける事だけど・・・

「ルブラン君・・・ 姿、見せないかな？」

いつしか私の視線は、犯人ではなく愛しの人を探そうとしていた。

・・・・・

待つ」と30分。7時ちょうど。

「ピタゴラス君！」

電柱の影に隠れていた私に、透き通るようなテノール声がかけられた。

「口…… サンジエルマン理事長……？」

思わず口つゝンと呟いたのは秘密。

「こんなところで…… 君は何を？」

視線は鋭いが、声は優しい。

「あ、えーっと…… その……」

理事長はチラリとお屋敷の方に視線を合わせた。そして再び私を見る。

「ルブランに……会いに来たのか？」

「えー？ あ、いえ……」

いきなりど真ん中にストライクを投げ込まれた私。しどろもどろで

応える。

「…………」

理事長は無言で、スーツの胸ポケットに手を突っ込んだ。そして・・・

「ついでつき、ある女の子に会つてね。  
これをピタゴラス君に渡してくれと・・・」

「え？」

私に手紙を差し出す。

【ピタゴラスに告ぐ】

「一・?」

ゴクリと唾を飲み込んだ。

「ま、まさか・・・」

「・・・・・・」

理事長が私の表情を伺っているけど、気づかない。震える手で、私はその手紙を受け取った。

「だ、誰が!-?」

封を切る前、思わず理事長に大声で聞いてしまう。

「ブカブカの帽子に、黒いコートの子だつたが・・・顔を隠すようにしていたし、誰なのかはわからなかつた」

公園で見たあの子だ！

「私が近くを通りかかったら、突然現れてね。

【これを、あの家の前の電柱にいるピタゴラスちゃんへ渡して下さい】

そう言つて手紙を渡すと、すぐに走り去つたよ」

「・・・・・・・

起こりえない事が起きている。

デカルトちゃんと部長と別れた後・・・私は自分の意志でここに来た。その私を先回りした！？

「ありえない・・・」

「手紙を・・・見ないのか？」

理事長が手紙を見るように促す。

「・・・・・・・

理事長に背を向けた私は、すぐに入つていた一枚の便せんを取り出した。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじやうわよ！】

またしても一行。だけど・・・

「・・・・・」

背中に事長の視線が突き刺さる。

「な・・・ 何が・・・」

何が起こってるのー？ 私の頭は混乱の極みだ。

もし・・・

もし、この手紙の内容が真実なら？ 出所は未だに不明だが、この手紙の主は私の行動を知っている。そして今度はルブラン君が死ぬとまで言つてきた。

出任せ？ それとも、まさか・・・ホントにルブラン君は、死んじやいそうなの？

心拍数が上がつていてるのが自分でもわかる。

「り、理事長。さよなら！ また明日、学校でー！」

とっても嫌な予感がした私は、大通りに出てタクシーを止めた。

「市立病院までー！」

運転手にさつせんすると、祈るよつて窓の外を見上げる。

「IJの手紙が、データラメであることを証明しなければ……」

安心できない。私の視界の隅……サンジュルマン理事長が、ルブラン君のお屋敷に入つていぐ姿が映る。

「…………」

でも、ルブラン君の安否を気にしていた私は……それに気づくことはなかつた。

(第11話へ続く)

# 第10話 理事長と手紙と私（後書き）

次回予告

あまりにも突然の出来事だつた。

ルテナン君は · · ·

交通事故に遭つて

次回  
「第11話 ルブラン君の死」

# 第11話 ルブラン君の死（前書き）

## 前回までのあらすじ

私はピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

犯人の現れる可能性が強いポール公園に向かつた私達。怪しい人物を見かけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

メッセージを無視した私は、ルブラン君の家に向かう。そこで理事長と出会い、手紙を渡された。その手紙には・・・

—

# 第11話 ルブラン君の死

~~~~~

第1-1話 ルブラン君の死

私が謎の手紙を受け取った翌日。

3月15日。

聖フィヨロソフィー学園の全校生徒が体育館に集められた。

そしてサンジュエルマン理事長の口から・・・

【近代組】に所属するルブラン君・・・彼の【死】が報告された。

自宅近くでの交通事故。ほぼ即死状態だったといつ。

体育館の至る所から、すすり鳴く声が聞こえてくる。

「・・・・・」

涙を流すことはない私。昨夜、病院で彼の死に顔を見た時・・・涙枯れるまで泣きはらしたからだ。

「・・・・・」

ルブラン君の死に直面してから、今に至るまで

「・・・・・」

私の記憶はない。何がどうなってるか、その判断能力もない。

好きな人を失つた・・・それが事実なのだろうけど、その意味すらわらかない。哀しみだとか愛だとか、生きるだとか死ぬだとか・・・

今の私は何も解らない。

「・・・・・」

真っ赤な目を理事長に向け・・・

私は抜け殻のように、呆然と立っていた。

・・・・・。

放課後、数学倶楽部。

「私のせいよ！！」

私はテカルトちゃんと、部長を前に・・・自分を責めていた。

「ホントは・・・ ホントは私・・・
ルブラン君の靴箱から、あのラブレターを盗んだの！！」

正直に話す。

「私が盗まなければ・・・

ルブラン君は公園に行つていた。交通事故にも遭わなかつた！！

！」

テーブルに突っ伏し、大声でわめいた。

「・・・・　はわわ・・・」

デカルトちゃんは、どんな言葉をかけたらいいかわからない様子で・
・・

「・・・・・・・」

部長は、無表情で私を見ている。

やがて部長は・・・わめく私をよそに、眉間にしわをよせた。

「・・・・・・・」

何かが腑ふに落ちないといった様子だ。数分後、ようやく部長が口を開く。

「ねえ、ピタ子さあ。昨日、病院行つたんだって?
ルブラン君が運ばれた病院に・・・?」

「それが何よー!」

逆ギレ気味で返事する。

「どうしてピタ子・・・ルブラン君が病院に運ばれた事、知つてた
の?」

僕たちは誰一人、彼が事故に遭つた事を知らなかつた。

今朝の全校集会までね

「・・・・・」

沈黙を保つ私。

「・・・・・」

しばらくして私は、ポケットからあの手紙を取り出した。理事長から譲り受けたその手紙を、テーブルの上に広げて置く。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「これ・・・・」

「え！？ また、手紙もらったの？ 誰からー？」

「はわわ～・・・・」

「みんなと別れた後、理事長と偶然会つて・・・・この手紙を渡された・・・・」

「理事長からー！」

まさかコレ、理事長が書いたわけじゃないでしょー？」

そりやそうだ。直接会つてるんだから、手紙経由で会話するわけがない。

「誰からの手紙ー？」

「ブカブカ帽子で黒マート子から・・・
私に渡すように手紙を預かつたって。

多分、公園で私が見たのと同じ子だと思つ・・・

「はわわ～ それでやちゃん、病院にいたんですね～」

「ビニードー? ビニードそれ、もうらつたのー? 学校?」

私は首を横に振る。

「ルブラン君の・・・家の前。あの手紙の主を捜したくて・・・」

「ソニーまで来たら、とこどん正直に話すわ。

「ソニーで理事長と会つた?」

「うふ・・・・・」

「・・・・・・・」

ちよつと悩んだ表情を浮かべた部長は

「なるほど。偶然にしては出来すぎな氣もあるけど・・・

【今すぐ、市立病院へ行きなさい! ルブラン君、死んじやうわよ
】

「・・・・・・・」

じつとその文面を凝視する。

「あのやく・・・」

「？」「

不意に部長は私の手を握ってきた。

「・・・・・・・」

ゆうべりと顔をあげる私。デカルトちゃんも、部長に視線を合わせる。

「僕、思つただけど・・・」

部長は、衝撃的な事を口にした。

「ルーブラン君・・・ 殺されたんじゃないかな?」

「えー?」

「えー?」

(第12話へ続く)

第11話 ルブラン君の死（後書き）

次回予告

部長は昨日の出来事を紙に書き始めた。

そして理事長から貰つた手紙の裏に書かれた【from】を見
て・・・

手紙の主を特定する。その人物は、1日前に私達が遭遇した人物の中に・・・

次回 「第12話 部長の予言」

第12話 部長の予言（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいです。

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまつた。

~~~~~

## 第12話 部長の予言

A vertical decorative border consisting of a series of stylized, wavy, S-shaped lines.

## 第1-2話 部長の予言

「はわわわ・・・」

「ル、ルブラン君が・・・殺されたーー?」

部長の言葉で、一気に現実に戻った。

「ちよつと・・・嘘、ねじれてよ・・・」

「はわわわ・・・」

「どうしてー? 何でやつ想つのー? 誰かが車でひき殺したってのー?」

矢継ぎ早に質問する私。

「まあまあ。落ち着いて。順を追つて説明するから」

冷静な部長は、テーブルの上に紙と鉛筆を用意した。

「情報をまとめた。そこから導き出される可能性を全て考慮し・・・

論理的な推論の元で・・・」

言いながら、紙の上に何かを書き出していく。

3月14日

AM7:00 ピタ。

靴箱からラブレターを盗む。カントちゃんとニアミス。

PM3:10頃 ピタ子、僕、デカ子。

部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

PM3:30頃

デカ子の発案で、公園に行くことを決定。

PM3:40頃

ソーカルちゃんと遭遇。

・・・・・

「昨日の事・・・まとめてるのよね?」

「そう」

PM5:11

デカ子がおしつゝ。証人、僕。

「はわわ・・・

デカちゃんがおしつこしてた時の事も、書き込むんですか〜?」

「もちろん。デカ子がシロだつていう根拠になるし」

PM7:00頃

ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタゴラスに告ぐ】

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ  
ー】

PM7：40頃

ピタ子、病院でルブラン君が死んだ事を知る。

「よし。完成！」

私達は、部長が書いたそれに田を通す。

「まずコレよね」

PM5：12

ピタ子がコート姿の子を見た。しかし逃げられる。  
ブカブカ帽子、黒コート。三角形のアクセ。

PM5：14頃

ベンチの上にあつた手紙を確認。

【ピタゴラスに告ぐ】 【f r o m C】

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよー】

「内容から察するに、手紙の主はピタ子が手紙を盗んだことを知つ  
ていた」

「まあ、やう考えるのが妥当よね。

でもどいで・・・私がラブレター盗んだのを知つたのかしら？」

「僕とデカ子が、ルブラン君に宛てられたラブレターを見たのは…」

・

PM3：10頃 ピタ子、僕、デカ子。

部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

「3時過ぎ。

この時から【from】の手紙に遭遇するまで…

僕たち3人、ずっと一緒に行動していた。

つまり僕とデカ子は、この手紙を書くだけの時間はなかった

「最初から…部長とカルトちゃんは、疑っていないわよ

「デカちゃん的には、やっぱりカントちゃんじゃないですか？  
朝一で～ Pちゃんとニアミスしてるし～」

「あの角度では…絶対私、見られてないと思う

「カントちゃんの事は頭に入れておく。大事なのはこの先…口  
レよ」

ピタ子、ルブラン君の家の前に現れる。

PM6：40頃

ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタリハスに告ぐ】

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！ ルブラン君、死んじゃうわよ  
！】

「病院へ行けと警告した人物なんだけどさ。逆算すると・・・  
ルブラン君が車にひかれた直後、この手紙を書いている事になる  
わ」

「はわわ・・・ ルブラン君が車にひかれたのに  
こんな手紙を書くつて・・・

そんな神経の持ち主、いるんですか？」

「へタしたら・・・  
ルブラン君が車にひかれる前に、手紙を書いた可能性もある

「えー？ そ、そんな事・・・あり得るのー？」

「まあ、可能性としてはあるってだけで。  
やっぱルブラン君が事故に遭った直後に、書いたと思う方が自然  
かな。

「どうせ元気よ・・・」

「どうせ元気よ？」

「この手紙の主がルブラン君を殺したと思えば……  
スジが通るんじゃない？」

「ええ！？」

「はわわ……」

「僕の仮説はこう。

ストーカー並にルブラン君を愛するがあまり……  
抱きついたか、何かの拍子で彼を道路に押し出した。  
そして彼は車にひかれてしました」

「…………」

「突発的な事故ですか？」

「うん。その子は自分のラブレターが、ピタ子に盗まれた事を知っている。

いわばルブラン君をめぐって、恋敵と思つてゐるわけだから……  
死ぬかも知れないルブラン君に……  
最後、ピタ子を会わせてやろうとした

「だから……あんな手紙を書いた？」

「そんなとこね

かなり無理のある話のように思える。

「苦しい仮説なのはわかってる。ただ一つ。

どうみても、この手紙の主は・・・

ルブラン君の【死】に関わっている。それだけは間違いないと思  
う」

ルブラン君が車にひかれた直後に手紙を書いてるのだから・・・

「デカちゃんも〜 部長の話聞いてたら〜 そんな感じがします〜」

「うん。私も・・・」

確かにそんな気がしてきた。でも・・・

「いつたい誰が？ ルブラン君の死に関わってる人物なんて

「はわわ〜 誰なんでしょう〜？」

「そう言えば・・・」

部長が何かを思い出す。

「ほひ、理事長からもらった手紙

「ん？ 何？」

「【from】とか【from U】とか、書いてなかつた？」

「ああ・・・」

昨日は混乱してたから、手紙の裏を確認するのを忘れてた。

「書いてる。ほら、コレ・・・」

「僕の予想じゃ、集合論の記号とみた。

補集合を表す【U】か、あるいは・・・」

【from】

「あれ？」

部長の予想はハズれた。

「これは～ シータですか～」

図形の角度を表すのに、よく使われる記号だ。

「あれれ～？ 絶対集合論がらみだと思ったの！」  
インターフェクション、コニオンときて、次がシータ？」

「部長が思ってるほど、この記号・・・  
意味なんて、ないんじゃない？」

私は素直に思った。

【】【】【】

「やつね。」りや、意味なんてなれど……

突然部長の眉がつり上がる。

「…………」

【】【コ】【】

じつと3つの記号を見つめながら……

「まさか……」

首を横に振った。

「部長？」

「どうしました？」

「…………」

部長の視線は、3つの記号を見つめたままだ。

「部長？ 何かわかったの？」

「い、いや。まさか……ね……」

「はわわ～ 何か解つたら、デカちゃん達にも教えて欲しいです～

「そうよ。部長……」

「・・・・・」

眉をつり上げたままの部長。

「ピタ子。最初の手紙、持ってるわよね？」

【from】のヤツ

「うん」

「見せて」

私はポケットに入れっぱなしだったその手紙を、部長に渡す。

「・・・・・」

部長は便せんを取り出し、それを凝視した。

「5・・・13・・・」

「？」「

「もしも・・・」

部長は手紙を見つめながら

「もしも次、こんな手紙が来てさ。それが・・・」

「それが？」

「アルファからの手紙だったら……」

「（アルファ）？」

【（アルファ）】……【】に次いで、角度を表すのによく用いられる記号だ。

「アルファだつたら、どうなるんですか～？」

「手紙の主が確定する。確率的にも、ほぼ間違いなく……」

「だ、誰よ、それ！？」

私は、その手紙の主・・・犯人の正体を問い合わせる。

「今は言えない。だつて・・・」

いつもの部長とは違う。魂が抜けかけたような感じだ。

「だつて、ありない事だから・・・」

「はわわ～ 教えて欲しいです～」

部長は首を横に振った。

「これは冗談抜きで、パラドックス・・・」

この部長の反応。

「・・・・・・・」

もしかして・・・

「私達が知ってる人?」

ピンと来た私。

「うん」

部長はそれを認める。

「誰!?」

「言えない。それを口にすることは・・・  
哲学者にとって、大きな覚悟がいる・・・」

「はわわ〜 こんな真剣な部長、初めて見ます〜」

「・・・・・」

知りたい。でも部長にも部長の哲学がある。簡単に人の哲学を否定してはいけない。いけないけど・・・

「じゃ、じゃあ・・・

昨日1日、私達が会った人物の中にその人はいる?

それだけでいいから、教えて!」

「・・・・・」

逡巡の後、部長は・・・

「……」

私と田を合わせず、そう言った。

部長の予言したアルファからの手紙。

今から3分後・・・

その手紙を手にするなんて、夢にも思わない私達だった。

(第13話へ続く)

第1-2話 部長の予言（後書き）

）

次回予告

部室を出た私は、ソーカルちゃんとぶつかった。

いつもとは、何かが違うソーカルちゃん。そんな彼女から・・・

私は【from】の手紙を受け取った。

次回 「 第1-3話 違和感 」

）

## 第13話 違和感（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし【】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている誰かだと言い切つた。

## 第13話 違和感

キーン ノーン カーン・・・

校内放送だ。

「【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へお越し下さい。

繰り返します。【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へ・・・

・

「はわ？ パちゃんの呼び出しだす～」

「な、何だらう～？」

私はイスから立ち上がった。

「僕も行く」

部長も続いて立ち上がる。

「え？ 呼び出されたの、私だけよ？」

部長は首を横に振った。

「わかつてゐる。でも僕も行く。いや、行つた方がいい

エロセクハラキャラなのに・・・今はそんなそぶりが微塵もない。

「じゃあ、デカちゃんも行きます～」

この展開を読んでいた私は

「お好きなよ！」

と告げ、真っ先に部室を出た。

バタン！！

「あ・・・」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかる。

あれ？ つい最近もこんな事があったような？

その場で倒れてしまった私。

「いてて・・・」

お尻をさすりながら前を向くと、色々な数式や化学記号がプリントされている洋服が目に入る。

「ソーカルちゃん！」

昨日と全く同じシチュエーション。違うといえば、ぶつかった子の名前を私が知っている事ぐらいだ。

「・・・」

私と視線を合わせたソーカルちゃんは

「今ね。今・・・

「H.C.で、光より速い【コートリノ】の観測に成功したって！  
わかる？ どんなにすごい事が起こったか？」

顔を近づけ、嬉しそうに語りてきた。

「アインシュタインちゃんの相対性理論が崩れるのよー。  
タイムマシンが作れるのーー！」

「はいはい。わかった、わかった・・・」

昨日同様、私の次に部室を出てきた部長が

「天動説が地動説に変わった時と同じぐらい・・・  
哲学に大きな波が押し寄せるわーー！」

やはり昨日と同じように、ソーカルちゃんの背中を押していく。

「ほら。【物理俱楽部】は、隣だから・・・」

「あと一つー あと一つ、数式を解ければ・・・  
タイムマシンが・・・」

「そうね。光より速い物質があれば・・・  
タイムマシン、作れるわよね」

そして隣の【物理俱楽部】へ押し込み、扉を閉めた。

「 も、 行こ。 理事長室」

邪魔者を力々たした部長が、笑顔を見せる。

「 うん。 でも・・・」

逆にモヤツとした表情を浮かべる私。

「 どした？」

部長が私の顔を覗き込む。

「 うん。 なんかあの子・・・今日、 变じやない？」

「 どいがです～？ 昨日もあんな感じでしたよ～？」

部室から出てきたソーカルトちゃん。

「 いや、 ほら。

昨日は意味不明な事、 しつちやかめつちやか言つてたのに・・・

今日は、 話のスジが通つていたような・・・？」

そう。 少なくとも私には・・・昨日のソーカルちゃんと、 別人に思えた。

「 まあ、 あの田つてヤツじゃない？ も、 行こ」

「 うん・・・」

バタン！！

「ちよつと待つてーー。」

物理俱楽部の扉が勢いよく開いたかと思うと、ソーカルちゃんが飛びってきた。

「…………」

違和感を感じる私。再び顔を出す事なんて、昨日はなかつたのに。彼女は私に詰め寄つてくる。

「な、何か？」

「コレ！ あなたについてーー。」

そして一枚の手紙を差し出した。

「10分前に、預かったの！」

ソーカルちゃんが差し出した手紙には

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれている。

「ーー？」

「…………」

「はわわ・・・

震える手で、私は手紙を受け取った。

「だ、誰？ 誰からこの手紙を…？」

すぐにソーカルちゃんに詰め寄る。

「えあ？」

いつものマシンガントークはめぐらしくやう。彼女はニヤニヤしながら・・・そのまま物理俱楽部の部室に戻り、自ら扉を閉めた。

「ちよ・・・ 待つて！ いったい誰がこれを…？」

物理俱楽部の扉を開けようとした私の肩に、部長がポンと手を置く。

「ピタ子。裏、見てみなよ

「・・・・・・・

言われた通り私は、手紙の裏側を上に向けた。

「はわわ・・・

そこには・・・

【from】

部長が予言した【】が書かれていた。

「な・・・」

呆然とする私と

「はわわ・・・」

「デカルトちゃん。そして・・・

「・・・・・・・」

部長は

「でも、これで・・・ 手紙の主は確定した・・・

私の横で寂しそうに呴いた。

(第14話へ続く)

第13話　違和感（後書き）

（

次回予告

私はどうどう・・・

部長の口から、手紙の主の名前を知る事になる。

次回　「第14話　犯人の正体」

（

## 第14話 犯人の正体（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし【】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている人物だと言い・

私はソーカルちゃんから、【from】の手紙を受け取った。

## 第14話 犯人の正体

「誰！？ 誰なのよ！？」

私は部長に詰め寄る。

「その前に・・・ 手紙の中は？」

「何で！？ 手紙の主が確定したんでしょう！？ すぐ教えてよーー！」

「僕自身、その子が手紙の主とは思えないんだ。  
だからまず・・・ 手紙の中を見たい」

「だ・・・」

言葉をのみ込む私。

「・・・」

「こひで言い争つても仕方がない。深呼吸をした私は手紙の封を開け、  
中を取り出す。毎度のように便せんが一枚入っていた。

【3人で理事長室へ】

「・・・」

「はわわ～」

「パラドックスのオンパレードね・・・」

ソーカルちゃんの証言では、この手紙が渡されたのは10分前。しかし私が理事長室へ呼び出されてから、まだ5分と経っていない。

「ど、どうこう事? 何で? まるで、未来から送られた手紙みたいに・・・」

「デカルちゃんわかりました!」

理事長があらかじめこれを書いて

ソーカルちゃんに渡したと思います~」

さすがデカルトちゃん。1番納得いく答えだわ。でも・・・

「そんな手の込んだ事・・・あの理事長がやるかしり?」

その時の私はそう思つていた。

「デカル子、ピタ子。理事長室、行くわよ。そこに答えがある・・・」

部長は犯人の名を明かさず、私達の先頭に立つて理事長室へ向かう。

「・・・・・・」

その後ろを私、最後尾をデカルトちゃんが続いた。

・・・・・

理事長室の前まで来た私達。スーツ姿の見慣れぬ2人の男が

「それでは、また明日」

そう言って、理事長室から出ていくのを見た。一礼した男達は、向こう側へ歩き出す。

「もし、R D N D の話が本当なら・・・

【医療の現場に革命が起こせるな・・・】

R D N D ?

「ああ。特許を取れば、間違いなく・・・  
数兆円の利益を得られるといつのこと・・・」

す、数兆円！？

怪しげな会話をしながら、男達は視界から消えていく。何だりつ？

理事長お得意の【鍊金術】がらみかしい？

「・・・・・」

理事長室の前に立った私は

トントン。

「失礼します」

ノックをした後、理事長室へ入つていく。

「失礼しますです」

「失礼します」

デカルトちゃんと部長も私に続いた。

理事長室に入るのは初めて。20畳ぐらいだろつか。広い部屋の周りをぐるりと囲むように、ガラスケースがある。そのガラスケースの中には・・・地図とか人形とか、色んなオブジェのような物が見えた。

「ああ。ちょっと待つてくれ」

サンジエルマン理事長は何枚かの書類を抱えて、奥のデスクに向かっていた。

「・・・・・」

その書類の文字が目に入る。

【RDN】? 【仮死】? 【硫化水素】?

何だらう？　さつき出て行つた人たちが言つてたヤツかな？

「3人できたか・・・」

書類をデスクの引き出しにしまいながら、理事長が呟いた。

「あ、あの・・・呼び出されたので・・・」

「わかつている。後ろの2人も入ひなさい。机のソファに座りたまえ」

部屋の中央にある、大きな大理石のテーブル。その前にある横長のソファに私達は座った。

「ふつかふかです〜」

嬉しそうなティカルトちゃんとは対照的に、私と部長は緊張気味。

「さて・・・」

理事長は、向かいのソファに座ると・・・

「呼び出した理由はこれだ・・・」

### 【ピタゴラスに告ぐ】

一枚の手紙を、表にして差し出した。

「・・・」

驚いたのは一瞬。さすがにもつ懐れてしまった。それに・・・

「なるほど・・・」

横で頷いている部長は、手紙の主を知っている。

「君達に聞いひ。」の裏に、何が書かれているかな?」

「・・・・・」

これが呼び出した理由なの?

「・・・・・」

私とテカルトちゃんは、同時に部長の方を見る。部長は、理事長に視線を合わせて

「フロムガンマ」

と言つた。ふるむがんま?

「ふふ。さすがは本校数学俱楽部の部長・・・」

嬉しそうな表情を浮かべた理事長は、手紙を裏返す。そして私達の目の前に・・・

【from】

手紙の裏に書かれた、それが映つた。いけん英語の【from】に見えるが、これはギリシア語の【（ガンマ）】だ。

「はわわ・・・」

「・・・・・」

私の脳裏にテカルトちゃんの言つた事が浮かぶ。手紙の主はやつぱ

り・・・理事長では？

そういうば昨晩、ルブラン君の家の前にも理事長はいた。何故あの時間、あの場所に理事長がいたのか？

それに私達が公園に行く前にも、理事長に会つてゐる。そして今日・

理事長は私達を校内放送で呼び出す前、あの手紙をソーカルちゃんに渡した。デカルトちゃんの仮説を認めれば、全てつじつまが合つ。

でも、理事長がこんな手の込んだ事を？

「・・・・・」

とはいえ【理事長が犯人】である事以外、この事態をうまく説明する事が出来ない。

「あの・・・ その手紙、いつたいどういうつもりで？」

あなたが書いたんですか？

「ピタゴラス君。この手紙が、誰によつて書かれたのか・・・？」

君はまだ、わかつてないようだ」

わかつてるけど・・・ 手紙の主があなたよーだなんて、目上の人には言ひづらい。

「はいー。」

重い空気が流れる直前、『テカルトちゃんが手を挙げた。

「『デカちゃんの推理によれば』この手紙の主は～」

立ち上がった『テカルトちゃんは、田の前の理事長に指さすと・・・

「サンジエルマン理事長！ ズバリ、あなたです～！～」

ドヤ顔で言つてのけた。えらい！ よくぞ言つてくれた！ 天然キヤラのみが許される無礼講だ。

「・・・・・」

「・・・・・」

しばし静寂の時が流れる。

「ブー！ テカ子、大ハズレ！」

静寂をうち破つたのは部長だけど・・・ え？ 違うの？

「デカ子が・・・

「一番最初に、犯人を言い当てていたんだけどな～ 残念～！」

え？

「では、ラッセル君。この手紙の主は・・・ 誰かな？」

そうだ・・・

何故、部長は【】からの手紙だと知っていた？謎はまだ残っている・・・

「ええ、僕にはわかります。この手紙の主は・・・」

部長は私をじつと見つめた。

「？」

キヨトーンとする私を指さした部長は・・・

「ピタ子です」

「ともあらうに、私を犯人だと言つた。」

(第1-5話へ続く)

第14話 犯人の正体（後書き）

「」「」「」「」「」

次回予告

部長は私が犯人である事を証明すると言ひ出した。

【】【】【】【】【】

この5つの文字・・・

そして私が犯人である決定的な証拠を・・・

次回 「 第15話 証 明 」

「」「」「」「」「」

## 第15話 証 明（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私だと言つた。

第15話 証 明

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

## 第15話 証明

「ちよ・・・」

「根拠は?」

私の反論より先に、理事長は部長へ質問する。

「まず最初にピタ子が手にした手紙に【from】とあります  
た。

僕は最初、【】をインターセクションだと思っていましたが・・

・

後に、これはギリシア語の【（パイ）】を表していると確信しました。

英語で書つと【α】

「ふむ・・・」

「次にピタ子が手にした手紙。ポール公園で見つけた【from】。

【】は英語の【】か、集合論の【】かと思いましたが・・

ギリシア語の小文字【】<sup>ウラシロン</sup>です。英語で書つと【λ】

「ちよっと待つてくれ

理事長がストップをかけた。

「お一方にもわかるよつ・・・」

「お一方? ピッチャリ、私とデカルトちやんらしー。」

「これに書くといい」

そつこいつと理事長は、自分のデスクから紙と鉛筆を取り出し、部長の前に置いた。

【】【ɔ】  
【ɒ】【y】

部長はギリシア語と英語の両方を書いて見せる。

「3枚目はルブラン君の家の前で、ピタ子が理事長から渡された手紙。

【f r o m】。【(シータ)】の英語での対応は【t h】

発音記号でお馴染みの記号だ。

【】【ɔ】  
【ɒ】【y】

ん? なんか見覚えが・・・

「4枚目は」こへ来る前、ソーカルちゃんからもひつた【f r o m】。

【（アルファ）】はもちろん……」

英語の【a】。

【】【ɔ】【】【】  
【ɒ】【y】【t̬h】【a】

え？ え？ まさかこれって……

「そして今、田の前にある【f r o m】。

【（ガンマ）】は英語で、【ø】にあたります」

【】【ɔ】【】【】  
【ɒ】【y】【t̬h】【a】【ø】

「はわわ……」

「もし、次の手紙があるなら……」

「待つて……」

私は部長の手を止め……

「【（オミクロン）】、【（ロー）】、【（アルファ）】、  
【（ゼータ）】……」

次に来るであれど、ギリシア文字を書いて見せた。

「ノーマ答……」

部長の寂しい返事が返つて来る。英語対応は【ο】【ㄣ】【α】【s】だ。

【】【ɔ】【】【】【】【】【】  
【ρ】【y】【t】【a】【o】【o】【a】  
【s】【ə】【ㄣ】【a】【ə】【s】

その場にいた4人全てが・・・

私の名前【Pリタゴラスyーtchーgoーrass】を凝視している。

「な、何でギリシア語?」

「ピタ子、ギリシア出身じやん。サモス島から来たんでしょう?」

そうだ・・・ナビ・・・

聖フィロソフィー学園は世界各国から生徒を募つてゐる、いわば多国籍軍。学園内の公用語は日本語と英語。

「母国語なんて、久しぶりに見た・・・」

でも、待つて。

「私、こんな手紙、書いた事ないわよ?」

「いや。ピタ子が書いたんだ、間違いない」

「だからこんな手紙、書いてないってば・・・  
本人がそう言つてるんだから・・・」

「証明して見せよつか?」

部長は自信満々で私の顔を覗き込む。

「是非とも証明して貰おうかしら」

私も自信満々で言い返す。犯人は勝手に人様の名前を使って、私を陥れようとしているに違いない。

「じゃあ、もしさ・・・」

「？」

「もし、僕が正しかったらやー ピタ子のブラ、ちょうどいい」

「ううう。理事長の前で、なんつー・・・

「いいわよー」

でもまあ、私が犯人のワケないし。その賭けにのることにした。

「じゃあ、部長が間違っていた場合は、部長は私に何かしてくれるのは？」

「ピタ子のブラ、2度とハズさない」

んー・・・ なんか私に得があるより思えない氣もあるけど・・・

「のった！」

私は部長に右手を差しだし

「H-t, s a d e a-l-」（決まりねー）

お互い、しつかりと握手した。

これから先、ブラパラパラに巻き込まれる事は無い。前向きにこの交渉をとらえよう。

「で？ どうやって私が手紙の主だと？」

余裕の私に、部長はニヤリと笑った。

「ピタ子のリュック、持つてきて」

「え？ 私のリュック？」

「そ」

「何で？」

「証拠がそこに入ってるから」

「・・・・・」

全く部長の意図が見えない。見えないけど・・・

「わかった。その証拠とやら、私も納得できるんでしちうね？」

それで白黒つくのなら・・・

「もうのロノムー。」

「…………」

しばらく部長の顔を見た後、理事長の方に視線を移す。

「ラッセル君の言つ通りに」

どうやら理事長も、それを望んでいたらしい。

「では……」

私はソファから立ち上ると……

「失礼します」

一礼して、理事長室を出て行つた。そして自分のクラス【古代組】へ向かつ。ロツカーカリュツクを取り出し、それを背負つと再び理事長室へ向かつた。

「…………」

「これがかの有名なピリレイスの地図だ。

1513年に描かれたと言われている

「はわわ～ あの時代に、こんな地図を描けるなんて～」

「理事長、この金色のロケットは？ 僕、いつもカッコいいの欲

しい～」

「それはコロンビアで発見された、黄金のシャトルだ。

年代測定の結果、今から1000年以上前のものだそうだ」

「1000年！？」

1000年も前に、こんなスペースシャトルみたいなものが？」

「ああ。不思議だろ？ 飛行機なんてもちろん無い時代の代物。こちらに来て『ごらん』。メキシコで発見された恐竜土偶がある。

これは、人類と恐竜が共存していたことを示唆する……」

力チャヤリ

「失礼します。戻りました……」

私が理事長室に戻ると……デカルトちゃんと部長は田を輝かせて、室内にあるガラスケースの中身を覗いていた。

「ああ、ピタゴラス君。戻ってきたね。では……」

再び私達は、大理石のテーブルを取り囲んだソファに座る。

「ほら、部長。リュック、持ってきたわよ」

テーブルの上にリュックを置くと……

「ちょっと失礼……」

部長がリュックを手にした。

「…………」

黙つて様子を見守つていると……

「だいたいピタ子。大事なのは、この奥のポッケに入れるんだよね  
こないだは、そこに替えのパンティ入れてたし~」

「ちよ……」

理事長の前で何を……いや、それ以前に勝手に私のリュックを・  
・

あれ？ やういや先週、替えのパンティ入れた時……無くなつ  
てたけどまさか……？

「ちよっと部長！ まさか私のパン……」

「あつた!!」

聞い詰める前に、部長が声をあげた。その手には手紙が握られてい  
る。

「…………」

表に【ルブラン君へ】と書かれていた。これは……

「はわわ~。これは、ロちゃんが最初にテカちゃん達に見せた手紙

です」「

部長はそれを裏返す。

「はわ？ 【from】 が無いですか？」

これは私がルブラン君のために書いたラブレターで、最初からルブラン君の靴箱に入っていたものではない。裏に何も書かれていない事が、それを証明している。

「ちよ、ちよっと。それはダメ……」

すぐに部長の手から手紙を奪い取つた。

「それが証拠だよ、ピタ子

え？ これが証拠？

じつとその手紙を見てみる。

「裏には【from】とか、書かれてないのに？」

一連の手紙には、必ず【from】と書かれてあった。

「中、見れば一発だから」

「中？」「

そう言えば私、どんな事書いたんだっけ？

「はわわ～早く中、見せて欲しいです～」

デカルトちゃんにせかされ、私は中身を取り出した。便せんが一枚だけが入っている。その内容は・・・

ハセガワ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。  
もつとあなたの・・・近傍に入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・  
限りなく近付いていけます。

メールアドレスを教えてくれたら・・・

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。  
トイレス近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？

それじゃ、放課後・・・

お会いできる事を信じて、お待ちしております。

Pis.

あなたにとつて、私が十分である必要はないけれど・・・あなたにとつて必要になれば、私は十分です。

信じられない表情を浮かべる私がいたのは、言つまでもない。

(第16話へ続く)

## 第15話 証明（後書き）

次回予告

パックになる私。

そんな私達に、理事長は数学の問題を出してきた。

それを解く事が出来れば……  
全ての謎が明らかになるという。

次回「第16話 合同数」

~~~~~

第16話 合同数（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいです・・・

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまつた。

校内放送で呼ばれた私は、ラツセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私である事を証明した。

卷之三

第16話 合同数

~~~~~

第1-6話 合司数

「は・・・ はわわ～」

「な、何コレ? あの手紙と、一緒にじゃない・・・」

「ね?」

部長が勝ち誇ったような笑顔を浮かべている。

私はポケットに入っていた【from】のラブレターを取り出す。中の便せんを取り出し、今一度それを見ると・・・ 全く同じ事が書かれていた。

「な・・・ 何で!?

「はわわ～ 同じ手紙が2通です～」

「どちらもペタ子が書いた手紙って事さ

嘘よー あつえない!~

「・・・・・・・」

2通の手紙を見比べる同じ。こっけん同じで見えるが、唯一違う点がある。

「う、裏に・・・ 【from】ってないわよ?」

「でも一字一句違わず、手紙の内容は同じ……でしょ？」

確かにそうだ。驚くべき事に、筆跡も全く同じ。私のラブレターと【】からのラブレター……違はずなのの中身が一緒って？

頭の中がさらに混乱する。

「嘘よ！ 絶対、嘘！ 何か……」「靈の陰謀よ……」

「はわわ……」

デカルトちゃんのセリフをとつてしまつた私。それほどパニックの極みだ。

「今思つて、ピタリじゃこ手紙だわ~」

「嘘……何で？」

「ピタ子の好きな数字が書かれてあるの…… わかる？」

「数字？」

「『』の手紙の中に出てくる数字があるんだ…… 聞いてみて。

「漢数字以外ね」

「えっと……」

手紙を見渡すと・・・

「5と1-3と・・・1?」

「いや。1-3分の1分前だから、1-2だね。  
5と1-2と1-3。何か浮かばない?」

これは・・・

「5の2乗プラス、1-2の2乗イコール・・・1-3の2乗。  
ピタゴラス数?」

「ね? ピタゴラスの手紙ってワケ」

セツナヒト部長は口をひらくと笑った。

「じゃ、ピタゴラスのワラ、貰うから  
これでパンティとセットでゲット~

あ、後でいいから。ワラもひつね」

まだパニック中の私・・・え? パンティも取つた? あれ?  
どうやら紛れて部長・・・

手紙のことは全く理解出来ないけど、部長が正真正銘の変態だとい  
う事だけは理解した。

「で、でも・・・何がいつたい・・・?」

「はわわ・・・」、これはやつぱり・・・「靈の仕業です」

「さひ・・・」

混乱する私と『テカルトちゃんをよそに、サンジュークマン理事長が声を出した。

「君達の謎は・・・ もつーつ、これ解く事で全て明らかになる

そういうと理事長は、私達の田の前に一枚の紙切れを出した。そこには・・・

「直角・・・ 三角形？」

× 1 3 7 1 0 7 — 2 4 3 0 ×

直角三角形が描かれており、その三角形の中には【157】という数字がある。斜辺、すなわち一番長い辺のところには【×】と書かれていた。

「合同数というのを？」存じかな？

理事長は私の目を見て尋ねる。

「・・・ はい・・・」

知ってる。

3辺の長さが全て有理数の時、面積が自然数となるならば・・・  
その自然数nを合同数という。定義自体は簡単だし、何よりも私

の嫌いな無理数が出てこない。

例えば、ピタゴラス数として知られる(3・4・5)。これらを3辺とする直角三角形は、斜辺が5・他の2辺は3と4。

$$3^2 + 4^2 = 5^2$$

面積は底辺×高さ×(1/2)の公式で

$$3 \times 4 \times (1/2) = 6$$

と出る。だから自然数6は合同数だ。あと、ちょっと難しいけど5も合同数として知られている。3/2・20/3・41/6も

$$(3/2)^2 + (20/3)^2 = (41/6)^2$$

私の、いわゆるピタゴラスの定理を満たすので、直角三角形の3辺になる事が出来る。面積は

$$(3/2) \times (20/3) \times (1/2) = 5$$

となるので、自然数5も合同数というわけだ。

「5と6は合同数だけど・・・

1・2・3・4は合同数でない事も知られてるよね

部長が言った。

「では、この157は合同数かな?」

「ちゅうど、すぐには・・・」

「はわわ・・・」

私とテカルトちゃんには心えられなかつたが・・・

「157は合同数です」

部長は言つ切つた。

「どんな数が合同数になるかってのは、数学の中では未解決問題の1つ。

だけど奇素数の場合、8で割つた余りが5なら・・・

その奇素数は合同数つて知られているの。いわゆる十分条件の1つね

むむ？ 合同数の問題つて、未解決問題なんだ？ そんな事も知らない私。

「157は素数で・・・8で割ると余りが5。  
だから、157が合同数だつて事だけは確かよ

エロトーク無しで私達に説明してくれる。頼りになる数学俱楽部の部長だが、相変わらず私の頭は整理がつかない。

「157は合同数か・・・」

理事長は一やりと笑い、部長に質問した。

「では、Xは？」

「・・・ そ、それは・・・」

言葉に詰まる部長。

「合同数とわかつていながら・・・

有理数である3辺の長さを出す事は容易ではない。

スーパーコンピュータを用いてもだ」

理事長が神妙な面持ちで語り出す。

「3辺が有理数で、なおかつ157を面積とする直角三角形は・・・

無限個ある事もわかつている。

なのに、その辺の長さはわからない。

不思議なもんだな。数字と言つのは・・・

「・・・・・・」

私達3人は、直角三角形を凝視する。

> 137107 — 2430 <

「【生】とは何か？ 【正義】とは何か？ 【愛】とは何か？  
【宇宙の起源】は？ 【神】は存在する？

「この世界、答があるはずの疑問は数多い。

それこそ真実は無限にあるはずなのに……」

「…………」

「ところが、彼らの答え一つ見いだす」とすら容易ではない。

ふふ。この【×】……

そんな現実を皮肉つていいよ! だ

何が言いたいんだろう?

「あの……理事長。私を呼び出したのは、いったい……?」

「その理由は明確だ」

理事長は私をじっと見つめた。

「君に、この【×】を求めて貰いたい」

「え?」

「私に? 何故?」

「あの……」

私に変わつて、部長が理事長に質問した。

「合同数を求めるのは、高度な数学理論を要します。

何故【現代組】の生徒ではなく、【古代組】のピタゴリオ……?」

おっしゃる通り。

「 $\pi$ の【×】が有理数だからだ」

理事長は即答する。

「え？」

「合同数の世界は、有理数だけで構成される。

【現代組】の生徒は実数ありきで計算し、【×】にたどり着けないだろ？

むしろ有理数しか知らない・・・  
ましてや直角三角形のスペシャリストと言われる・・・

「・・・・・」

理事長の視線が、私に突き刺さる。

「ピタゴラス君。君が $\pi$ の【×】を求めるの $\pi$ ふさわしいと思つた  
んだ」

「・・・・・」

わ、私が？

「ピタゴラス君。底辺と高さが $\sqrt{2}$ の直角三角形の斜辺を求めるよつ。  
・・・

「この【×】を求める方が、君には適した仕事だ。

「そうは思わないか？」

「思わないけど……」

「あの…… 理事長……」

私は今の心境を正直に伝える事にした。

「正直私…… その…… あの手紙にあるように私は…… ルブラン君の事が好きでした。

今はまだ、ルブラン君の死をまだ受け入れられなくて…… 【×】を求めるような心境に…… なれません……」

「ふふ……」

理事長が不敵な笑みを浮かべる。

「？」

「全ては…… 」の【×】にある

「はい？」

「何？ どういう意味？」

「来たまえ。3人ともだ」

理事長は立ち上ると・・・ 私達3人を、部屋の奥へと呼び寄せた。奥にはカー・テンがかかっているところがあり、理事長はそれを開ける。

「・・・ 何?」

カー・テンの向こうには、大きな段ボールがあった。

「中を見せてあげよう」

そう言つた理事長は、手際よく段ボールを止めていたガムテープをひきちぎる。そして・・・

大きな球体が私達の目に前に現れた。直径が1・5mぐらいだろうか? その球体は銀色の美しい表面で覆われ、下側には何か機械じみたものが見える。パツと見では・・・ 何かの乗り物みたいな?

「はわわ・・・」

「何ですか、これは・・・?」

「・・・・・・」

部長は無表情でそれを見つめている。まるで、この球体が何かを知つてゐるみたいだ。

「これこそ・・・ 神の贈り物だ・・・」

「え! ?」

(第17話へ続く)

# 第16話 合同数（後書き）

次回予告

私は何が何だかわからないまま、【X】を求めるように言われる。

そしてこの【×】かわがれば・・・

なんどリニハ君たゞ

次回  
—  
第17話  
神の贈り物

深深深深深深深深深深

## 第17話 神の贈り物（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は・・・ 数学の問題を私に出す。これを解けば、全ての謎を解けるというが・・・？

## 第17話 神の贈り物

聖フィロソフィー学園・・・サンジールマン理事長【神】を口にした。

「はわわ・・・」

「・・・」

「神の存在を・・・理事長は認めるといつ事ですか？」

私達を代表して、部長が質問する。

「言つたろ？ 全ては【×】にある・・・見る」

理事長は球体の真上を指さした。そこには直角三角形が描かれており、その三角形の中に【一五七】と書かれている。

八・五三七一〇七 — 二四三〇八

「一」、これ・・・わざと理事長が紙に書いたのと同じだ・・・

斜辺に【×】と書かれているところも全く同じ。そして・・・

「テンキー？」

電卓のような数字配列のキーが、三角形の横にはあった。

「オーパーツ……」

「はわわ……不思議な物体です~」

「最近のものだと、今から20数年前といつ奇妙な結果が出ている」

思わず声をあげた私。紀元前2000年もの昔に、こんな綺麗な球体があるなんて……絶対ありえない。

「そ……そんな昔…?」

年代はバラバラ。  
最古のものは、紀元前2370年プラスマイナス80年

「」の球体は、先月……アラリ亞の、とある場所で発見された。

複数の付着物を、カーボン14という年代測定法で調べたが……

【0】から【9】までの10個のキーと、2つの矢印キー。そして【+】【-】【×】【÷】の四則演算キーと、【Enter】…あとは、よくわからない【】キーが一つ。計18個。

【/】【】【Enter】

部長が呟いた。

「な、何？ オーパーツって？」

「【Out of place artifacts】。  
場違いな出土品って事。つまり……」

部長は理事長室にあるガラスケースを指さす。

「その年代のテクノロジーでは作り得ない、存在し得ない物の事」

そう言えば…… 理事長は世界中の珍しい物を集めるのが趣味と  
聞いた事がある。このガラスケースの中にある物って……

「オーパーツ？」

「私はある研究機関の依頼を受け、この球体の材質を調べた。  
ところが、この合金……

地球上にあるどんな技術をもってしても、生成し得ないものだっ  
た」

「はわわ……」

「げ、現代でも…… 作り得ない？」

「正真正銘の…… オーパーツ……」

「私への調査依頼はリミットがあつてね。ちようじゅう日。

これを譲り受けて、すでに「一日が経過している。

明後日の夜には、これを送り返せねばならぬ」

理事長はその球体を右手でさすっている。

「ピタゴラス君ー。」

「は、はひー。」

突然理事長に呼ばれた私は、声が裏返った。

「でもれば明日まで【】・・・【】の【】を求めて欲しい

何故、【】に執着するの？

「あの・・・ その【】を求めるに、何が起るんですか？」

「実に不思議な金属で、X線による内部の様子もわかつていい。球体の中には、シンプルな構造の電子機器が内蔵されているようだ。

おやらくこのテンキーで、正しい【】を入力すれば・・・  
この機械が起動すると思われる」

球体の外側で何かを操作出来るとしたら、そのテンキーしかない。  
理事長の言つ事が、正しいような気がしてきた。

「・・・・・・」

「パソコンで、調べられないんですか？」

部長が理事長に聞いた。

「調べたさ・・・」

小さな溜息をついた理事長は、私達に問ひ。

「1潤<sup>かん</sup>という単位を？」

「1潤？」

何それ？ 単位？

「デカちゃん知っています。1兆の1兆倍の、さらにも1兆倍ですか？」

「一、十、百、千、万、億、兆、京、垓<sup>けい</sup>  
杼<sup>じよ</sup>、穰<sup>じょう</sup>、溝<sup>こう</sup>、澗<sup>かん</sup>・・・」

部長は、単位を数え上げてくれた。

「分母分子、ともに1潤×1潤の組合せを・・・  
スーパー・コンピュータに試させてみた。」

ところが全て不正解。

この【×】は、やうに上の単位で答を持っている事が判明した

「な・・・」

日本のほこるスーパーコンピューター【京】（けい）。1秒間に1京以上の計算をこなしたと認定されている。1秒間に1京もの計算が可能だとして、1澗もの計算をさせるには・・・ 1京の1京倍の1万倍の秒数かかる事になる。

それを時間に換算すれば・・・

「3兆年かかるです~」

「デカルトちゃんは、暗算が得意だ。

「3兆年って・・・」

呆然とする私。

「宇宙年齢は、約137億年と言われてるけどね」

部長が追い打ちをかける。

「無理!! 無理でしょ!!? スパコンでも3兆年かかる計算を・・

・ 私が24時間で!!? 絶対無理!!?」

それに・・・

「仮にこの【×】を求めたとして・・・ この機械が動いたとして・

・ その先に、何があるっていうんです!!?」

思わず逆ギレ気味に、理事長につめよった。

「これで3度目だ。その先には・・・全てがある」

「意味、わからないです」

「僕の仮説が正しければ・・・」

「？」

不意に部長が急に語り出す。

「IJの機械が動けば、ルブラン君が・・・」

え？ なんで、IJでルブラン君が出てくるの？

「ルブラン君が生き返る・・・」

「えええええ！――？？」

(第18話へ続く)

第17話 神の贈り物（後書き）

（この後書きは、原作第17話の後書きを、後書きとして記す形で書かれています。）

次回予告

部室に戻ってきた私達。ルブラン君の事を部長に聞くけど、はぐらかされてしまう。

【from】の手紙には、謎の数字【1729】が書かれている。

それが何と、【×】を求めるための・・・

次回 「 第18話 インドの魔術師 」

（この後書きは、原作第18話の後書きを、後書きとして記す形で書かれています。）

第18話 インドの魔術師（前書き）

前回までのあらすじ

私はピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいです。

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまつた。

校内放送で呼ばれた私は、ラツセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は数学の問題を私に出す。これを解けばルブラン君が生き返る・・・部長はそう言った。

# 第18話 インドの魔術師

A vertical decorative border consisting of a series of stylized, wavy, horizontal lines.

## 第1-8話 インドの魔術師

「ねえ、部長。ルブラン君が生き返るって、どうこいつ事？」

部室に戻ってきた私達。

「さあ？ カマかけて言つてみただけだから・・・」

サンジュルマン理事長は・・・ 部長の言葉を肯定も否定もしなかつた。

「・・・」

実はルブラン君は脳死状態で、体はまだ生きているとか？ でも今朝、全校生徒の前でルブラン君の死を報告してゐるし・・・ あるいはあの機械の中に、死者をよみがえらせる薬がある？ まさかね。

「それにしても・・・」

謎が多くある。

「Iの手紙・・・」

【from】

理事長から受け取った【ピタゴラスに告ぐ】の手紙。Iの中には、

毎度の「」と便せんが一枚。その便せんの中には・・・

### 【1729】

とだけ書かれていた。

「何、コレ？ 意味わかんない」

「【×】じゃない事だけは確かです～」

もう、ワケわからぬ事だらけ。

♪ 137107 — 2430 ♪

この【×】が求められたら・・・

「ホントにルブラン君・・・ 生き返るのかもよ

部長はそう言つた・・・

「死んだ人が生き返るなんて、ありえない」

私は死んだルブラン君を病院で見ている。

「ありえないです～」

全てを疑うデカルトちゃんでも・・・ 死んだ人が生き返るなんて、思つてはいない。

「まあ、理事長曰く『全てはこの【×】にある』らしいからや。」

ピタ子、早く求めてよ

そんな事言われても・・・

「暗算得意よね？ デカルトちゃん」

「デカちゃんでも～ さすがにこんな大きな数、無理です～  
だよね。スペコンでも計算出来ないんだから・・・

「僕、思つんだけど。

まず攻めてみるのは、この【1729】だと黙つよ」

部長はテーブルの上に広げられていた便せんを指した。

「はい、デカ子！ 素因数分解！」

「1729は～ 7かける13かける19ですか～」

「うわ・・・ 絶対素数だと思ったのに。  
僕のカンもにぶつたな～。う～ん・・・」

【現代組】の生徒達は、まず素数を疑う・・・ 有名な話だ。

ガラガラ・・・

不意に部室の扉が開いた。そして1人の生徒が入ってくる。

「ラ、ラマヌジャンちゃん！～」

部長が驚いたような声をあげた。

「……、ラッセルちゃん」

ブラバラ事件で唯一、ブラジャーをはぎ取られなかつた子。美しい黒髪に、これまた美しい黒目の中の女の子。

「ピタゴラスちゃんにデカルトちゃんも……お久しぶり

「え？ あ……お久しぶり？」

「はわっ！」

昨日と何か雰囲気が違つ。何か今日は……友好的なオーラ、出でない？

「な、何しに来たの！？」

やや焦り気味で喋る部長。どうせラマジアンちゃんは、手荒い。

「うん……私、最近体の調子が悪くて……

明日、田舎に戻るの。

だから自分の物、取りに来たの」

やつと彼女は……

【ナマギーリ女神の、おかげです】

ところへ、題作をはさみ取つた。そして部屋を出て行つた。

「はわ！？ それを取りにきただけですか～？」

「デカルトちゃんが声をかけると

「うん。昨日で、本は持ち帰つたから・・・ 今日はこれだけ」

元気なひやくに応えたラマヌジヤンちゃん。

「？」

ふと机の上にある物を見て、彼女はよつてくる。

「せんなんひやく・・・ じじゅうく・・・」

【1729】

例の手紙を見て呟いた。

「あ？ これ？ 素数でもないし、つまらない数なんだナゾ・・・

」

部長が詫つと・・・

「そんな事ない・・・ とっても神秘的な数だわ

え？」

「どうが？」

「1の3乗たす12の3乗は1729だし・・・  
9の3乗たす10の3乗も1729」

「確かにそうですけど〜」

暗算の得意なデカルトちゃんだけが頷いている。

「IJの数字は、2組の異なる2つの立方数の和で表す事ができる・・・

・  
最小の数ですわ」

え？ そうなの？ 1729がその・・・ なんたらの最小数？

「はわわ〜 デカちゃんでもわかんないです〜」

「・・・」

「【現代組】ではこの子、【インドの魔術師】の異名を持つてるからね。」

僕の知る限り、数字の感覚は世界一よ」

「インドの魔術師？」

部長が世界一といつづらじだから・・・ ホントにすごい子なんだ。

「でもね、この子・・・

数々のすごい公式発見してくれるのはすごいになつて思つんだけ  
ど・・・

証明はじくれないのが、玉にキズなのよね～

「…………」

「マジヤンちやんは、無事で手に持っていた物を広げて見せた。

【ナマギー、女神の、おかげです】

そして弱々しく、「」と笑う。

「…………」

なんだか、独特の空氣を持つてる子だ。

その時……

私の中に何かがひらめいた。

「じゃあ、みなさん。」とみんなへ・・・

「うふと待つてーーー！」

出て行くと、マジヤンちやんを元を留める。

「ひとつしてあなた・・・、【】の【×】、わかつたりしない?」

私はマジヤンちやん、理事長からもらった直角二角形の図を見せた。

「どう? 合同数の問題なんだけど」

「合同数…………」

「ハマジヤンはじつとそれを見つめたあと……

「…………」

私を見つめ、じつ囁つた。

「216垓<sup>がい</sup>、6655京<sup>けい</sup>、5693兆<sup>ちよう</sup>  
7147億<sup>おく</sup>、6130万<sup>まん</sup>、9610分の……」

4113垓<sup>がい</sup>、4051京<sup>けい</sup>、9227兆<sup>ちよう</sup>  
7161億<sup>おく</sup>、4938万<sup>まん</sup>、3203」

「え? え? ちょ……」

「はわわ……」

「嘘……でしょ?」

まさか、【×】をこい当てた?

「ちよつと待つたあ……」

部長が大きな声をあげる。

「理事長が言つには、この【×】……  
1潤<sup>かん</sup>、すなわち1兆の1兆倍の1兆倍の数字を超えてるのよ。」

「垓<sup>がい</sup>は、1兆の1億倍。今のは【×】じゃないわーー！」

確かにそうだ。でもラマヌジヤンひやんは、弱々しく笑つて言い返す。

「私が言つたのは、【×】じゃなくて、111の数……」

そう言つと彼女は……直角二角形の斜辺じゃなく、底辺の方を指さした。

「な・・・・何で？　何でわかるの！？」

「・・・・・・・・」

ラマヌジヤンひやんは、無言でそれを広げて見せる。

【ナマギーリ女神の、おかげです】

「いや……」

それ？

「ま、まあ・・・・」の子は、不思議ちやんだから・・・

苦笑にする部長。私はラマヌジヤンに視線を合わせ

「でも、セレガわかるなら・・・・【×】もわかるって事でしょ？」

そつ尋ねる。

「 もちろん。でもそれは・・・あなたが考えるべきですわ」

「 ど、どひして！？ ここまで来たら・・・  
ズバリ教えてもいいじゃない！？」

「 ハマヌジヤンちゃんは、やつぱり弱々しく笑った後・・・

【ナマギーラ女神の、おかげです】

を広げて見せた。

「 ・・・

「 ・・・

「 ・・・

部長も『カルトちゃんも一齊に固まる。意味わかんないけど、説得

力を感じるのは何故だろ？』

「 それじゃ私は、やよならですわ・・・」

「 あ・・・ わよ・・・」

「 ハマヌジヤンちゃんは、そのまま部屋を出て行った。

「 ま、待って・・・」

「 ま、待って・・・」

追いかけよつとした私の肩を、部長が捕まえる。

「ピタ子。大丈夫。

1辺の長さがわかれれば……面積からひもつ1辺の長さも出る。

でしょ？」

「う、うん……」

「あとはあなたの専売特許で、【×】出せるじやん」

その通りだ。面積がわかつてゐる直角三角形はどこか1辺でもわかれば、残り全てを計算できる。そつ・・・

【ピタゴラスの定理】で……

「そ、そうよね。じゃあ、早速計算するわ……」

意気揚々で紙と鉛筆を用意し・・・

「・・・・・」

そのまま固まる。

「どした? ピタ子?」

「・・・ 何だっけ?」

「何が?」

「せつせつ、『ラマヌジヤンちゃんが言つた数字』……」

「あ・・・」

あんな長い数、一度聞いて覚えられるわけがない。

「や、やつぱりもつ一度ラマヌジヤンちゃんを呼び出し……」

その時

「216垓<sup>がい</sup>、6655京<sup>けい</sup>、5693兆<sup>ちよう</sup>  
7147億<sup>おく</sup>、6130万<sup>まん</sup>、9610分の・・・」

4113垓<sup>がい</sup>、4051京<sup>けい</sup>、9227兆<sup>ちよう</sup>  
7161億<sup>おく</sup>、4938万<sup>まん</sup>、3203です～」

「え？」

「で、デカ子？」

「はい～。デカちゃん、ちゃんとメモつてました～。ほら～」

そう言つと、ものすゞ～長い数字の分数が書かれている用紙を見せた。

何とデカルトちゃん。たつた1回しか言わなかつた、ラマヌジヤンちゃんの言つた数字を・・・全てメモつていたのだ。

「デカした、デカ子！～！」

「 もや～、 テカちゃん、 壊められると伸びる子ですか～」

「 このは抜けているよつだけど・・・ 要所を締めるタイプだ。」

「 ょしー、 『 優美に僕が・・・ おっぱいを大きくしてあげよつー。』

大きなヤマを超えたからだわつ・・・

「 もや～！～」

田の前の2人は、 いつもの2人に戻っていた。

ラマヌジヤンちゃんが嘘をついていたか、 あるいは『 テカルトちゃんのメモが間違つてない限り・・・』

【 ×】 を求める事は出来る。

先にバラしちゃうけど、 ラマヌジヤンちゃんも『 テカルトちゃんも』 / /  
スはなかつた。 つまりあの数字は正しいものだ。

そりとなれば・・・

そつと【 ×】 求めて、 すぐにでも理事長の元へ行こう。

そう思つていたんだけど・・・

( 第19話へ続く )

第18話 インドの魔術師（後書き）

次回予告

ついに【X】を求めた私。理事長室にあつた、あの球体にその数字を入力する。

すると・・・

次回 「 第19話 【X】、そして球体の正体 」

## 第19話 【×】、そして球体の正体（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで……

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまつた。

気になつていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えのない私に、理事長は数学の問題を出す。

私はラマヌジヤンちゃんのヒントを足がかりに・・・

第19話 【X】、そして球体の正体

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

## 第1-9話 【×】、そして球体の正体

サンジュルマン理事長から、【×】を求めるよつに言わされて24時間後。

3月26日。金曜日だ。

私、以下2名は理事長室にいた。

「【×】を求めた?」

理事長が聞き

「はい」

私が応える。

「……」

意外と手間がかかった。1辺の長さがわかれば、面積からもう1辺の長さはすぐにわかる。でも、2辺の平方和をとる作業は……かなりの重労働だった。

最初、コンピュータにやらせようと思つたんだけど……あれだけの桁数、しかも分数計算となると、コンピュータもオーバーフローを起こしてしまう。結局、手計算で頑張つたんだけど……

2つの巨大な分数を平方して、通分して、和をとつて、足して、約

分して、ルートをとる作業・・・

徹夜してなおかつ、ついたままで計算して、ようやく【×】を求める事ができた。暇な読者がいれば、あの【×】を是非とも求めて欲しい。PCをもつても、簡単に出来る代物ではないわよ。

「では・・・」

理事長と私達は、あの球体の元へと歩み寄った。理事長はテンキーの前に手をかざすと

「その数字、まずは分子から言じたまえ」

「桁をひとつわかりづらくなるので・・・数字をそのまま言こます」

「わかった」

「22440351770433696992455751309  
06674863160948472041」

自分で言つてて、どんな単位かもわからない。後で部長から聞いたら【極】って単位なんだって。そんな単位、聞いた事無いんだけど?

理事長はその数字を打ち込み、【/】（スラッシュ）キーを押した。

「では、分母を」

「 8 9 1 2 3 3 2 2 6 8 9 2 8 8 5 9 5 8 8 0 2 5 5 3 5 1 7 8 9  
6 7 1 6 3 5 7 0 0 1 6 4 8 0 8 3 0 です 」

それにもしても、この【×】… 無限にあるらしい。最も簡単な解でも、これだけの恐ろしい有理数が出てくる。ならば、他にある無限個の解は…

考えるの、ヤメておこう。

「 … … … …

理事長は慎重に数字を打ち込んでいく。そして…

【Enter】キーを最後に押した。

「 … … …

「 … … …

「 … … …

緊張の時が流れる。そしてその時はきた。

音も立てず、その球体のテンキーの下側…

大きな円の穴が開いたのだ。

「 … … …

その場にいた全員、息をのむ。

正面から見ると球体の横側……といつても球だから、どこが横  
つては言えないんだけど……

テンキーの下側が半径1mぐらいの円となり、穴が開いている。誰  
が見ても入り口だ。そこから球体の中を覗くと……小さなパネ  
ルみたいなのが見えるだけで、イスもなければ柱なんかも見あたら  
ない。

「や……やった……！」

よつやく声をあげたのは私。

「す、すいこです、はわわ～」

「……」

「……」

部長と理事長は沈黙していたけど……難しい数学の問題を一つ  
解いたところは、私にとつて素直に嬉しい。

ひとしきり喜んだ後は……あの言葉が気になつた。

【この機械が動けば、ルブラン君が生き返る】

部長は確かにそう言った。もうすぐ、その言葉の真相がわかるはず  
だ。

「で？ 理事長、この後は？」

私は理事長に声をかける。

「・・・・・」

球体を呆然と見つめている。

「理事長?」

「えー? あ、ああ・・・」この後だな・・・」

放心状態だった理事長が、ようやく私の声に応じた。

「・・・・・」

左手の拳を丸め、それを鼻つ柱にあてる。

「・・・・・」

そして、何かを悩んでいるようだ。迷っているような表情を見せた  
後・・・

私に視線を合わせ、こう言った。

「我が子を・・・ 救つて欲しい・・・」

な・・・

「何ですってー?」

「何ですって！？」

「はわわ～」

デカルトちゃんだけは、ハモれなかつた。

「我が子、ルブランを・・・君達なら救えるはず・・・」  
ちよ・・・まさかの衝撃の事実。ルブラン君は、サンジエルマン  
理事長の子供！？

「ル、ルブラン君の・・・お父さん？」

呆然とする私は、理事長に聞いてみる。

「やうだ。ルブランは、私の子だ」

「・・・」

それを理解するのに、私達3人はしばしの時間を要した。

「ルブラン君を・・・救つてくれ？」

何とか親子関係を受け入れた私は、次の質問をする。

「ああ」

「ちよ、ちよっと待つてください、理事長。  
すでに死んだルブラン君を救えつていわれても・・・」

混乱の極みにいる私の言葉を遮り、部長が声をかけてきた。

「ピタ子、まだわかんないの？」

「な、何が？」

「テ力ちゃんも、何が何だか？」

部長だけは……【何か】がわかつてゐるようだ。

「コレに乗つてさ……2日前に戻るのよ」

そして、あたかもそれが当たり前のようひびつけてのけた。

「ですよね？ 理事長？」

部長が理事長に言葉をかけると……

「・・・・・」

理事長は黙々と頷いた。

「え？ エ？ 何？ 2日前に戻るって？」

つて事はまさか……この球体って……

「タイムマシン…？」

「タイムマシン…？」

最初で最後・・・

私とデカルトちゃんは、綺麗にハモつた。

(第20話へ続く)

## 第19話 【X】、そして球体の正体（後書き）

次回予告

あの球体がタイムマシン！？ そんな事、信じられるわけがない。

まずは乗つてみようか、部長が言った。過去へ行けなければそれで  
おしまいとい諭され、私達はその球体の中へと入つて行く。

そして · · ·

次回  
「第20話 時空を超えて」

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

# 第20話 時空を超えて（前書き）

前回までのあらすじ

私はピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで……

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまつた。

気になつていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私で  
ある事を部長が証明した。身に覚えないのに、なんで！？

そして私達は・・・理事長室で、ある球体の前に立つ。

何とそれは  
・  
・  
・

A vertical decorative border consisting of a series of black, wavy, horizontal lines.

} } } } } } } } } } }

## 第20話 時空を超えて

私とデカルトちゃんは・・・

その球体がタイムマシンといつ事を、受け入れる事がなかなか出来ない。

ただ、タイムマシンの存在を認めてしまえば・・・

これまでの不可解な事は、説明がつくような気がする。

「つまりこのタイムマシンで、過去に戻り・・・  
交通事故に遭はずのループラン君を・・・助けると?」

まだ半信半疑の私。いつからか敬語を忘れている。

「その通りだ」

理事長は言いついた。

「はわわ~ デカちゃん、思うんですけど~」

タイムマシンを受け入れられないもう一人・・・デカルトちゃん  
が声をかけてくる。

「ループラン君のお父さんが理事長なら~

理事長自身が、子供を助けに行くべきでは~

ないでしようか～？」

冷静に考えれば、もっともな意見だ。だが理事長はクビを横に振る。

「出来る事ならそうしたい。だが私は・・・

2日前、君達を見た。ルブランが車にひかれる日の朝・・・

君達3人が、学校の屋上で楽しそうに話しているのを・・・」

「そういえば理事長・・・ 一昨日おどとこ 部室の前で会った時、そんな事言つてた。

「しかしその日の午後、君達に会つた時・・・

朝に3人でいた事実はないといつ」

実際、その朝はみんなバラバラに登校している。

「テカちやんは、お昼過ぎに登校しました～」

「朝には、いるはずのない君達を見て・・・ 昼にはそれが届いた・・・」

理事長の視線の先には、あの球体・・・ タイムマシン？ がある。

「そしてその日の夕方には・・・

私は手紙を渡すピタゴラス君にも出合つている

えつと・・・

「【f-tom】の手紙だ。下手な変装をした君が渡した」

あ～・・・あれか。

「あの時、私はこう思つた。  
きっと君達3人は・・・

我が子を救うため、未来から来たのだと・・・」

「なるほど・・・」

部長だけが頷いている。私とデカルトちゃんは、今なお理事長の話を飲み込めない。飲み込めないけど・・・

・  
「えっと・・・2日前、未来から来たであろう私達を見たから・・・  
今から『』に乗つて、過去へ戻れと・・・  
おひしゃつてる・・・んですね？」

この乗り物がタイムマシンとこいつ前提で、私は理事長に聞いた。

「・・・」

理事長は無言で頷く。

「で、でも・・・」

「あのや〜〜」

私の言葉を、部長が遮る。

「ペタ子、書つてたじやん」

「え？」

「ほり、ラブレターの件で……」

【私が盗まなければ……  
ルブラン君は公園に行っていた。交通事故にも遭わなかつた……！】

「うひー！」

た、確かにそつま書つたけど……

「チャンスじゃない？ 自分の過ちを出す。  
愛しのルブラン君をこの世に戻す……ね？」

「う、うへん…… それは、そりなんだけど……」

私の視線は【タイムマシン】とせりを捉える。

「まずは乗つてみようよ。

『デカ子もペタ子も、タイムマシンに懷疑的なんでしょう？』

「う・・・

理事長のこの前で【さ】と【さ】と書つてござつた。

「まあ、表情見てりやわかるつて。

だからまず、コレに乗つてみてや・・・

過去へ行けなければ、僕らでできる事は無い。  
その時点で、この話は終わつて事でいいじゃん」

「・・・・・・・・

部長の言つ事、一理ある。

「デ力ちゃん、難しい事嫌いです～。だから部長に賛成します～！  
まずは、この乗り物に乗つてみるです～」

「そ、そうね。過去に行くなんて、考えられないけど・・・  
まずは乗つて、ダメならそこまで・・・よね・・・」

「じゃ、ピタ子から行くわ

え？ わ、私？

「ルブラン君のラブレターを盗んだの、ピタ子だしょ？」

「う・・・・

で、でもさ・・・・自分で自分のラブレターを盗つたつて事になる  
のよね？

それがルブラン君の死に繋がつたつて・・・ 何か変じゃない？

「・・・・・・・・

考えれば考えるほど、余計わからなくなる。

「わ、わかったわよ・・・」

もし過去に行くことが出来れば、全ての謎が明らかになるのかもしない。

「行けばいいんでしょ」

まずは行動してみよつ。思考はその後。

「ほり、リュックも忘れず！」

部長がリュックを手渡した。

「・・・・・・」

それを背負つた私は、理事長と視線を合わせる。

「これを持って行くといい

理事長が1本の鍵を渡してくれた。

「本校のマスターキーだ。校内なら、どの部屋も開ける事が出来る

鍵を受け取った私は・・・ 球体の横に開いた円から中に入る。

「・・・・・・」

「・・・・・」

直立だと頭がぶつかっちゃうけど・・・ ちょっとかがむ程度で、立つたまま中に入る事が出来た。

「わ・・・」

外からは銀色の表面だつたけど、中から見ると・・・

「外が見える・・・」

何て言うか、全面ガラス張りみたいな感じ。

「おー？ マジックミラー号みたい！ いいね  
興奮するね～ らつせる らつせる～！」

セクハラオヤジが2番目に乗り込む。

「はわわ～ 中からは外が丸見えです～ 不思議です～」

そして3人目はデカルトちゃん。直径1・5mぐらいの球の内部・  
・ 狹いけど、3人ぐらいなら入れる。無理すれば、あと2人ぐら  
いは入れそうだ。

「どれどれ・・・」

球体の中にある物といえば・・・ 中央にある小さなディスプレイ  
と、その下にあるキー群。キーの横や球体上部には、いくつかパネ  
ルのようなボタンのような物もある。

|       |   |   |   |   |   |
|-------|---|---|---|---|---|
| /     | + | 0 | 1 | 4 | 7 |
| -     |   |   | 2 | 5 | 8 |
| x     |   |   | 3 | 6 | 9 |
| Enter |   |   |   |   |   |

球の外にあつたのと同じヤツだ。興味津々の部長が、まつさきにパネルに触れる。

「なるほどね。シンプルでいいわ・・・」

[ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]

小さなディスプレイの一番上には、こんな表示がある。

— 1 —

それらを見つめる部長。

「…うにうのはね、説明書なんかなくても操作出来るつてのが基本なのよ・・・」

「根拠は？」

「ない。けど、難しい機械ほど、それがあるべき姿。

難しい記号に見えて、実は一番シンプルな記号を使ってるもんね。

「デカルトちゃん、扉閉めて」

「は、はい～・・・」

「デカルトちゃんは、開いた扉を閉めよつとするが・・・

「スイッチがないです～」

「・・・・・・・」

私は天井にある小さなボタンを見つけたので

「「」、これかな・・・?」

押してみた。すると音も立てずに、扉が閉まった。

「はわわ～ パちゃん、正解です～」

なるほど。直感に従えば・・・ それが正しいのか。

「さて。今日は3月16日だから、2日前だと・・・」

パネルを操作した部長は

【 】【 3】【 14】【 】：：

今年の西暦と、月日を入力する。

「時間、どうする?」

部長は自信満々だが……そんな入力でいいのだろうか？まあ、2日前に行けるなんて、未だに半信半疑だけど。

仮に行けたとして

「…………」

ルブラン君を助けるには……

「何をすれば正解なんだろう？」

「僕もわからない。その場の状況で判断するしかないね、今のトコ  
は。」

ピタ子。2日前、何時に登校した？」

「えっと……朝の6時45分ぐらい」

「はわわ～ デカちゃん、爆睡中の時間です～ そんな時間に登校  
なんて～」

【】【】【】【】【】 6・30・00

そう入力した部長は

「多分コレで……」

【Enter】キーを押した。

「ちよ…… 心の準備が……」

[Are you OK? (Yes / Cancel)]

ディスプレイにそう表示され、【Cancel】の方が暗転している。PCなんかでよく見る画面だ。

「そ、そうよね・・・確認画面出るのが普通よね。ねえ、部長。少し深呼吸してから・・・」

私のセリフの途中で部長は・・・

】】】Enter】と押した。

۱۵۵

迷いは禁物！！過去へGO!!

— . . . .

— 1 —

何も感じない！

「あれ？ 慣性の法則的なもの、感じないわね？」

部長がボツリという横で・・・

「はわわ～失敗です～」

「何にも動いてない……」

この乗り物の中からは、外が丸見えだけど……外の様子も全く変わり映えしない。

「失敗ね」

そう言つた私は、天井のボタンを押した。音も立てずに扉が開く。「うーん。おかしいなー。グラヴィトンだけは、ブレーンを飛び越えるから……

絶対【G】が、かかるはずなんだけど……」

ソーカルちゃんみたいな事を言つ部長を置き去りにして……とテカルトちゃんは、球体の外に出た。

【やつぱりダメでした、理事長】 そう言おうと思つたのに……

「あれ？ 理事長は？」

「はわわ？ どうか行つちやこましたです～」

理事長室の出入口に田をやると、ドアが閉まつている。いや……

「鍵、かかつてゐる……？」

「はわ？ 何か変ですか～」

チュンチュン……

「 もう言えれば・・・ 電気が点いてない・・・」

窓から差し込む強い日差しのおかげで気づかなかつたけど・・・  
いつの間にか室内の電気が消えていた。

「ズズメの声が聞こえるでゅ〜」

何かがおかしい。私は窓際へ歩み寄ると、カーテンを開け・・・  
外を見る。

「 太陽が・・・」

低い位置にある。まるで今は・・・

「朝?」

「 なうんだ。ちゃんと2日前の朝に来てるじやん  
ラッセル ラッセル〜 」

いつの間にか後ろに立っていた部長が、嬉しそうに笑っていた。

「嘘・・・」

今が2日前の朝? 嘘よ・・・ でも、どう見ても外は朝・・・

「ど、どうやって・・・ 2日前の朝だと証明するの?」

思わず数学者のセコフを言つた私。

「 そんなの簡単よ。ピタ子、携帯持つてるでしょ?」

「う、うん……」

背負っていたリュックから、携帯を取りだした。

「表示、見てみなよ」

「……」

【3月14日(Wednesday) 06:31】

「な・・・」

思わず声をあげた。

「はわわ～！ デカちゃんの携帯も、一昨日の表示になってしまふ  
しかも、午前6時31分です～」

「な・・・」

「何でこと・・・？」

「じや、じやあ・・・ 私達は今・・・  
過去の世界にいるって事！？」

「はわわ～」

「ラッセル ラッセル」

(第21話へ続く)

# 第20話 時空を超えて（後書き）

次回予告

ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした私達。

・ 部長は相対性理論の創始者、アインシュタインちゃんと仲が良く・・

タイムトラベルに関するもの、色々議論しているという

私達はそんな部長のアドバイスを聞いて、行動する事にした。

# 次回 「第21話 バタフライエフェクト」

## 第21話 バタフライエフェクト（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまつた。

気になつていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私、目の前には何とタイムマシンが！

た。 私、以下2名は・・・ ルブラン君が死んだ日にタイムスリップし

~~~~~

~~~~~

## 第21話 バタフライエフロクト

「えっと……」

一昨日と昨日と今日……いや、今が14日なら今日と明日になるのか？

14・15・16日の着信履歴やメール内容が、全て携帯から消えている。

つて事は完全に……

「過去に……来た？」

まだ信じられないけど……

「ルブラン君が死んだ日の……」

朝？

「はい、みんな。集合～！」

部長が私とデカルトちゃんに声をかけた。例のタイムマシンの前に集まる私達。部長は表にある方のディスプレイを指さす。

【23・57・43】 【23・57・42】 【23・57・41】  
・・・・

何？ カウントダウンしてる？

「はーーーー！」の意味は？』

「…………」

しばらく考える私。

「ひょっとして…… 過去にござられる時間かしら？ 24時間？」

「ピタ子、ピンポーン！ 多分だけどね。

つまり、僕たちがこの世界にござられるのは…… 約24時間」

「はわわ～・・・」

「僕、中も確認したけどさ。

中のディスプレイも、同じカウントダウンしてた」

「そ、そうよね。いつまでも過去にござるってワケには…… いかないって事よね」

「ただね、それ以前に元の世界に帰るのと思つたら、帰れそうだよ。

なんか、元の世界に戻りまじょうみみたいなボタンあつたし。

だからこの世界にござるのは、【最高で24時間】って事だと  
思つ

「なるほど。最悪、明日の午前6時半までこは・・・

タイムマシンには戻つてないと……って事ね?」

「はわわ~ リミット付きのタイムトラベルです~」

ちょっと緊張気味の私とカルトちゃんだけど、部長はけつこう明るい。

「まあ、ジャックバワーも24時間あれば、国を救えるんだし。大丈夫っしょ!」

「あの、部長……そういう固有名詞は、あまり出さない方が…・」

「え? 何で?」

大人の事情です。

「質問です~ もしそのリミットまでに戻らないとデカちゃん達、どうなるんですか~」

「さ~? 死ぬかも……」

部長はあつたり言つた。

「は、はわわ……し、死んじやうんですか~?」

「ハツキリはわからない。

今いる過去の世界に、取り残されるかもしれないし……

時空の摂理を乱したという事で、存在自体消えるかもしれない」

「・・・・・」

「タイムトラベルは、いろんなパラドックスを含んでるからや。とにかく、事は慎重に運ぶべきね。

僕たちがこの世界にいる」と血体が、すでにありえない事だし

う、うーむ。過去や未来へ行き来するって……映画やアニメみたいに、単純なものじゃないのね。

「はわ！？」

窓の外を見たデカルトちゃんが声を上げた。

「どした？ デカ子？」

「ぴ・・・ ポちゃんです～」

窓の外を指さすデカルトちゃん。部長と私はすぐにその方向へ視線を移した。

「わ、私・・・？」

1階にある理事長室の奥の窓からは、広いグラウンドが見える。そして視線の先には・・・ リュックを背負った私が、無表情で校舎に向かう姿が見えた。

「・・・・・」

「おー ラブレター渡す為に、超早起きしたんだね～ ピタ子、偉い！」

腕組みした部長は、窓の向こうの私を見ながら頷く。

変な感覚だった。私はここにいるのに・・・

視線の先にいるのも、明らかに私 とても現実世界とは思えない。

あ。

過去だから現実ではないのか？ もう、よくわかんない。

「そ、それで？ 私達、どうすればいいの？」

まさか過去に来るとは思つて無かつたから、何をどうしたらいいのかわからぬ。頼れるのは部長だけだ。

「そうね。まずは確認しておるべき事を。

ルール1。なるべく過去の事象を乱さない

「はわ？」

「どうこう事？」

「バタフライエフェクト・・・ 知ってる？」

知つてゐる。

「デカちゃん、知つてます～。

蝶の羽ばたきが、台風起こす／ みたいなヤツです～「

「デカ子、ピンポーン！」

小さな出来事が、未来の事を大きくかえてしまつてヤツね」

例えば何気に目の前に飛んできた蚊を、パチンと叩いて殺してしまつたとして・・・ 殺した蚊がメスだった場合を考えてみよう。蚊は1回の産卵で300個ぐらいの卵を産み落とす（蚊の種類によつても違つけどね）。

と、いう事は・・・ 1つのメス蚊を1匹殺したことで、近い未来産まれる予定だつた300匹の蚊も全て殺した事になるわけだ。それだけではない。

産まれる予定だつた300匹のうち、メス蚊も多く含まれるわけで・  
・ それらたくさんの中のメス蚊が産む予定だつた、2世代先の（300匹）×（産まれる予定のメス蚊の数）だけの蚊も全て・・・

さらに3世代先の蚊、4世代先の蚊・・・

蚊の寿命は3～4週間程度だから、数世代先といつても遠い未来じゃない。1匹のメス蚊を殺した事で、未来に産まれる予定だつた天文学的数値の蚊を殺した事になる。

これは現実的な例ではない事を注意しておくれ。蚊やそれをとりまく世界はそんな単純ではないし、上のようなかけ算が簡単に成り立つわけじゃない。あくまでもバタフライエフェクトを説明するための極端な例だつて事。

一つの小さな事が未来には大きな影響となつて現れる・・・ それ

がバタフライエフェクトだ。

「僕たちの目的は、ルブラン君の事故を防ぐこと。でしょ？」

「うん」

「だからそれ以外の事で、過去を乱さない。

ちょっとの事が、のちのち収集がつかなくなる可能性もあるからね」

「はわわ～ 具体的には～ どうすればいいんでしょう～

「ルブラン君の事以外では・・・

「この世界の住人と、なるべく接触を持たない。とりあえずね」

何せ過去に来た経験なんて・・・ 当たり前だけど、ない私達。

意外かも知れないが【タイムトラベル】も、立派な哲学の対象だと  
部長は言つ。これまで哲学者だけでなく、物理学者や数学者なんか  
の間でも多くの議論がなされてきたし、今もなおそれは続いている。

「どんなルールが存在し、僕たちの行動一つがどれだけ未来・・・  
僕たちにとつて現在だけ、それにどれだけ影響を与えるかわか  
らない。」

「だから極力・・・

「僕たちはこの世界で、周囲との接触を最小限にするべきだと思つ

「うん・・・」

「わかりましたです～」

「でも部長・・・ タイムトラベル、くわしいのね？」

「そりゃそりゃ。だつて僕、アインシュタインちゃんと超友達だもん！」

【現代組】所属、物理の大天才アインシュタインちゃんは・・・  
部長とすこしごく仲がいいらしい。アインシュタインちゃんといえば、  
【相対性理論】や【光量子仮説】で有名な超天才児。【光速度普遍  
の原理】から、【ブラックホール】【タイムトラベル】の事まで・・・

とにかくそんな部長がいるのは、とっても心強いつて事。

【ルール1：過去の世界で、周りとの関わりを極力避ける】

「それでもちるん・・・」

【ルール2：過去の状況を、なるべく変えない】

「ルブラン君を救うこと以外でね」

「うん」

「わかつたです～」

「で？ これからどうすれば？」

過去の私は、教室にリュック置いた後・・・

ルブラン君の靴箱に向かうわよ。あと10分ぐらいで

もともとルブラン君が、交通事故に遭つきっかけは・・・

「私が、ルブラン君の靴箱に入つていたラブレターを盗つて・・・  
あれ？」

待つてよ？ そういえば・・・

「ルブラン君の靴箱に・・・  
私より先に、あの手紙入れたのって・・・ 誰？」

「・・・・・」

部長が黙つている。

「多分・・・」

多分？

「ピタ子、あなたよ。今の・・・  
この世界からしたら、未来のピタ子が・・・

過去のルブラン君の靴箱に、手紙を入れたんだよ

え？ おかしくない？

「だつてルブラン君の靴箱に、あのラブレターが入つてなければ・・・

・

過去の私は、普通に自分のラブレターを入れるだけ。

「先にラブレターが入つてたから、思わず盗つて逃げて……  
靴箱は空っぽになつた」

結果、ルブラン君は手紙で指示したポール公園には現れず、自宅近くで交通事故に遭つた。

「だったら、未来から来た私が……過去の自分を邪魔したって事？」

それって、パラドックスじゃない？」

「デカちゃんもそう思います～」

「…………」

部長は眉をひそめた。

「かといって……このまま何もせず、現在に戻つても……  
ルブラン君が生き返つているハズがない……」

この謎には……

「何かの答えがある。

僕達は、その答えを探さなければいけない……

そんな気がする」

「・・・・・

ヒロセクハラキャラは微塵も見せない部長。

少なくとも今の私達は、その答えが何なのかはわからない。それ以前に、本当に答えとやらがあるのか・・・それさえもわからない。

「早速、タイムトラベルパラダイクスに直面か・・・」

部長は悩んだ表情を見せたが

「でも、過去の状況をなるべく変えてはいけない・・・ルールに従おう。

ピタ子・・・手紙をルブラン君の靴箱に入れるべきよ」

そう言つた。

「でも・・・」

「でなきや、僕たちがここにいる理由がない。  
おそらく僕たちは、色々試される。

場面場面で、どこまで適切な判断が出来るか。

ある意味、哲学者として試されている気もする・・・

ホントに?

「とにかく、まずは手紙を靴箱へ！ 急いで、ピタ子！――！」

「う・・・ わ、わかつた・・・」

真剣な部長の迫力におされた私。リュックから【from】の手紙を取り出した。

「そつちじやない。一番最初に、ピタ子が書いた方の手紙よ」

「え？ どして？」

「今ここで、一番最初の手紙の裏に】from】を書くの。でなければ、2番目の手紙・・・

【from】の存在自体がおかしくなる

「はわわ～？」

つまりここいう事だ。今、私の手元には2通のラブレターがある。

1つは最初に私が書いた大元のラブレターで、裏には何も書かれてない。もう1つはルブラン君の靴箱で見つけて、思わず盗つていつた・・・ 裏に【from】の書かれているラブレター。

中身は全く一緒だけど・・・

そのまま2番目の【from】を出しちらりと、誰が【from】を書いたのかという話になる。いわば誰もそれを書いておらず、パラドックスが生じるわけだ。

だから、裏に何も書かれてない方の手紙に・・・

「」「これでいいのよね?」

今、【f r o m】を書いた。

そつすればじつまが合ひ、というのが部長の主張だ。正直私、部長にそういう説明されても混乱してる。

「うん、それでOK。さつきも書った通り僕らは・・・

時空の狭間で、色々試されていくと思つて行動しなきゃいけない。

一つ一つ正しい道を考えていかないと・・・  
取り返しがつかなくなるかもしれないからさ」

「はわわ・・・

「・・・

深く考えず過去に来たけど・・・ そんな単純なもんじゃないんだ。

「もうよ。何故、このタイムマシンが・・・  
僕たちの目の前にあるか、もつと深く考えるべきね

「え?」

この時の部長の言葉。本当にとても意味深な言葉なんだけど・・・

「説明はあと。もうすぐ過去ピタが靴箱に着く。」

その前にその【f r o m】を、ルブラン君の靴箱に入れるわ

「よ

過去ピタ？まあ、意味はわかるけど……

「うそ……」

急いで私達は、靴箱へと向かおつとした。

「あ……」

部長が顔をあげる。

「どうしたの？」

「このタイムマシン……隠とかなせや」

タイムマシンの位置は、過去に来る前と変わっていない。私達はそれのある場所……理事長室の奥のカーテンを閉めた。

「こ、これでここのかな？でも過去の理事長がこれ見たら、どうなるの？」

とりあえずこのカーテンを開けない限り、タイムマシンが見られる事は無い。

「今は靴箱が先決。行くわよー。」

「へ、うん……」

(第22話へ続く)

第21話 バタフライエフェクト（後書き）

次回予告

私はルブラン君の靴箱に、自ら書いた【from】の手紙を入れる。

ところが・・・デカルトちゃんが、とんでもない大失態を！

次回 「 第22話 ノールーク！」

## 第22話 ノールールか！（前書き）

## 前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまつた。

気になつていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私が、衝撃の事実を2つ知る。1つはルブラン君が、サンジユルマン理事長の子供だつた事。もう一つは、目の前にタイムマシンがあるつて事！

私、以下2名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップし

第22話 ノールールか！

{ } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { } { }

## 第22話 ノールールか！

「…………」

ルブラン君の靴箱、その前に立っている私。向こう側の柱の影に、部長と『テカルトちゃん』がいる。

「…………」

この【from】のラブレターを入れなければ、うまく行くような気がするんだけど。

しばらく迷った私。ここはタイムトラベルにくわしい部長の指示に従おう。

私はドキドキしながら靴箱の扉を開けた。

「…………」

上履き以外、何も入っていない。

「よかつた…………」

もしさまた別の手紙入っていたら、どうしようかと思っちゃった。

「…………」

私は【from】の手紙をそっと置く。そしてすぐに、部長達

のこる反対側の柱の影へと走つていった。

しばらく影で靴箱を見守つていると・・・ 反対側から、過去の私が現れた。

「・・・・・

「過去ピタ、登場～」

「はわわ～ Pちゃんが2人～ やっぱり変です～」

視線の先にいる過去の私・・・ 靴箱の前で、乙女のためらいの表情を浮かべている。

「・・・・・

客観的に見ると・・・

「キモいな、私」

「そんな事ないって。

いいね～ いい表情してるよ～ 過去ピタ。

そのまま脱いじゃおうつて感じ～ ラッセル ラッセル～

AV監督か！！

やがて過去の私は、靴箱の扉を開き・・・ 驚きの表情を見せる。

「あれ？ テカルトちゃん？」

いつの間にか『デカルトちゃん…… 過去の私のすぐ近くで、その様子を観察していた。

「はわわ～ ドッキドキです～」

その日は野次馬根性丸出しだ。見てるこっちが恥ずかしい。

リーン・・・ ポーン・・・ カーン・・・ ポーン・・・

7時ちよづビのチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「！？」

学生用入り口が開く音だ。そして・・・

「カントちゃん・・・」

そうだ・・・ 思い出した！

【近代組】の彼女は必ず同じ時間、午前7時に登校してくる。この日もそうだった！

靴箱の方に視線を移すと、過去の私も焦った表情を見せていく。いや、それよりも・・・

「デ、デカルトちゃん！？」

彼女の背後に、カントちゃんが近付いている。なのに気づいてない・

・

「あら～ こんな朝早く、珍しいわね～ ・・・ テカラちゃん」

カントちゃんは、テカルトちゃんに声をかけた。

「はわ？ カントちゃん～ おはようです～」

デカルトちゃんは、ステキな笑顔でカントちゃんに挨拶した。

「あのバカ・・・」

部長がそれを見て悪態をつく。それもそのはず。過去の人物との接触は、極力避けろと言われたばかりなのに。

すぐに部長はカントちゃんに姿を見られないよう、テカルトちゃんの所へ走っていく。同時に私の視界には・・・あの手紙を握りしめた過去の私が、階段を駆け上つていく姿が見えた。

部長はすぐに靴箱の影から、手だけを伸ばしてテカルトちゃんの首を捕まる。

「はわ？」

そして思いつき首根っこを引っ張り上げ・・・ カントちゃんに背を向け、逃げるように走つて行った。

「ピタ子、他の子も登校してきた！ 行くわよー！」

デカルトちゃんを引っ張りつつ、私に声をかける部長。

「ひ、うん……でもじくーー?」

「屋上ーー!」

確かに学校の外へ出るのはマズイ。

「わかった!」

「うしてーー。」

首根っこを捕まえられたデカルトちゃんと、私、部長の3人は屋上へと走つていった。

・・・・・。

屋上へ来た私達。

「いの・・・バカデカ子! ノールークー!」

珍しく部長が怒鳴り散らす。

「あんだけ注意したのに・・・

何、カントちゃんに笑顔振りまいてんのよーー!」

「はわわー、めんなさいですー ちょっと不注意でしたー

「過去をいじくり回しすぎると・・・

私達3人の存在だって、危ういんだからねーー!」

「はわわ～ 考えが甘かったです～ 以後、気をつけます～」

いきり立つ部長の肩に、ポンと手を置いた私。

「まあ、デカルトちゃんも反省してるみたいだし。  
もういいんじゃない？」

「ルール無用の甘党に・・・ 正義のパンチラぶちかますー!  
ほり・・・ 伊達直 にパンツを見せる～」

そつまうじと部長は・・・ デカルトちゃんのスカートをめぐり始めた。

あれ？ さつき、あんなにマジ怒りしてたのに？

「虎柄か！？ タイガーパンツか？ ラッセル ラッセル～」

ストレスでエロオヤジキャラが出た？

「それにしても・・・」

昭和世代にもわかりづらいボケをかましてるな・・・ このエロオヤジ。

「あの・・・ 部長・・・

伊達直 とか、わかりやすい固有名詞はヤメようよ・・・」

さつきも言つたけど、大人の事情。なんつーか、普通にマズいっしょ？

「ほ～れ～ パンツじゃ～ 虎柄じゃ～」

人の話、聞いてないし。

「きや～」

何故か2人とも楽しそうだ。

「ちょっと部長・・・」

とはいって、今は生徒が登校中。校内を歩くわけにもいかないので・・・

しばらく私は、2人のセクハラジョークを眺めていた。

そんな屋上の私達に・・・

唯一気づいていたのが、校庭裏の駐車場に車を止めたサンジュエルマ  
ン理事長だった。

「・・・・・・・」

私達は理事長に、全然気づかなかつたけど・・・ 理事長はひかり  
を、じーっと見つめている。

「・・・・・・・」

・・・・・。

現時点で、2日前とは何ら変わりはない。このままじゃルブラン君、交通事故に遭つてしまつ。それを防ぐため、どう行動すればいいのか・・・私は考えた。

過去の私はこの後、ポール公園に行くわけでしょう？

ルブラン君は公園に行くわけないし・・・

「じゃあ今のが、過去のルブラン君をポール公園に向かわせる？」

そうした場合、ルブラン君が来ないと思つてゐる過去の私と遭遇し・・・ややこしい事になりそうだ。

「だったら・・・

過去の私は完全無視。今のがルブラン君を別の場所に呼び出し・・・

- ・「ラブラブになる？

「よしー。」

私はもう一枚残つている【from】の手紙を取り出した。中の便せんを取り出し、【ポール公園】の部分を消す。

「・・・・・・・

ポール公園とは反対側にある

「 楠円野商店に来てもらおうかな

その商店にルブラン君を呼び出すことにした。

「呼び出した後は・・・」

「いい」は思い切って、映画に誘つてみよう。

【シネマ・花冠館の前で、お待ちしています】

そうね～、恋愛映画よりホラー映画よね。今上映中の「環」なんか、いいかも。

わやーって言いながら、ルブラン君にしがみつこちやつたりして・・・  
・ わやは～。

「ピタ子。その手紙、どうするつもつ？」

わー、びっくりした！

「ぶ、部長、こいつの間に・・・」

背後に？

「だからさ。その手紙、どうすんの？」

「そりや、放課後までにルブラン君の靴箱に入れて・・・」

「はー、なつせるー」

なつせる？

「とにかく初めてのタイムトラベルだからね・・・」

その手紙は、僕たちにとっての現在に持ちかえるべきだね

「ど、どうしてよ？」

「うん・・・」

部長の説明はこうだ。

私達が今いる過去の世界には、ルブラン君宛のラブレターが3通存在する。

1通は過去の世界の私が書いたラブレターで、過去の私のリュックにそれは入っている。残り2通は、いわゆる現在の私が持ってきたもの。うち1通は、過去の私がさつき持っていた。

そして今、手元に残っている【f-t-o-m】だ。これを過去に世界に残してしまうと、パラドックスになる・・・と、部長は言つ。

「過去、現在、未来・・・」

ピタ子が書いた手紙は、それぞれの世界に1通ずつあるべき

らしい。だんだんめんどくなつてきたけど・・・ここは従つておいた方が安全かな。

「わかった。部長の言つ通りにする」

2日前に続き、今回の新ラブレター作戦は頓挫した。

「じゃあまた、作戦を練り直さないと……」

手紙に頼らず、どうやってルブラン君を救うべきか……

「…………」

「まあ、あと23時間もあるんだし。

滅多に出来ないタイムトラベルも堪能しながら……

ピタ子の未来の恋人、救う方法を考えましょ♪

慎重だけど、楽天的な部長。未来の恋人ってのは、ちょっと嬉しい響き。

「…………」

私は屋上から校庭を見渡していた。四方は全て金網で囲まれている。その金網を両手で握りしめ……

「ルブラン君……早く登校してこないかな?」

乙女ちづくな事を呟いた。  
つぶや

「あ、ピタ子。その右側の金網、気をつけてね」

「え? どして?」

「確か3日前の夜……だから、この世界では昨夜になるのか。

何たら流星群の隕石が、この屋上に落ちてさ。

そこの金網ぶち抜いたのよ。ほら・・・  
手前のコンクリー、盛り上がってるでしょ？ そこに落ちたの

部長は右側の金網と、手前のコンクリートを交互に指さす。

「ホントだ・・・」

金網の一部に、大きな穴が空いていた。へタしたら人一人落ちてしまふほど、大きな穴だ。

「隕石自体は直径5cm程度だったんだけどね・・・」

たった5cmで、こんな大きな穴があくものなの？ コンクリートも結構粉々になってるんだけど？

私は、穴の空いた金網から離れた場所へ移動する。がつちりした安全な方の金網を握りしめ、遠くを見つめた。

「ルブラン君・・・早く登校してこないかな？」

・・・・・。

その頃。

サンジエルマン理事長は、理事長室の扉の前に立っていた。

「・・・・・・」

扉の鍵が開いている。

(「鍵を閉め忘れた？ あり得ん・・・」)

警戒しながら理事長室に入り、中を見渡す。

「・・・・・・・

いつもと変わらぬ整然とした部屋だが・・・ 違和感を感じる。

「・・・・・・・

ふと奥にあるカーテンに視線を合わせた。カーテンの向こうには・・・

・ 私達が乗ってきたタイムマシンがある。

「・・・・・・・

そのカーテンに向け、歩き始めた時・・・

リリリリーン・・・

デスクの電話が鳴った。

「・・・・・・・

歩<sup>ほ</sup>を止め、踵<sup>きびす</sup>を返すと・・・ デスクの受話器を取る。

「はい。ああ、国立数理科学研究所の・・・  
ええ、私がそうです。」

視線は、カーテンの方に向いたまま。

「ええ。アララト山で発見した【箱船】の件ですね。  
いえ、あいにく一〇時からは聖メンテレーエフ学園にて・・・

【鍊金術、特別公開講座】がありまして・・・」

コンコン・・・

電話中、理事長室を何者ががノックする。

「失礼します」

スーツを着けた、メガネ姿の女性が入ってきた。理事長の秘書だ。

「わかりました。ではまた、後ほど」

ちゅうどく電話器を切つた理事長。

「どうした?」

「はい。製薬会社の方がいらっしゃります」

「ああ、【R D N D】の論文関連だな。通してくれ

ネクタイを緩めながら、ふくつと溜息をつく。

(「今日は、タフな日になつそうだ・・・」)

「わかりました。では、」ちぢへ

秘書は、廊下に立っていた2人の男達を理事長室へ招き入れる。

「失礼します」

スース姿の男達が入ってきた。秘書は入れ替わるように部屋を出て行く。

「…………」

理事長は、カーテンを一瞥いちべつした後……

「どうぞ、ソファへかけてください」

入ってきた男達に声をかけた。

・・・・・・。

午前8時過ぎ。

「はわわ～見てください～ラッセルちゃんです～！  
2日前のラッセルちゃんが登校してきました～」

「ホントだ。過去の僕を見るつてのも……変な感覚ね……」

「現在のラッセルちゃんが」過去のラッセルちゃんと遭遇すると

どうなるんでしょうか～？」

「恐ろしい事、言わないでよ・・・ テカ子。

完全にパラドックスだし・・・

過去の僕が、今の僕を認知したら・・・  
どちらかの僕、あるいは両方消えちやうかも」

「はわわ～」

「ドッペルゲンガーの伝説つて・・・

ひょっとしたら、タイムトラベラーのパラドックスなのかもね・・・

・

「・・・・・・

デカルトちゃんと部長の会話をよそに・・・

ずっと、屋上から校庭を見ている私。

「おかしいな・・・ いつも8時前には登校するハズなのに・・・

授業開始は8時半。まあ授業といつても、ほとんど血脳なんだけど  
ね。

「どした? ピタ子? 愛しの君は、現れない?」

「うん・・・ もう登校している時間のハズなのに・・・

「はわ? ピちゃんと、ルブラン君待ってるんですか~?」

「うん……」

「デカラちゃん、同じクラスだからわかるんですけど~」

『デカルトちゃんも、ルブラン君も【近代組】だ。

「デカラちゃんの記憶では確か~・・・

ルブラン君、この日は学校お休みでしたよ~」

「えーーーー?」

(第23話へ続く)

## 第22話 ノールールか！（後書き）

次回予告

その日、ルブラン君は学校を休んでいた！？

衝撃の事実に、私は驚きを隠せない。

私はルブラン君の自宅に向かおうとするが・・・屋上に別の生徒がやつてきた。

次回  
「第23話 タレスちゃんの危機」

## 第23話 タレスちゃんの危機（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。思わずそれを盗みとった。

でも私がラブレターを盗んだせいで……

ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまう。

ただ、私が盗んだラブレターは・・・私が書いたと、数学倶楽部の部長・ラッセルちゃんは言つ。身に覚えないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私、衝撃の事実を2つ知る。1つは、ルブラン君がサンジエルマン理事長の子供だつた事。もう一つは、目の前にタイムマシンがあるつて事！

私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。そこでデカルトちゃんの口から、その日ルブラン君が学校を休んでいた事を聞いた。

~~~~~

} } } } } } } } } } }

第23話 タレスちゃんの危機

ル、ルブラン君が・・・お休み？

「じゃ、じゃあ・・・
どのみち、靴箱の手紙なんか・・・元々知らなかつた？」

だつて、学校にすら来てないんだから。

「この・・・バカデカ子！！ なんで、それ、早く言わないの！
！」

「はわ？ 別に、聞かれなかつたし・・・」

「デカ子・・・僕たちどずっと行動を共にしてて・・・
マジ、何もわかっていないの！？」

「はわわ？ 何かデカちゃん・・・マズい事、しましたか～？」

した。

「・・・」

絶句する部長。

ルブラン君を事故に遭わさまいと動いていたのに・・・「これじゃ
あ今までの行動、全く無意味じゃない。」

「デカルトちゃん・・・そういう大事な情報はもつと早く・・・」

「タイムマシンに乗って、【超】のつべどまぬけカマすなんて・・・

」

部長がマジ怒りしてゐる。

「デカ子!! あんた、ドラ もんの 太か!!..」

だから、そういう固有名詞は・・・ たまにある部長の【例えシツ】
【ミ】は、大人の事情にひつかかる。

「はわわ~ とにかくめんなさいです~」

部長がデカルトちゃんのお尻をペンペン・・・ いや、揉み始めた。

「の 太くん! ノールールなお前は、デジでノロマなカメだ!!
おら、おら~」

基本、部長も・・・ ノールールだよね。

「さじ・・・」

私は考える。

デカルトちゃんの情報によれば、この日ルブラン君は学校に来てい
ない。ならば私が、彼の靴箱からラブレターを盗つた事実は・・・

彼の死の原因ではない。

つて事でいいのよね？

確かにデカルトちゃんのヘマは痛いけど・・・私の心の負担はだいぶ減った。

「とはいえ・・・」

今日、彼は死ぬ。そしてそれを阻止するため、私達は過去の世界へやつてきた。

「だとしたら、どうするべき？」

「やつね～ 僕だつたら～」

デカルトちゃんのお仕置き（セクハラ）を終えた部長が、いつの間にか背後に立っている。

「過去ピタヒ、ルブラン君をくつつける。

そしたら、現在に戻った時・・・今のピタ子の彼氏になつてるかも

え？ マジー？ それは超嬉しい！！

「でも、どうすれば・・・」

「まず、ルブラン君の家に行こつ。

病氣で休んだのか、別の理由で休んだのかを知りたい」

「や、そりね

「彼は学校を休んでるの」「自宅前で交通事故に遭つてゐる。過去ピタヒルブラン君をへつたけむには……」

まずはルブラン君の情報収拾か

なるほど。H口がなければ、心から頼りになる部長だ。

「はい！　はい！　デカちゃんも行くです～！」

勢いよく手を擧げるデカルトちゃん。

「・・・・・」

正直、足手まといにならいかしら……とこいつのが本音だ。

「まあ、デカ子はルブラン君と同じクラスだし。
学校で貰ったプリントを渡すとか……」

口実をつけて、ルブラン君の家に侵入させる作戦もありかな。
何かしら役には立つかもね」

「デカちゃんは～　名誉挽回のため、頑張りますです～！」

「そうとなれば、すぐで

「ピタ子。あわてない、あわてない

両手の人差し指で頭に円を描く部長・・・ 休さんのつもりか？

「ほら」

その人差し指を、校庭に向けた。

「あ・・・」

たくさんの登校する生徒達が見える。

「今は・・・ 動けない・・・」

過去の世界の住人と、なるべく接触を持たないようにするつてのも・
・

なかなか大変だ。

・・・ ・・・。

午前9時半まで屋上で待機した私達。遅刻者も含め、この時間なら
登校してくる生徒は、ほとんどいない。

「部長。そろそろいいんじやない？」

「うん。じゃ、非常口から行こつか・・・
くれぐれも、との接觸は避けるようにね。

特に自分自身とは！」

「うん」

「『テカラちゃんは』、自分自身と会つ事はないですよ
何故なら、過去の『テカラちゃんは』、まだ自己で睡眠中ですよ」

いや、そこで胸をはられても。

バタン！！

突然、屋上出入り口の扉が開いた。

「…………」

「…………」

「はわわ～～～～～」

とつたに、大きな給水タンクの影に身を隠した私達。チラリと音のした方に目をやると・・

「タレスちゃん！？」

私と同じ【古代組】のタレスちゃんが、上を向いて金網のほうへ歩いていた。

「さて。

この時間でも、乙女座流星の運行なら調べられるわね・・・

何やらボソボソつぶやいてる。なんていうか、薄手でスケスケの

ネグリジエみたいな……胸元のゾーンが大胆な衣装を着けている。

「昨夜も隕石が落ちたようだし……」の軌道なら……」

ノートと鉛筆を持ち、上を向きながら何かをメモつてゐるようだ。

「ちょっとピピタ子。あの子、あなたのクラスメイト・タレスちゃんつて子でしょ？
何やつてんの？」

「た、多分……星の動きとか、いろいろ調べてるんだと思ひ。
彼女、天体とか観察するのが趣味で……」

田食とかも、いつ起ころのかわかるんだって……」

「ふうん。でも、これじゃ僕達が出られないわ。
早く出て行つてくれな……？」

急に部長の田が大きく見開いた。

「…………」

かと思うと、部長はタレスちゃんの所へ向かつて走っていく。

「ちよ…… 部長！？」

「はわわ～ タレスちゃんが……」

タレスちゃんは上を向いて歩き続け、そのまま……あの、破れ

た金網の所へ一直線。

「た、タレスちゃん！！！」

思わず私は声をかける。

「え？」

タレスちゃんが反応して、こちらを向いたと同時に・・・彼女はあの粉々になつたコンクリにけつまづき、何と破れた金網の所へ転ぼうとした。

「え！？」

私が声をかけたから？

「お、うー！」

そのタレスちゃんの腰巻きを、部長が掴むと・・・思い切り二ち
ら側へ引き寄せた。

「あ
れ」

タレスちゃんは悪代官に帯を解かれる遊女のような仕草で・・・

ドスン。

「あいた！」

平らなコンクリに尻餅をつき、事なきを得た。

「ふい～・・・ちよつとタレスちゃんとやり・・・
あんた、もうちょっとで投身自殺よー」

危機を救つた部長は、タレスちゃんに声をかける。

「な・・・何？」

お尻をさすりながら、タレスちゃんは立ち上がる。まだ状況が飲み込めてないようだ。

「つたく・・・あんたさーー」

遠い星の事はわかつても、足下の事は全然わかんないのねー」

部長がタレスちゃんの危機を救つたのは間違いない。

ただ・・・過去の人間と関わった事も間違いない。まあ、人の命がかかつてたんだから、仕方ないわよね。

「ピタゴラスちゃん？」

思わず身を乗り出した私と、タレスちゃんの視線がバチツと合ひつ。

「やば・・・」

すぐに給水タンクの影に身を隠す。

「ピタ子・・・もういいよ。出できな・・・」

完全に顔見られたし・・・

私はタレスちゃんの前に出てきた。デカルトちゃんも私に続ぐ。

「やつぱつペタ」「スちゃんだ。でも、つこわわ……
教室いなかつた？」

「い、いたけど……ほら、何て書ひの？ 走って屋上に……」

しどのめぐりで応える私。

「あんた、星に夢中になりすぎても……
屋上に来たピタ子に、気づかなかつたつてわけ」

「あひ。やう……」

ナイスフォロー。

「じゃ、僕たちは校舎に戻るから。
頑張つて星に願いを叶えてもらつてね。」

さ、行こ。デカ子、ピタ子ー。」

「う、うん……」

「はーです~」

「ちよつと待つてー。」

タレスちゃんが、部長の腕を掴んだ。

「あなた、還元水に興味ない？」

「は？」

ポカーンと口を開ける部長。

「還元水・・・体に良いわよ？」

「興味ないから」

部長が手をふりほどいた。しかしタレスちゃんも詰め寄つてくる。

「あなた見た所・・・おっぱい無いわね？」

その言葉に反応した・・・

「・・・」

部長の眉間にしわがよる。

「無い？ 小さことかじやなくて、無い？」

「還元水は体にいいのよ～。飲み続ければ、おっぱいだつて・・・
今よりもっともっと成長するわ」

「・・・」

タレスちゃんの胸は、推定Eカップ。

「あんたさ・・・ ブラ、とつてよ」

出た。いやつきながら部長が、あの言葉を浴びせる。

「ほ~つほつほつほ。私、ブラはつけない主義なの~」

なんか、お高くとまつた笑い方をするタレスちゃん。スケスケの衣装とはいって、胸の所はフリルがついておっぱいは直接見えない。そのチラリズムは、Hロオヤジの部長にはたまらないだろう。

「だからお胸の無いあなた・・・ 還元水、買わない?
今なら安くしておくわよ」

そういうえばタレスちゃんは【健康は金になる】と書いて、クリーンな水を買い占め・・・ それを商売にして、お金持ちになつたって聞いた事ある。

ある意味、水商売で成功したというわけか?

「ふん。おっぱい大きくて、金持ちで、ブラをつけない・・・
哲学界の、叶恭 つてわけか・・・」

いや、だから・・・ リアル名前は口にしないでっぽ。

「はわわ~ 部長の目に炎が宿つてるです~」

「ぶ、部長?」

部長は人差し指をタレスちゃんに向ける。そして・・・

「僕と勝負だ！！」

勝負を申し込んだ。え？ 何？ 勝負つて？

「私と勝負？ あらあら・・・ 血氣盛んなお嬢さんだ事。
私、争い事には興味ございま・・・」

「あなたが勝つたら、その還元水・・・ 1年分買う！」

「なんですって！？」

「お？ タレスちゃんがくいついた。

「その代わり僕が勝つたら・・・」

「あなたが勝つたら・・・？」

生おっぱい揉ませろ？

「生乳、揉む！――」

正解。

「面白いですわ！ その勝負、受け・・・」

バタン！！

何とこのタイミングで、もう一人屋上に現れた。

「ラ、ラマヌジヤンちゃん！――」

美しい黒髪に、綺麗な黒目・・・思わず私は声をあげた。

「・・・・・」

ラマヌジヤンちゃんは、私に視線を合わせると・・・優しく笑つた。

「どうやら様で？記憶力には自信ありますか・・・あなたとはお会いした事、ありませんわ」

口調も優しい。でも、そうだ！私が会つたのは・・・この日の晩、部室に本を取りに来た時。そして明日【ナマギーリ女神の、おかげです】を取りに来るラマヌジヤンちゃんに、会つたんだ。それ以前は、会つた事がない。

「あ、ほら。インドの魔術師って噂を聞いた事あって・・・わ、私はあなたの事、よく知ってるわ・・・」

「・・・・・」

神秘的な黒目で私を見つめている。

「ラ、ラマヌジヤンちゃんは、何故ここに？お、屋上に用事でも？」

「ええ。ちょっと体調が悪くて・・・外の空気があたううかと・・・」

「そ、そう。お大事にな・・・」

「マジックは首をふった。

「嘘……」

え？

「今、私は嘘をつきましたわ。これでお互い様ね……

え？ え？ 何かを見透かしたような黒目で…… それでいて優しい黒目で、じっと私を見つめる。

「な？ どういう事？」

部長から不思議ちゃんと聞いていたけど…… 私もつかみ所が見つからない。

「本当に私は…… ナマギーの女神によばれて、ここへ来たの

へ？

「あ、やつ。よ、よかつたわね……

「……」

「マジックはちやんは、私をじっと見つめている。

「た、体調はどう？ 最近、体調悪いって……」

沈黙に耐えられず、私は声をかけた。

「・・・・・」

彼女は黙つたままだ。

「あ・・・ 引っ越しするんだよね？」

「・・・・・」

しばらく沈黙を保ち続けていたラマヌジヤンちゃん、よつやへせいりかへ

「あなたは・・・ 神を信じるかしら？」

私に口を開いた。

「え？ あ、いや・・・ 別に・・・
いてもいにかな、とは思つけど・・・ 100%信じてるわけじ
や・・・」

「・・・・・」

またしても沈黙を保つた後・・・

「あなたは・・・

【ナマギーリ女神】のおかげで、未来を歩む事になる・・・

「は？」

何？ 魔術師って、占い師か何かなの？

「な、何で・・・

私の知らない神様のおかげで・・・ 未来を歩むわけ?」

だんだんと、あまのじやくな私が出でてきたその時・・・

バタン!・!

何と何と・・・ 二のタイミングで、さらにもう一人屋上に現れた。

何でよ! ? みんな授業、サボリまくり? まあ、授業はほとんど自習なんだけどさ・・・

新しく屋上に現れたその子は・・・ ちょっとヒューブがかかった銀色の髪。目をつり上がらせ、見た目は意地悪そうな女の子だけど・・・ 誰?

「はわわ～・・・ フン、フェルマーちゃん! ?」

え? 【ピタゴラスの定理】と一分して有名な【フェルマーの最終定理】の?

「おや? ルネ・・・ 君も教室のスペースが狭すぎて、屋上に?」

デカルトちゃんのフルネームは【ルネ・デカルト】だ。

「はわわ～・・・」

デカルトちゃんは、私の背中に隠れた。そういえば、フェルマーち

やんを芦田にしていたっけ。

「おやおや・・・また、余から逃げるのかえ?」

「ひつやひのフヒルマーちゃん、老婆みたいなしゃべり方をするようだ。」

「ふおえつ ふおえつ ふおえつ」

笑い方は、老婆そのもの。

だんだん状況がややこしくなってきたので、今一度確認しよう。

今、この屋上にいるのは・・・

まず過去の世界の住人、タレスちゃん、ラマタジヤンちゃん、フヒルマーちゃん。そして、タイムトラベルでこちらの世界に来た、部長、私、デカルトちゃん。合計6人だ。

「面白っこですわー!」

この状況でタレスちゃんが声をあげた。右手の人差し指を上にあげている。

「何やら因縁のありそつな、3組6人が集結したよ!」

「ナマギーリ女神のお導き・・・」

「ふおえつ ふおえつ ふおえつ」

「あまり過去とは接触持ちたくないけど……おっぱいを……」

「えっと……ルブラン君は？」

「はわわ～……」

タレスちゃんの人差し指が、私達に向いた。

「決闘ですわ！！ 30回3・・・ 団体戦で決闘を申し込みますわ！！」

「ナマギーリ女神のお導きなら・・・」

「ふおえつ ふおえつ ふおえつ 余は構わぬぞ」

「喧嘩上等ー その生乳・・・ 絶対、揉みしだいてやるーー」

「え？ な、何？ 決闘って・・・」

「はわわ～……」

「うして・・・」

【タイムトラベラー代表3人】 VS 【過去組代表3人^{バイヒス}】

「意外と真面目な、哲学バトルが始まるのであった！
ラッセル ラッセル～」

あの・・・

ルブラン君は？

(第24話へ続く)

第23話 タレスちゃんの危機（後書き）

次回予告

次回、突然2人の新キャラが初登場。

哲学者達のプライドをかけ、3VS3のバトルが開始される！？

次回 「 第24話 爆哲！ オンエアバトル 」

第24話 爆哲！ オンエアバトル（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそのラブレターを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つは、ルブラン君がサンジエルマン理事長の子供だった事。もう一つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんのことは……ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

私のクラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけで・・・

第24話 爆哲！ オンエアバトル

~~~~~

## 第24話 爆哲！ オンエアバトル

『さあ、今宵もやって参りました。【爆哲、オンエアバトル】 see  
ason2!

実況はお馴染み・・・

何故（N a n e）、人は（H i t o h a）、考える？（K a n g  
a e r u）

N H K の茂木ちゃんです！ A S H A S そして解説は・・・』

『IJの世に哲学者として生を受けたのならば・・・

歩き通せよ、哲学の道。これにちは、実況の西田幾多郎です』

『さあ、西田先生。久しぶりにやつてきました！ 哲学バトル。

今回は春の特番、スペシャル企画とこうことで・・・

団体戦でのバトルとなります！ まずはルール説明をお願いします』

す

『はい。今回は【タイムトラベル組の3人】と・・・』

『ちょ、ちょっと待ってください・・・ 西田先生。

我々は、彼女たちがタイムトラベルしてきたといつ事を・・・

知つているのでしょうか？』

『はい。脚本に書かれています。事前に読んでませんか？』

『A～H A～ 失礼しました。

では、そのタイムトラベル組3人の視点に立つた場合・・・

我々の存在は、じうとう捉えられるのでしょうか?』

『私達は、まあ、いわゆる・・・

パラレルワールドについて、彼女たちを見てるようなものです。

私達は彼女たちを見る事が出来ますが、あちらからほこちらが見えない。

番組上、そういう設定です』

『A～H A～ よくわかりました。

じゃあ、我々は勝手にこちらで実況&解説するだけの存在ですね?

『その通りです。あちら側とは一切、コントクトは取れません』

『では、西田先生。改めてルール説明をお願いします』

『はい。今回はですね~

【タイムトラベル組】ピタゴラス、デカルト、ラッセルに対し・・・

【過去組】タレス、フルマー、ラマヌジャンによるチーム戦となりま~す

『A～H A～ 決着はどのようつづくのでしょうか?』

『チーム戦では1対1の哲学バトルを、最大3試合行います。

1試合1試合に引き分けはありません。

先に2勝すれば、そのチームの勝ちというルールです』

『A～H～A～と言つ事は、西田先生。

1戦目2戦目を連勝したチームは・・・

3戦目を待たず勝利！ という事でよろしいですね？』

『その通りです。個人個人の哲学力はもちろん大事ですが・・・チーム内で、いかにプラスの哲学的連鎖を作っていくか。

スポーツ同様、哲学にもいい流れ・悪い流れがありますからね。哲学的総合力と哲学的流れ。この2つが、勝利を引き寄せる力ギギです』

『A～H～A～ ではもう一つ。

1つ1つの試合はどうのように展開され・・・

どのみち勝敗がつくのでしょ？』

『ええ。まずは対戦相手のうち、1人がサイコロを振ります』

『サイコロ・・・ですか？ 西田先生？』

- ・  
『ええ。各面には【真実】【愛】【存在】【神】【根源】【】・・・』の6つの文字が書かれています。

出た目をテーマに・・・お互いの哲学を語り合つわけです

『なるほど。

西田先生、サイロロの用にある【】の説明をお願いします』

『【】はテーマフリー。既存の用をテーマにしてもらいます』

・

例えば【知】とか【認識】とか・・・

サイロロの用になりテーマを選んで、バトルしても構いません

『わかりました～。決着方法は？』

『時間無制限、引き分け無し！

相手が言葉を失つか、ギブアップで勝負あります』

『A～H～ しかし、あのサイロロ・・・

どこかで見た事あるようなサイロロですね？』

『小堺 機の【じきげん】ですよ、茂木ちゃん先生』

『あの・・・ 西田先生。そういうストレートな固有名詞は・・・ NHKといつ事もありまして、今後控えてください』

『何が出るかな～ 何が出るかな～』

『・・・・・』

『お？ 茂木ちゃん先生。第1試合が始まりますよ～！  
第1戦は・・・ ラッセルちゃんvsタレスちゃんです』

『A・・・ A～H A～ では、気を取り直して。

西田先生、この第1戦。ズバリ、どこに注目ですか?』

『はい、茂木ちゃん先生。人類史上、最初の哲学者と言えれば?』

『タレスちゃんです』

『その通り。彼女は7賢人の一人としても有名ですよね』

『あ、西田先生。残り6賢人について、お聞きしてよろしいでしょうか?』

『ウイキペディアで調べてください』

『いや、ウイキペディアって・・・

西田先生も、ノールール系キャラのようですね・・・』

『おー? じゃんけんで勝つたタレスちゃんがサイロロを振りましたよ!』

『何ができるかな? 何が出るかな?』

『・・・・・』

『おお! ? 何と・・・

茂木ちゃん先生! なんて書いてます? 私、目が遠くて・・・』

『えっと・・・ 出た田は【根源】です!』

『はい。これは【アルケー】と読んでください。』

非常に面白い対決になりますー!』

『ほー。西田先生、どのが面白いのどしきゅうひー。』

『人類史上、最初に物の根源とは何か・・・  
それを考えたと言わるのがタレスちゃん。』

一方、ラッセルちゃんは・・・』

『そう言えば西田先生は・・・』

ラッセルちゃんの所属する【現代組】、その担任ですよね?』

『はい。私、ラッセルちゃんの担任をしています。  
彼女はあのアインシュタインちゃんと仲が良べ・・・』

現代物理学の【素粒子論】にもくわしいんですよ。  
まさに物の根源についての、最新知識があるんですね~』

『A～H A～万物の根源を最初に考えたタレスちゃんと・・・  
最新物理学における物の最小単位、素粒子にくわしいラッセルち  
ゃん。』

この2人の対決というわけですね~。非常に楽しみですー!』

『ラッセルちゃんは、ご存じ数学俱楽部の部長もしています。  
哲学者ながら現代数学や現代物理学、それに文学等にも精通して  
います』

『A～H A～ラッセルちゃんはかなりの博識のようですね。  
この勝負、ラッセルちゃん有利と見てよろしいでしょうか?』

『ええ。片や人類最古の哲学者。片や現代科学の最新知識を有する博識者。

知識ではラッセルちゃんの方が上ですが……

タレスちゃんには、ファースト哲学者としてのプライドがあります。

いい試合を期待しましよう』

『はい、わかりました。

では第1試合・・・ 西田先生、ゴングをお願いします』

『わかりました。では・・・』

カーン!!

『ゴングが鳴りました! 第1試合開始ですーー!』

(第25話へ続く)

第24話 爆哲！ オンエアバトル（後書き）

次回予告

哲学バトル、第1試合は・・・ ラッセル部長 VS タレスちゃん

部長が勝てば、タレスちゃんの生乳を揉む権利を得て・・・ タレスちゃんが勝てば、部長は還元水1年分を買つ事に。

お互いの哲学を賭け、熾烈なバトルが始まる！？

次回 「 第25話 ラッセル VS タレス 」

## 第25話 ラッセル VS タレス（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそのラブレターを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つは、ルブラン君がサンジエルマン理事長の子供だった事。もう一つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学俱楽部に所属する我、部長、デカルトちゃんの3名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

私のクラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達3人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジヤンちゃんの3人で・・・

哲学バトルが始まった。

第25話 ラッセル VS タレス

## 第25話 ラッセル VS タレス

第1試合は、部長とタレスひちゃんの対決。

「…………」

「…………」

お互ひのたたみ合いが続く。最初に口を開いたのは部長だった。

「タレス（Thales）、ラマヌジヤン（Ramanujan）、  
フェルマー（Fermat）……

【TRF】か…… 小室ファリーには負けないわよー。」

いや、だからや…… 小室哉せんも微妙な時期だから、名前を  
出さないであげて。

「テーマは【根源】<sup>アルケ</sup>。これはもう【水】ね！  
反論あるかしら？」TPPさん？

部長に続き、タレスひちゃんが口を開く。

「何、その…… TRFって？」

「ツル（Tsuru）・ペタ（Pet a）・ピッタンゴ（Pittango）・・・

「ぬうー？」

あ、部長の氣にしてる事を。いつもなら「ブラン」を外せと反論するけど、タレスちゃんはノーブランだし……

『おへつと！ 出ました！ TRFに返す言葉が、タイムリーなTPP！』

西田先生、今の返しはポイント高いのでは？』

『茂木ちゃん先生。今のは何一つ、哲学的な事を捉えてません。もつと本質的な【根源】が出てきてからですよ、哲学バトルは『A↔H↔A↔』 失礼しました。では、今一度バトルに注目しましょう』

「ふふ。万物の根源はズバリ【水】！ 何か反論はありますか？ TPPさん～」

挑発的なタレスちゃんの攻撃…… 口撃だが、部長が負けるハズない。

「ふ・・・ 水はH<sub>2</sub>O。水素と酸素で作られているのよ！ そしてそれら原子や分子は・・・ 素粒子で構成されている。

僕にとって万物の根源は・・・ ズバリ【素粒子】よーー！」

『出ました、素粒子！ これはもう・・・ 彼女の言う通り、ズバリど真ん中じゃないですか？ 西田先生？』

『いきなり確信で来ましたね、ラッセルちゃんは。

タレスちゃんの、少し後に出た【デモクリトス】ちゃんは・・・

原子の語源である【アトム】を万物のアルケーと言いました。  
しかし素粒子は、その原子を構成する最小単位なんですね』

『A～H A～ これはもう、ラッセルちゃんの勝利でしょ』  
やはりタレスちゃんでは、知識の差が・・・』

『いえいえ、茂木ちゃん先生。まだわかりませんよ～。  
さあ、今度はタレスちゃんの反撃です』

「ふふ、TPPさん。私達生きとし生けるものは・・・ 水があつ  
ての事。  
水なくして生きとはいえない。

いややつて私達が、アルケーディスカッシュョンしている事だつて・  
・  
とビのつまり、水のおかげよー」

「・・・？」

「つまり、人類が高度なディスカッシュョンするにまで進化したのも・  
・  
水のおかげでなくつて？

元を正せば、生き物の起源は水。それ、すなわち・・・

万物を認識する私達・・・その根源としていきつゝ先は、水よ  
！』

『何と！ 捷破りの進化論発言ですよ、西田先生！』

『ええ。【古代組】のタレスちゃんから・・・

【進化】とこう言葉を聞けるのは意外でしたね～』

『【古代組】は、その概念を習っていないはずですよね？』

『おそらくですが・・・

【現代組】の子達とディスカッションをして、得た知識でしう

ね。

そういう意味じゃ、ラッセルちゃん。

タレスちゃんは、簡単に勝てる相手ではないですよ～』

「ふん・・・そんなの詭弁よー！ 僕には通じないわ！」

『西田先生。詭弁とは？』

『ええ。ま、簡単に言つとですね。

あたかも論理的な事を言つてるんだけど・・・

実はそれらしい事を言つてるだけで・・・  
中身は根拠のないのへりへり・・・そういうものです』

『もう少し、視聴者にわかるよつにお願いしてよろしいでしょうか?  
?』

『では、具体例を。茂木ちゃん先生、人は卵を産みますか?』

『まさか! 人類は【ほ乳類】ですよ。卵を産むわけがないです』

『ではもう一つ。茂木ちゃん先生は、カモノハシをご存じですか?』

『名前ぐらいは・・・』

『カモノハシはオーストラリアに生息する【ほ乳類】で・・・  
卵を産むんです』

『え? ほ乳類なのに・・・卵を産む?』

『ですから、同じほ乳類である我々人類も・・・  
卵を産む体の機能は持ってるんです』

『え・・・ええ?』

『茂木ちゃん先生。今、一瞬【そつかな?】って思いましたよね?』

『お、思いましたね・・・  
あの・・・カモノハシのぐだり、嘘ではないですよね?』

『ええ。カモノハシは卵を産むほ乳類、それは間違いありません。  
ほ乳類の学術的な説明は長くなるので、割愛しますが・・・』

人が卵を産むことはありません。

これはちょっとした一セ論理を開いて、あなたにそう思わせたんです』

『はー・・・ まだ、よくわからないですが・・・』

『【詭弁】を言う者は、今のように・・・  
間違つてゐる論理を開いたり、相手の知識の曖昧さにつけ込みます。』

紀元前のギリシアでは、詭弁で人を惑わす・・・  
まあ、今で言つ詐欺師のような輩やがらがあふれていた時代があつたんですね』

『A→H A→』

『【知、ある者】と称する、いわゆる詭弁者。  
後に【何も知らない】と称するソクラテス。』

ここからまた、哲学は発展していくのですが・・・  
まあ、この話は次回。今は彼女たちのバトルを見守りましょう』

『くわしい解説、ありがとうございました、西田先生。  
では、バトルはどうなつてゐるでしょうか?』

「全ての生命の起源は水! 水がなければ、人は地球上に存在しなかつた。」

万物の根源を考える人間の存在は・・・ 水があつての事!

どうかしら？ ツルペタピッタンコさん。おつと失礼、ＴＰＰさん？』

『西田先生。詭弁としても・・・なかなか正論に聞こえますね』

『ええ。相手を説き伏せる、説得力のある語り口も・・・哲学者のスキルの一つですから』

「み、水は・・・水素原子2個と酸素原子1個で・・・その原子も、中性子と電子と・・・」

「もう一度聞くわ、ＴＰＰちゃん。この地球に水がなかつたら・・・

万物の根源ビーのjeeのと、議論する機会はあつたかしら？

アルケーを考えるには・・・水は絶対必要でしょ！？

「ぐ・・・」

『おつとー 当初の予想に反し・・・ラッセルちゃん、追い込まれています。

意外な展開ですね？ 西田先生！』

『ええ。しかし、タレスちゃんの論理には矛盾があります。

その矛盾をつけば、形勢は逆転しますよ

『ほへ 矛盾がある？ そりは思えませんが？』

『一見するとスジが通っているように思える。  
それこそが詭弁の大きな特徴なんです。

まあ、ラッセルちゃんは・・・ クラスの中でも、かなり優秀。  
彼女も、その矛盾に気づいているはず』

『その矛盾とは何なのか？

さあ、担任・西田先生の期待に添え、ラッセルちゃんの反撃なる  
か？

バトルの方に注目しましょ～』

「はわわ～ ラッセルちゃん・・・ 势です～」

「だ、大丈夫よ・・・ 部長は・・・ 私達の部長なんだから・・・

」

とはいって、あのタレスちゃんのアルケーロジック。私なら、負けて  
るかも・・・

「・・・」

追い詰められたかに見えた部長だったが・・・

「ふ・・・」

「ヤレ」と笑った。

「おや、TPPちゃん。

その笑顔は、負けを認めたという事でようじへつて？」

余裕の表情を浮かべるタレスちゃんに対し、部長は・・・

「ふふ。あなたの術中にはハマらないわよ~」

意外な言葉を口にした。

「万物の根源は・・・ 太陽よーー！」

え？

「えー？ 何を言い出すかと思つたら・・・ 太陽？」

タレスちゃんは、面食らつた感じだ。

「・・・」

しばりくして・・・

「お~ほつほつほ。素粒子から一転、万物の根源が太陽?  
そんな事を言った哲学者・・・ 過去にいたかしら?

素粒子の方が、まだ勝ち田があると思いますわ~」

タレスちゃんは、勝ち誇った表情を浮かべた。

「太陽がなければ・・・僕たちは生きていられない。

///ズだって、オケラだって・・・アメンボだってね」

「ふふ。高度な議論から・・・

急に小学生レベルになつたように感じるのは、気のせいしから?」

「太陽がなければ、僕たちは生きていけない。

それすなわち、アルケーについてディスカッショングできるのも・・・

・  
太陽なくしてはありえない! どう? 僕に反論できる?」

「・・・」

「僕たちが生きているのは太陽のおかげ。

万物を認識する時、その根源としていきつゝ先は・・・ 太陽よ

! !

『お~つと! 先ほどタレスちゃんが言つた事そのまま・・・  
水を太陽に置き換えて、ラッセルちゃんが言い放ちました!』

『さすが私のクラスの生徒。そつ、タレスちゃんの詭弁の矛盾点は・

・  
【万物の根源は太陽である】といった場合でも、一セ論理が通る

こと。  
つまり水が根源である必要はなかつた点なんですね~』

つまり水が根源である必要はなかつた点なんですね~』

『A～H A～万物の根源を【酸素】とかにしてもいいわけですね？』

『その通り。

ただあくまでもタレスちゃんの、詭弁的論理では……といふ事です。

相手の詭弁を逆手にとる攻撃、実に見事ですね~』

『A～H A～ 詭弁といつものが、わかつたよつな気がします!』

「ぐ・・・」

「ふ。叶恭さんは・・・

妹の美 妙がいなければ、何も出来ないかしら?」

いや、何もそこまで言わなくとも・・・ 部長はU体質ね。

「タレスちゃん!

あなたの主張ではアルケーが【水】でなくてもいい事を、僕は示した!

でもあなたは僕のアルケー・・・ 【素粒子】を否定できるかし

らー?』

「う・・・」

「言い返せないのなら・・・ 勝負は僕の勝ちね!――」

「へへへ……な、何でも……還元水……」

『おつと。ラッセルちゃんの勝利宣言に対し、反論できないタレスちやん。

西田先生、これは……』

『ええ。哲学者ことひで、己の哲学を表現するのせ言葉のみ。言葉は哲学者にとっての命です。

それが出てこないとなると……』

カン カン カン――！

『出ました！ 西田先生がゴングを3回鳴らしました！  
それすなわち……』

「負けを……認めるわ。TOP、いや……ラッセルちゃん

ついわざめで、上から目線だったタレスちゃんが……

「はわわ～ 負けを認めたです～！」

「や・・・ やつた！ 部長――！」

「ラッセル ラッセル～」

『いや～、西田先生。第1戦、振り返つていかがでした?』

『ラッセルちゃんのカウンターパンチ炸裂。本当に見事だったと思います。

ただ、少しばかり補足しておきます。根源に対する議論は・・・

哲学の学派や宗教によつて、といえ方が微妙に違う場合もあります。

今回は物質の根源といつ視点で、バトルが繰り広げられました

『なるほど』

『今日はルール上、試合自体は1対1のバトル。  
ラッセルちゃんはタレスちゃんに対し・・・

ディスカッションで打ち負かしたといつ事で勝利した』

『A→H A→』

『ラッセルちゃんの言つ【素粒子】は、物理的な側面での解釈の1つ。

そう思つてください。

必ずしもそれが・・・ 100%の答ではないといつ事です』

『A→H A→・・・ 色んな視点での解釈の仕方がある。

哲学も奥が深いですね〜』

給水タンク側が私達の「コーナー」。そこに戻ってきたラッセルちゃんに、笑顔で迎える私達。

「よっしー、まずは1勝！ ラッセル ラッセル～」

「はわわ～ デカちゃんは～ ラッセルちゃんの事、尊敬します～」

ハイタツチをかわす私達。

「ホントに・・・ 負けるかと思つちゃつたわ・・・  
あんな見事に逆転するなんて～」

「あー・・・ まあ、最初からタレスちゃんの矛盾点は気づいてた  
からね」

「え？ ヤバそうに見えたのに？」

「僕は集合論研究してるもん。

集合と論理は密接につながってるって、言つたでしょ？

だからタレスちゃんの論理の矛盾は・・・  
実は速攻見抜いてたんだよね～ ラッセル ラッセル～」

ガツツポーズに満面の笑みを浮かべる部長。

「さ、最初から・・・ タレスちゃんの矛盾を知つてた？」

「いや、ほり。あーいう、上から田線の高ビーなヤツはさ・・・  
勝てると思わせて、奈落の底に突き落とすのが・・・

僕的には、最高に気持ちいいのよー。ラッセル ラッセル

「・・・・・」

Sじゃない。超ドSだ・・・

こうして私達は・・・ 哲学バトル団体戦、初戦を

「僕の活躍により、1勝をあげたのであつた」 ラッセル ラッセル

ル

(第26話へ続く)

## 第25話 ラッセル VS タレス（後書き）

次回予告

哲学バトル、第2試合は・・・ デカルトちゃん VS フェルマ  
ーちゃん

デカルトちゃんが勝てば、第3試合を待たず団体戦勝利が決まる。

デカルトちゃんといえば・・・ 哲学史に残る名言【我思ひ、ゆえ  
に我あり】。

この言葉をひつさげ、これまた数学史に名を残すフェルマーちゃん  
に挑む！

次回 「 第26話 デカルト VS フェルマー 」

# 第26話 デカルト VS フェルマー（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つ、ルブラン君がサンジユルマン理事長の子供だつた事。もう一つ、田の前にタイムマシンがあるつて事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。クラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達3人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジヤンちゃんの3人で・・・

哲学バトルが始まった。第1戦はラッセルちゃんが、タレスちゃんに勝利！

~~~~~

345

第26話 デカルト VS フェルマー

「ほり・・・ デカルト、次はあんた」

部長はデカルトちゃんの背中を押した。

「はわわ～ 心の準備がまだです～」

「相手は・・・」

「ふおえつ ふおえつ ふおえつ。ルネが出るなら・・・
余が、相手をしてしんぜよ～」

銀髪のフェルマーちゃんだ。

『さあ、西田先生。もうすぐ第2試合が始まります。
どうやらデカルトちゃんと、フェルマーちゃんの対決のようですね～』

『同世代対決です。これもまた、見物ですよ。
因縁の対決と言つていいでしょ～』

『因縁？ この2人は何か・・・？』

『そりなんですよ、茂木ちゃん先生。
まず2人の担任である、パスカルちゃんについて少し・・・』

『【人間は考える葦である】……で、有名な?』

『そうです。パスカルちゃんは2人の担任なんですが……デカルトちゃんと【神】に関して対立しています』

『【神】ですか。これまた、重いテーマですね』

『まあちょっと長くなるので、この対立のこきそつは割愛します。パスカルちゃんとデカルトちゃんは、溝がある事を覚えておいて下さい。』

そしてフェルマーちゃんは、パスカルちゃんのお気に入りです

『ほつ・・・ もつ少し、くわしくお願ひします。西田先生』

『フェルマーちゃんは、性格的に一癖ある生徒なんです。
なんていうか・・・ 数学の問題を、他の生徒にだしまくって・・・

それを解けないと、バカにするみたいな

『・・・ ぶつちやけ、クラスに絶対1人はいる【ヤ】な生徒ですね』

『ただ、フェルマーちゃん。仕事は出来る子。
そしてパスカルちゃんは、先生のくせにギャンブル好き。

何とフェルマーちゃんと共に、確率論を研究しています。
ええ、ギャンブルに勝つためにです』

『担任は担任で・・・教師なのにギャンブル好きですか。しかも生徒を巻き込んで、ギャンブルに勝つ研究をしていいのか。』

『せりにフルマーちゃんとデカルトちゃんも、すつじ仲が悪いのです』

『今日は登場してないパスカルちゃん先生ですが・・・とにかくパスカルちゃんとフルマーちゃんは仲が良く・・・2人は、デカルトちゃんと対立関係にある・・・と、いう事ですね？ 西田先生』

『はい。わかりやすくてうれしい・・・』

『あ、なんか【ヤ】な予感がしますね・・・』

『【小公女セラ】です。ミニチ 先生と生徒のラビ アガセラをいじめる関係だと想つてください。・・・』

いわば今回は、ラビ アガセラですね。まあ、デカルトちゃんもお人形さんでなく、亡靈さんに話しかけ・・・』

『さあ―― 第2試合―― 西田先生、『コングをお願いします――』

『え？ まだ、サイコロ振つてませんよ？』

『じゃ、私が・・・』

カーン――！

『茂木ちゃん先生…… それ、私の仕事……』

「さあ、『テカ子。勝てば、ここで僕たちの勝利が決まるわよ。』

「は、はいです…… でも…… フェルマーちゃん、苦手です……」

「テカ子、いつも言つてるじゃん。

【あの、いまいましげフレンチマダモアゼルめ】って…

「うひ。聞こえてるぞ、そなた達……」

すでに屋上の中央…… バトルが行われる地点で、フェルマーちゃんは待機している。

「それはウォリスちゃんの言葉ですよ。『テカちゃんが言つたのは…

【フェルマーちゃんは、大ボラふきー】です…」

「うひうひ。余にも聞こえてるつて…」

向こうで、ボソッとフェルマーちゃんが呟いているけど…

「あれ？ そうだった？ 僕の記憶じや…

【お前のおでこ、広いんだよ。ホントはハゲだろ？】じゃなかつた？

「違います～。担任とつるんで、ギャンブルしてんじゃねーよ
です～」

「おい・・・だからそなたたち・・・」

「あれれ？ 確か【死ねばいいのに】だつたような？」

【宇宙一の嫌われ者】ですか？」

〔一五八〕

『おつと・・・バトル前に、激しい舌戦。

これは書簡を読みていたいのではありますまい。

バトルの勝敗には関係ありません。 ですよね？

『はい。ただ、デカルトちゃんはフルマーちゃんをかなり嫌つて
いる。

それは伝わりますね~ この勝負、どうなるか私にもわかりませ
ん』

『おつと！ 業を煮やしたフルマーちゃんが、サイコロを振りました。

出た用は……【存在】！【存在】です！！

デカルトちゃんは【我思うゆえに我あり】で一躍名を残しましたよね?

西田：『元気で、先生？』

『いえ。必ずしも……彼女に有利とは言えません』

』と、言ごめすと?』

『確かにデカルトちゃんも・・・

【存在】について、自分なりの論理を持っています。

ただ、その論理も完全ではないんですよ。

まあ「は・・・バトルを見守りましょう!」

『わかりました。では【存在】をテーマに・・・ 第2試合開始ですー!』

「ふおえつ ふおえつ ふおえつ。余も、ルネも・・・ 存在して
おる。

トロピアルではないかね?」

『西田先生、トロピアルとは?』

『Iの場合は【自明】【あきらか】といつ意味。
数学用語の一つです』

「デカラちゃん達が存在している? それはどうかしら!?
実は誰かの夢の中で、実際には存在していないかもしけないじゃな
い!」

「ふおえ? 公理的だと思つたが・・・ ルネは賛同しかねると
?」

『【公理】 ところのせ、 説明お願ひしていいでしょつか？ 西田先生』

『これも数学用語です。

証明や論証の必要がない、 明らかで根本的な命題の事ですね。

簡単に言えば・・・ 【私達が存在している事を、 疑う余地ある

？】

と、 フェルマーチャンは言つてます』

『なるほど。まあ、 我々がいる・・・

存在するには当たり前のような気がしますが？』

『ところがですよ、 茂木ちゃん先生。

デカルトちゃんは、 ここからなんですよ・・・』

『ここから？』

「これで、 どうじや？」

フェルマーチャンが突然・・・

バチン！！

デカルトちゃんの頬ほほを平手打ちした。 しかも結構、 思い切り。

「ほれ？ 痛あかしかつたじやろ？ それこそルネが・・・
存在している証あかしじや」

「…………」

頬を赤くはらし、涙田の「トカルトひやんだが……

「まだわからないもん… デカちゃんがイタイと黙つてゐるだけで……

・
本当は、痛みなんても【まやかし】かもしけないもん…！」

相手に対し、屈しない。

「………… 痛いんじやね〜。」

「痛いけど…… それは……

山靈さんがあいつ愚わせてるかもしねないもん…！」

「…………」

しばらくテカルトひやんを見つめていたフェルマーひやん。溜息をついた。

「ふおえつ ふおえつ。ルネよ…… では、お前はいつまつのか

？

「この世に存在してこるものなど…… 何も無こと…。」

「違うもん… 存在する事はコピアルなんかじゃない…！
証明が必要だつて… … わつぱつてるもん…！」

「まつ… … 存在する事を証明とな… では聞くが… … どうやつて…？」

『存在を証明ですか・・・難しいと思ひのですが? 西田先生?』

『ええ、彼女は独自の理論で、例えば【神】の存在を示していますが・・・

パスカルちゃんから【幾何学的精神】と批判を受け・・・

対立するきっかけの一つになつてます』

『ふ〜む。今日は何の存在を・・・?』

『おや? 【自分】、もしくは【相手】の存在でしょうか?』

「デカラちゃん的には・・・ 疑う事は萌え~」

突然の【デカルトちゃんの【萌え】発言】に・・・

「?」

フェルマーちゃんは首をかしげる。

「デカラちゃんは、今・・・全てを疑つてます!
でも、1つだけ疑えないものがあります!」

「ふあえ? それは、何ぞよ?」

「【疑つてゐる】デカラちゃんです!」

「ふおえ？ よくわからんの～」

「デ力ちやんは・・・ 全てを疑いました！～
自分の存在すらも・・・

でも・・・ でも・・・

【疑つてゐるデ力ちやん】だけは・・・ 疑えない！～！」

「ふおえ？」

「【疑つてゐるデ力ちやん】の存在を・・・
疑おうとした瞬間、またデ力ちやんは疑つてゐるわけでは
じつやつとも疑えない【疑つてゐるデ力ちやん】はいるんですね
～」

『えつと・・・ 西田先生、解説お願いしていいでしょか？』

『いやです』

『え？ え？ まさかの解説拒否ですか？』

『ま、ぶつちやけ言いますけど。私、西田もですね・・・
あまりデカルトちやん、好きじやないんですよ』

『お～つとー！ 何どデカルトちやん・・・
純粹無垢の天然系ボケキャラなのに・・・ 何故か嫌われ者です
か！？』

『まあ、西田哲学の中には【デカルト批判】があるんです。
実はこのバトル。冒頭からフルマーちゃんの話はしましたが・・・

・
デカルトちゃんの話は、極力最小限に抑えてたんですね』

『言われてみれば・・・』

『【デカルト批判】をする哲学者、結構多いですよ。
てなわけで、デカルト理論の解説は・・・

主役のピタゴラスちゃんに任せましょ、ひ』

『まさかの仕事放棄！

同時に、【デカルト批判】は広範囲に渡つていると・・・

意外な事実を知る事になりました！』

『1つだけフォローしておきましょ。

たいした理論でなければ、批判自体が出てくる事はありません。

無視されるだけですからね』

『まあ、そうですね』

『つまりデカルトちゃんの理論は・・・

周りに影響を与えるだけのものだった。

それは私も認めていますので。

はい！ これ以上、彼女には触れません！』

『なるほど～ 果たして「カルトちやんの哲学はどう展開されるのか？』

その解説は、ピタゴラスちやんに譲りましょ～』

「我思つ・・・ ゆえに我ありよ！～

」の事実だけは、どんな亡靈さんも太刀打ち出来ないわ～！～』

『デカルトちやんなりに色々考えた結果、【疑つてゐる自分の存在】だけは疑えない事を導いた。彼女の言つ【我思つ】つていつのせ、【我疑う】という意味で捉えていい。

【私は全てを疑つたが、疑つてゐる自分の存在だけは疑えない。疑おうとした瞬間、疑つ自分が存在するからだ】

＝【つまり疑う自分はいる】

＝【我思つ、ゆえに我あり】

まあ、こんな論理展開で彼女は・・・

【疑う自分は存在する】事を証明したと主張するわけだ。

「ああ～ どんな「靈さんも・・・ かかつてきなさい～！」
妄想力はなかなかのものだと付け加えておく。

「ふおえつ ふおえつ ふおえつ なかなか面白い理論じやが・・・

』

「フェルマーちゃんは、まだまだ余裕といった表情だ。

「ルネの論理は間違つてあるが……」

「何ですか？」

「【我思つ】と【我あつ】の間に……

【思つ者は存在する】とこつ命題の証明が必要じや。

ルネの論理は、二段論法を無視しておる

『西田先生？ 二段論法の説明だけでも、お願ひできますか？』

『【A B】かつ【B C】が成り立つとき、【A C】も成り立つ。

これが三段論法です』

つまりフェルマーちゃんの反論は二つ。

?【私は疑つ】 ?【疑つている者は存在する】 ?【私は存在する】

デカルトちゃんは、この真ん中の命題を証明する必要があるといふ。でなければ【私は疑つ】から、【私は存在する】を導いた事にはならないといつのだ。

「そ、そんな事ないもん！」

「疑ってる私……このもん!」

「それも亡靈の仕業かも……ふおえ?」

「だつて……だつて……『デカルトちゃん、疑ってるのよ』。疑ってる自分は……疑えないでしょ!?

疑った時点で、疑う自分がいるんだから……!」

「どうやってそれを証明するのじゃ?』

「どうして……私、疑ってるもん! それは当たり前でしょ!..』

『勝負あつましたね……『デカルトちゃんの負けです』』

『え? 西田先生……まだ決着は早いのでは?』

『第一試合とは逆の立場になりました。まあ、見ててください……』

『

「ルネよ……気づかぬか?』

【疑ってる私】を、証明無しに認めるところ事は……

余が最初にトコ『アルといった事と回じじゃぞ?』

「はわー!?』

「つまりルネは、余と同じ方法で存在論を語った。
それすなわち・・・ルネ、お前の負けじゃぞえ？」

「ぐ・・・」

言葉に詰まるデカルトちゃん。ヒヒヒ・・・

「うわ～ん・・・」

泣き出しちゃつた。

『なるほど。これは勝負ありですね、西田先生』

『はい。では・・・』

カン カン カン！－

『ココで、ゴング！ 試合終了！ 勝者はフェルマーちゃんです！－
何と専門は法律学で、数学を趣味としているフェルマーちゃん。

哲学を専攻していないにも関わらず・・・

デカルトちゃんを見事破りました！－ 西田先生、感想を－』

『まあ、存在する事についてに結論を得たわけではありませんが・・・

デカルトちゃんを泣かせたんです。

つまり、己の哲学を語るための言葉を奪った。

1対1の勝負としては、決着ありですね』

『第1試合同様・・・
フュルマーちゃんが、カウンターパンチを食らわせた形になりました』

『さつきもチラッと【デカルト批判】について言いましたが・・・
カントちゃん、一チヨちゃん、ハイデガーちゃんなどなど・・・

【デカルト批判】の上で、近代哲学が発展していくわけです。
そういう意味で、やっぱりデカルトちゃんの哲学的業績は大きい
ですよ』

『おや？ 西田先生。急に【デカルト】擁護する発言をしますね
？』

『まあ、私も・・・
【デカルト批判】で、少しばかり名をなしましたからね。ほつは
つは』

『というわけで・・・

これで【タイムトラベル組】、【過去組】ともに1勝1敗。

決着は、第3試合・・・

ピタゴラスちゃんvsラマヌジヤンちゃんで決まりますーー』

(第27話へ続く)

第26話 デカルト VS フェルマー（後書き）

（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

次回予告

1勝1敗で迎えた第3戦。私は、ラマヌジヤンちゃんと相対する。

ラマヌジヤンは完全にベースを掘み、私は防戦一方。

そしてラマヌジヤンちゃんの予言通り、私は…

次回 「 第27話 ペタゴラス VS ラマヌジヤン 」

（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

第27話 ベターラス VS ハイジアン（前編）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つ、ルブラン君がサンジエルマン理事長の子供だつた事。1つ、目の前にタイムマシンがあるつて事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。クラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達3人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジャンちゃんの3人で・・・

哲学バトルが始まった。第1戦はラッセルちゃんが、タレスちゃんに勝利！

しかし第2戦はデカルトちゃんが、フェルマーちゃんに敗北。

1勝1敗で向かえ、勝負の行方は・・・

第27話 ピタゴラス VS リマヌジヤン

~~~~~

## 第27話 ピタゴラス VS ラマヌジアン

「ふえ～ん・・・負けちゃつたです～」

「お～ よしよし。デカ子は頑張ったよ。  
大丈夫、大丈夫・・・

あとはピタ子が何とかするから・・・」

「う・・・」

- ・ 大きなフレッシュナーがのしかかる。だつて、ラマヌジアンちゃん・・
- ・

「」の子、【インドの魔術師】って異名を持つてるからね。

僕の知る限り、数字の感覚は世界一だわ」

つて、部長言つてたし。

「・・・・・・」

わ。ラマヌジアンちゃん、うひひ見てる。

「ほり、ピタ子。早く行つて、勝つてきて!  
もうお腹過(あ)る。とつととバトル終わらせなこと。

ルブラン君、何とかしなきゃいけないんだし」

「うん……」

そう。バトルは主要なポイントだけ描かれているけれど…… 実際は1試合1～2時間で繰り広げられていた。

「 もう1~2時過ぎ……」

過去の世界にきて5時間以上。なのにルブラン城を救つ事に關して、全く進展がない。

「 イ、イングの魔術師だろ! う・・・

哲学者ペタゴラスとして

「 哲学バトルでは負けたくない! い、いざーー! 」

私は屋上の中<sup>あいたい</sup>央に歩み寄り…… インドの魔術師に相対する。

「 どうだ? 」

ラマジヤンちやんが、私にサイロロを渡してくれた。私に振れと言つてゐるね。上等。

「 ……」

私は無言で受け取り、サイロロを振る。

「 ほし・・・」

サイロロが止まる前に、魔術師は言い放つた。そして……

『出ました！ 最終戦のテーマは【】！  
テーマフリーです！！ それにしても西田先生。

今、ラマヌジヤンちゃんは・・・  
確かサイコロが止まる前に、田を画こうとしてましたよ？』

『うーん。今のは、私にもわかりません。  
とにかく彼女は、常人の脳とは別の・・・

神がかり的な何かを持つてますから。

我々では理解し得ない展開が・・・ 待ってるかもしれません』

「な、なんでわかったの！？ 【】が出るって！..」

「・・・・・・・」

ラマヌジヤンちゃんは優しく田で囲つた。

「ナマギーリ女神のおかげで・・・」

またそれか。いや・・・

「未来は、決まっているから・・・」

何ですって！？

『おっヒー。【未来】も、哲学のテーマの一つではありますか・・・

はて？ 西田先生、彼女の発言の真意は？』

『うーん。【ニコートン力学】的なものなのかな？  
あるいは【因果律】の事を言っているのか？

はたまた【ラプラスの魔物】なのか？』

『難しい言葉が、たくさん出てきましたね～』

『正直、言います。ラマジアンけやんだけは、私も解説が難しい  
です。  
とりあえず言葉の説明は置いといて・・・

バトルに注目しましょ～』

「未来が・・・ 決まっている？」

ちょっと。

「ええ。ナマギーリ女神が、そう言つておます」

『冗談じゃない。私はこの世界からしたら、未来から来たのよ。未来  
が決まってるなら、この世界でもルブラン君が死ぬって事になっち  
やうじやん。

「未来は・・・ 決まてなんかいないわ！ サア、勝負よー！」

「ふふ。あなたはナマギーリ女神のおかげで・・・  
未来を歩むのよ・・・」

ま、また・・・。だんだん頭に血が登ってきた私。

「な、何とでも言ひなさい・・・ わあ・・・」

つて、どうやって勝負すんの? 何をテーマにすれば?

「あなた確か・・・ 万物の根源は【数】アルケだと言つた子よね?  
間違つてたら、『めんなさい』

む! ? 部長の時と同じテーマ【根源】アルケか! ?

「例えば時間、例えば位置、例えば元素だつて・・・  
全て数字で表すことが出来る!」

万物の根源は、ズバリ【数】! ! 文句ある! ?」

部長の受け売りだけぞ。

「逆に数字がなければ・・・

私達はこの世界を表現することなど出来ないわ!」

反論できるかしらー? ラマヌジヤンちゃん!

『A ∝ H A ∝

ピタゴラスちゃんといえば、【万物は数なり】の言葉で有名。

「……ヤンツーさんと話こまうが……」「ひでじゅ、西田先生

?』

『かつてガリレオは……

【宇宙は数学の言語で書かれてる】といひ言葉を残しています』

『A～H～ 深い言葉ですね～』

『数学を理解出来なければ……

宇宙に限りず、この世界に関して理解するには難しい。

ガリレオはそう言つてましたんですね。なかなか哲学的だと思いま  
す。

ピタゴラスちゃんの攻撃は、ガリレオを彷彿とさせます』

『A～H～ まずはピタゴラスちゃんの先制攻撃といった所でし  
ょつか』

『でも、このままスマッシュが引かれてがるとは思えません。  
バトルに注目です……』

勝ち誇る私に、スマッシュが口を開く。

「では……あなた達が別世界から来たとしたら?」

え?

「それを、どうやって説明するのかしら?」【数】で説明できるの

？」

な・・・ 今、私達が別世界から来たつて・・・ やつはいたわよね？

『何と、西田先生！』

ラマヌジヤンちゃんから、不思議な発言が飛び出しました。

まるでピタゴラスちゃん達が、未来から来た事を知つていいのうつな？』

『うーん・・・ たまたまなのか、あるいは何かを知つているのか？

真意は分かりませんが、ひょっとしたら・・・』

『ひょっとしたら？ 何でしょ、西田先生』

『最近世界的に研究が進められている・・・

【統一理論】についてちょっとお話を』

『統一理論？』

『4つの力を統一しようとした試みる理論で、まだ未完成の理論です。現在の物理学が、完成を目指している究極の理論なんですよ。

その候補として、数学の【超ひも理論】などがあります。

我々の住むこの世界を、物理・数学で説明しようとしていますか・』

・』

『何やり、難しい話が出てきましたね』

『ええ。我々の住む世界は、薄い膜のようなものだとして・・・。いくつもの膜が重なった世界とみなすんです。

その膜はブレーンワールド・・・

いわゆるマルチバースの中のパラレルワールド、別世界です。

『そういうえば冒頭でも・・・

パラレルワールドがいつと誰つてましたが・・・

ちょっと、わからないですね』 西田先生

『では結論だけ。数学的・物理的に矛盾のない理論だったとしても・・・

それが観測できないのなら、それが実在するともしないとも言えない。

素粒子の動向観測だけでは・・・

ブレーンワールドの存在を100%示せないと言われているんですね

す

『それは、どういって・・・?』

『数学や物理にも限界があるという事です。つまり・・・』

『つまり?』

「この世界は、神なくして語り得ないって事ですわ。

断言します。

あなたのいう【数】では・・・  
この世の全てを語る事は出来ない』

『ラマヌジヤンちゃんの攻撃！

これは、ピタゴラスちゃんの【万物は数なり】を真っ向否定です  
ー。』

『ええ。確かに【数】は、この世の多くの事を我々に教えてくれます。

でも【数】だけでは、この世を語るに限界がある・・・

神でしか語れない事がある・・・

それがラマヌジヤンちゃんの主張かと思われます』

『A～H～ さあ、このラマヌジヤンの哲学攻撃。  
ピタゴラスちゃん、どう動くか？』

「ぐ・・・」

まるで私達が、未来から来た事を知つてゐるようなその口づぶり。

確かに・・・

何がどうなつて、私達が過去の世界にいるのか・・・

今の私には説明できない。

卷之三

先生？

これは早くも勝負ありか?』

「…」のまま勝負がつくるのも…興やめだわ。

あなたの方へ、「あなたの士俵で戦ってあります」

『むむ！？ 何と・・・』  
『勝利目前と思われたラマヌジャンちゃんから・・・』

「あなたの代名詞は確か・・・【ピタゴラスの定理】よね？」  
いいわ。直角三角形で勝負してあげる！」

「何と、直角三角形での勝負の申し入れが！！に、西田先生・・・

直角二角形で・・・何をどう、勝負するのでしょうか?』

『さあ？ 私にもわかりません。

ラマヌジヤンちゃんも私のクラスの生徒ですが・・・

正直、彼女は私にも掴めない所が多くて・・・

す

『何と、神に選ばれし者が・・・私達の目の前にいるわけですね』

『ええ・・・ ただ・・・』

『ただ?』

『・・・ いや、勝負を見守つましょ!』

「直角二角形の3辺のうち・・・ 底辺が12345としましよう。

高さと斜辺が1つ違ひの整数になるなり・・・

それらの長さは何かしら?」

「・・・・・・」

面白い。私にそんな簡単な問題を出すなんて。

【 $a^2 + b^2 = c^2$ 】を満たす【 $a - b - c$ 】をペタゴラス  
数と言う。それを求める手順は、すでに確立されている。

私は自分のリュックから、紙と鉛筆を取り出し・・・ 計算を始め  
る。

数分後

「12345<sup>2</sup> + 76199512<sup>2</sup> = 761995  
13<sup>2</sup> 2

すなわち、残り2辺の長さは・・・

76199512と76199513よー。」

「・・・・・・・」

しばし沈黙のラマヌジヤンちゃん。

「ちょっと時間がかかり過ぎただけで、正解を認めるわ

よしー！ 自信はあったけど、一安心！！

「今度はあなたが・・・何か問題を出して。  
直角三角形でも、何でも構わないわ。

私が答えられなければ・・・あなたの勝ちでいい  
え？ それでいいの？

「じゃ、じゃあ・・・とびつきり難しいの、出すわよ？」

「どうぞ・・・」

最近本で読んだの。オイラー予想つてのを・・・

「 $x^4 + y^4 + z^4 = w^4$  ・・・これを満たす自然数  
はあるかしら？」

私の定理と似ていたから、ついつい覚えちゃったのよね～。数学界  
の大天才と言われるオイラーちゃん。オイラーちゃんは【フェルマ  
ーの最終定理】に挑戦していく中で、この問題に直面したという。

そして上式を満たす自然数はない……。やつ予想したんだけど。

「そんな……簡単な問題でいいの？」

「え？」

実はオイラー自身、この問題に対し……正しこう説明も与えられず、反例（正しくない例）を見つけることも出来ずにこの世を去った……。そう、本に書かれてあった。あの大天才ですが、証明出来なかつたのよ。

$$95800^4 + 217519^4 + 414560^4 = 4 \\ 22481^4$$

どう？ その方程式を満たす例よ……」

「な……」

あ、当たつてゐる……

「せ、正解……」

この反例が見つかったのは……。オイラーちゃんが亡くなつて、実際に200年以上経つてからの事。それを……

ラマヌジヤンはあつさつ？

「な……なんで？」

彼女も、その本を読んだの？

「ナマギーリ女神のおかげ」

う・・・ 続けてラマヌジヤンちゃんは言つ。

「私・・・ 今日のお題、3時までに病院へ行かなくちゃいけないの。だから2時には、学校を早退する事になつていいわ。

時間がないから、今から私が出す問題・・・  
それが最後の問題といつ事にしていただける?」

「え・・・ええ、いいわ・・・」

つ、次が最後の問題・・・

「あなたが答えられたら、あなたの勝ちでいい・・・」

「の・・・ 望む所よ!..」

ああ、言つちやつた。もし、オイラー予想みたいな問題出されたら・・・  
・・ 負けちやうよ。」

「じゃあ、問題。

【世界全ての人気がナマギーリ女神信じていないならば、人類は滅びる】

この命題は正しいかしら? 答えは【真】か【偽】の2択。  
当たればあなたの勝ち。ハズれれば私の勝ち・・・」

「・・・」

『おひとー、西田先生！ 答えは二つに一つの、最終問題。  
しかも【神】がらみです！

果たしてこの勝負の行方は…？』

『・・・・・』

『西田先生？』

『あ、失礼。やつぱりラマヌジヤンちゃんは…。  
ピタゴラスちゃんに勝たせようとしていますね～』

『え？ も、そりなんですか？ でも確かに…。  
勝利目前、いきなりピタゴラスちゃん得意の直角二角形問題を出  
したり…・・・

思えば、途中の数学の問題は…・・・ 全く、哲学に関係ありません。

不思議ちゃんキャラ」とはいえ、勝つ事にこだわってないような気  
がしますね～』

『ええ。ラマヌジヤンちゃんは、勝つ事にこだわってない勝つてま  
す。

間違いありません。ピタゴラスちゃんの勝利を…・・・

彼女は願つてます

『では…・・・ ピタゴラスちゃんは、この問題に答えられると…？』

『もちろん。ところで茂木ちゃん先生は・・・  
【世界全ての人がナマギーリ女神信じていないならば、人類は滅びる】

「この命題の真偽、わかりますか?』

『世界全ての人がその女神を信じなくても、人類が滅びるとは思えません。

よつてその命題は・・・偽です。

どうです? 西田先生?』

『まだまだですね~ 茂木ちゃん先生』

『え? 間違いですか?』

『さあ、どっちでしょ?』

「そんな・・・簡単な問題でいいの?」

れつきのラムヌジャンちゃんのセリフを奪った私。

「【真】よー 間違いない!」

『おや? 【真】なんですか?』

じゃあ、全ての人がナマギーリ女神信じなければ・・・

人類は滅びると、とてもやつは思えませんが…… 西田先生

?』

『解説は…… ピタゴラスちゃんに預けます。  
茂木ちゃん先生も…… 彼女から学んで下せ!』

「前提の【世界全ての人】がナマギーリ女神を信じていない】……  
実は、これ自体が【偽】。

【全て】の否定は、【少なくとも1人は】でない】。  
ラマヌジャンちゃん、あなたはナマギーリ女神を信じているんで  
しょ?」

「ええ……」

彼女は嬉しそうに笑った。

「あなたがナマギーリ女神を信じている時点で……  
前提は【偽】って事よね?」

「ええ……」

ラマヌジャンちゃんは、さらに嬉しそうに笑った。

「【やならば】といつ命題は……  
前提のyが偽の時点で、【真】になる。

だからあなたの言つた命題は【真】…… どう?』

「うん・・・」

笑顔のまま、頷くラマヌジヤンちゃん。

「あなたの勝ちよ。おめでとう・・・」

『おっと！ 何とラマヌジヤンちゃん・・・ 自ら敗北を認めました！』

カン カン カン！！

『ピタゴラスちゃんの完璧な解説。私の出る幕、ありませんでしたね～』

『つて事は・・・ 今回の【爆哲、オンエアバトル】団体戦は・・・

2勝1敗で【タイムトラベル組】の勝利です！！

西田先生、最後・・・ まとめてください』

『今回バトった6人は全て・・・ 著名な数学者でもあります。そのせいでしょう。

全ての勝敗は、論理ロジックのスキについて決まりました。

哲学と論理は密接に繋がっています。視聴者もいい勉強になつたのでは？』

『私も勉強させて頂きました』

『数学や化学、物理学や科学などなど。それら学問の発展と共に・・・

新しい思想や論理が導入され、哲学自体も大いに発展してきました』

『A～H A～』

『学問だけではなく、全てのものは哲学に通じ・・・  
哲学もまた、全てに通じます。

視聴者の皆さんも・・・

日常にあふれる哲学に触れてみてはいかがでしょうか?』

『ステキな言葉、ありがとうございます、西田先生。では・・・  
来週のこの時間も、お楽しみに!』

「・・・・・」

握手を交わした私とラマヌジヤンちゃん。彼女の手はとても冷たかつた。

「おめでとう」

「ありがとう・・・」

勝つた事は嬉しいけど、ちょっと複雑な気分。

「ね? ナマギーリ女神のおかげで・・・  
未来を歩いていくんでしょ?」

「ハヌマジヤンチャとの【ナマギーラ女神】を信じないの」・

「うそ……」

ある意味その女神のおかげで、勝利する事が出来た私。

「なんで…… 私に勝たせてくれたの？」

彼女が私を勝たせてくれた…… それは私自身が一番感じている。

「……」

しばらくの沈黙の後

「その理由は…… もうすぐあなた自身、わかる事になる……」

「……」

相変わらず不思議なオーラを放っている。

「じゃあ…… 私、病院に行くから……」

そう言つと彼女は…… 笑顔のまま、屋上の出口に向かった。

「今度は…… 負けませんわよ~」

タレススチルさん

「ルネも・・・もつと成長せんとな〜ふおえふおえ・・・」

「フルマーちゃんも、スマッシュヤンちゃんに続いて屋上を後にした。

「はわわ〜 パちゃん、勝利おめでとう〜!」

「とつあえず団体戦、僕達の勝利〜!..」

「へ、うん・・・・・・」

この時の私達は氣づいていなかった。

スマッシュヤンがついていた一つの嘘を・・・・・

・・・・・・・・

10分後。

学校を出で、歩道を歩くスマッシュヤンちゃん。

「・・・・・・・・」

ある人物と遭遇する。

「あっがと・・・・・」

その人物は、お礼の言葉を口にした。

「あれで・・・よかつた？」

優しい笑顔のラマヌジヤンちゃん。

「うん。ホントに・・・ありがと！」

その人物は・・・冷たい彼女の手を、しばらく握り続けた。

(第28話へ続く)

第27話 ベターラス VS ハイメンジャー（後編）

次回予告

部長がたてた作戦で、私達は一手に分かれて行動する事に。<sup>ふたて</sup>

私はポール公園に行つて、過去の私をルブラン君の家に向かわせる  
ように。

そして部長とデカルトちゃんは、ルブラン君の家に行つて・・・

次回  
「第28話  
作戦」

卷之三

## 第28話 作 戦（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭つて死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を2つ知る。1つ、ルブラン君がサンジュルマン理事長の子供だった事。1つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学俱楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの3名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。哲学バトルに勝利し、ようやくルブラン君を救うために動き出す。

## 第28話 作 戦

「生乳なまちか～！」この僕が哲学に夢中になつて……  
生乳忘れるとは～！～！」

いや、哲学に夢中になれたんなら…… 哲学者として、いい事では？

「そ、それよりさ。もうすぐ暁の2時よ?  
全然、ルブラン君の事…… 進展してないんだけど?」

「確かに～ デカちゃん達、この世界に来て～  
ルブラン君の為に、何一つ行動起こしてないです～」

「そだね～ う～ん……」

しばらく悩んだ部長。

「ここは二手ふたてに分かれよう

「一、二?」

「僕とデカ子は、ルブラン君の家に。ルブラン君の様子を探つてくれる。

ピタ子は…… なんとか過去ピタを、ルブラン君の家に連れてきて。

過去ピタと、過去ルブラン君をくつづけてあげるから

それは嬉しいけど・・・

「私が過去の自分に遭遇すると・・・マズいのよね?  
部長や『デカルトちゃんが、過去の私を連れてきた方がいいんじゃない?』

「過去の僕や『デカ子も、過去ピタと一緒に行動してるのでだし・・・

みんな、過去の自分と遭遇する可能性はある。リスクは同じよ」

それもそつか・・・

「まあ、ピタ子のルブラン君なんだからわ。  
過去ピタの件は、ピタ子が頑張ってよ。

『デカ子は、ルブラン君のクラスメイトって事で・・・  
彼を呼び出すのに必要だからさ』

「わ、わかった・・・」

とにかく過去の私に直接会う」となく、過去の私をルブラン君の所へよこせばいいわけね?

「『デカ子は、私と行動する事。絶対1人になっちゃダメよ!』

「はいです~」

『デカルトちゃんだけは絶対1人にしちゃいけないタイプ。

「デカ子の役目は、ルブラン君を家に閉じ込めておくか・・・あるいは家から引きずり出して、交通事故の起きない場所へ案内する！」

とにかく事故の遭つた場所から遠ざける事！ それがデカ子の使命！

「了解です～」

部長と別行動つてのは心細いけど・・・

「必ず過去の私を、ルブラン君の家によこすから・・・絶対くっつけてよ！～！」

現在に戻つた時、ルブラン君の彼女になつていると信じて！

「任せて！ 僕、恋のキューピッドになつてみせるから！～！」

「デカちゃんも～ ハちゃんの恋の成就のため、頑張るです～」

私達3人は右手を下に向け重ねた。

「携帯は通じるからや。何か動きあつたら、こまめに連絡し合つ事」

「うん

「はいです～」

「あと最初に言つたように・・・

あまり、こここの世界の住人と接触しない、過去を変えない！

ただし、ルブラン君を救う事だけは例外ね」

まあ、つこうさつきまで・・・  
がつづり過去の住人とバトつてたけどね。

「絶対・・・絶対ルブラン君、助けるわよーー!  
頼んだわよ、部長! デカルトちゃん!」

「ラッセル ラッセル~」

「はいです~」

「うして・・・

私は、ポール公園へ。部長とデカルトちゃんは、ルブラン君の家へ  
と向かつた。

・・・・・

非常口から校舎を出て、裏口から学園の外へ出た私。まず最初に橋だ  
円野商店に向かい、変装用のコートと帽子を買う。その後、ポール  
公園へと向かつた。

「・・・・・」

しばらくトイレの前のベンチに座る私。携帯の時計を見ると午後4時過ぎ。過去の私がここに現れるのは、今から1時間後だ。

「…………」

タイムスリップから9時間が経過している。Jの世界にいたるコモジットは24時間。その3分の1が過ぎてこるので……

「まだ、何の進展もない……」

沈みかけた私は深呼吸する。ここで焦つてはいけない。過去の私がここへ来るまで、心を落ち着かせなければ。

「…………」

もし、ルブラン君が私のラブレターを受け取って……ここに来てくれたなら?

私はどんな気持ちになつて、Jのベンチに座つていただろう?

そんな妄想は、私の中の使命感を増幅させる。

「よし……」

何が何でもルブラン君を助ける……

私はリュックからレターセットと筆記用具を取り出し、便せんの上にペンを置く。

「…………」

「Jはやさつ……」

・・・・・。

「ふう・・・」

携帯の時計を見ると、5時ちょっと前。あつという間に1時間近くが過ぎていた。そろそろだと思った私は、過去の私がやって来る方向と反対側へ移動する。

大きな木の陰に隠れた私。橿円野商店で買ったブカブカの帽子をかぶり、黒い大きめのコートを着ける。そして待つこと数分。

向こう側から、2日前の私達が姿を見せた。

「過去の・・・ 私・・・」

何度見ても、自分自身を見るのに違和感がある。

「・・・・・」

私の視線の先・・・ 3人はトイレへと向かった。2日前と全く一緒だ。

「・・・・・」

携帯の時計を確認すると、5時11分。

「・・・ よし・・・」

1分後。

ドキドキしながら、私はベンチに向かった。トイレからじりじりを見ている過去の私に、顔は見えないよつ・・・

あのベンチに座る。そして「パートのポケットの中にある手紙を、セリげなく置いた。

過去の私が慌ててトイレから出でてくる。私はそのまま分に捕まらないよつ・・・公園を走り去つてこつた。

過去の私は【犯人】（つまり、現在の私）を追いかけよつとするが・  
・やがて歩を止め、ベンチの上の手紙に釘付けになる。

その手紙にはもぢりん・・・

表に【ピタゴラスにせべ】、裏には【チート】と書かれている。

・・・・・。

「はあ、はあ・・・」

公園から少し離れた通りまで走ってきた私。

今頃、過去の私達は

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよー】

とこう内容を確認しているはず。そして過去の私はこいつ思つてこいる。

犯人は私の性格を全くわかつてない。【邪魔するな】なんて言われたら、邪魔したくなるのが私・・・とね。

2日前の私、残念ね。そう書けばあなたは、絶対ルブラン君の家に行く・・・でしょ？

10分程歩き、駅前まで来た私。携帯を取り出すと部長に電話した。

「あ？ 部長？ こちらはうまくいった！

過去の私、そっちに向かうわよ。そちらの状況は？」

「ピタ子・・・それが・・・」

(第29話へ続く)

## 第28話 作戦（後書き）

次回予告

次回予告

ルブラン君の家で合流した私達。ルブラン君は家にいなかつた。

通りの向いからルブラン君がやってくる。事故に遭ったその時間直前に。

## 次回 「 第29話 過去を変えろ！」

397

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1365z/>

---

ピタゴラスちゃんのジレンマ

2011年12月20日21時59分発行